

やはり俺の青春ラブコメは恋人ができてもまちがっている。

ぽぷり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイル最終巻を読んで衝動的に書いた八雪です
最終巻から少し先のお話

書き始めたのが俺ガイル新が出る前だったので色々矛盾してる
とは思いますが、そこはifということで流していただければ幸いです

pixivにも投稿しています

目次

前編

中編

後編

1

29

76

前編

桜はもう散ってしまったが、夏はまだ遠い、そんな季節。

窓の外では、澄み渡る青空にいくつかの白い雲がゆつくりと流れていく。

授業が全て終わった放課後、暖かな日の光が差し込む特別棟の奥の一室はとても過ごしやすい、読書や昼寝にうってつけだ。

そんな空間で、新生奉仕部は静かで穏やかな一時を………：………過ごしているわけでもなく。

「ねーねー、駅前ですごく可愛いタピオカのお店できたんだって！
帰りにみんなで寄ってこうよ！ あ、いろはちゃんはまだ知ってたかな？」

「あー、はい、知ってますよー。でもでも、ぜひ皆さんと行きたいです！
実はクラスの集まりで男子達がドヤ顔で連れて行ってくれたんですけど、下心見え見えでキモすぎでしたし、あんまり楽しめなかつたんですよー」

「分かります分かります、小町のクラスの集まりでもそういうのありましたよ。ああいう『女子ってこういうのが好きなんだろう？』みたいな顔してくるのウザいですよねー。……まあ、いろは先輩のあざとさも同性から相当嫌われるやつですけど……」

「お米ちゃん？ ていうか、その自分のこと名前で呼ぶのも相当あざといっつの」

「小町はいいんですよ小町ですから。でも安心してください、例えいろは先輩がクラスの女子全員から嫌われても、小町はいろは先輩は基本的にクズだけど根はそんなに悪くないって分かっていますから！

あ、今の小町的にポイント高い」

「ぜんっぜん高くない！ 何こいつほんとムカつくー！」

「ま、まあまあ………ね、ゆきのんも行くよね!? ゆきのん、タピオカ大好きだよねー！」

「そ、そんなに好きというわけではないけれど………ま、まあ、そうね。皆が行くのなら………」

女子四人の姦しい声が部屋に響き渡っている。

特に小町と一色がうるさい。この二人、明らかに仲は良くないのに妙に息が合ってる感じするのは何故かしら。

あと、ゆきのんはタピオカ大好きです。さほど興味なさそうなクルな態度見せてるけど、めっちゃタピってるからねこの子。

もちろん俺はそんな女子達の会話に混ざる気力なんてあるはずもなく、定位置となってる長机の廊下側の端っこで、手元のライトノベルに目を落としている。

反対側には女子四人が全員近くに集まっていて、机でシーソーとかしたら俺が吹っ飛びそうなくらいの偏りっぷりだ。

そうしていると、一応俺という存在を認識していたらしい我が妹が、こつちに話を振ってくる。

「あ、お兄ちゃんは来ないでね。ガールズトークするから」

「言われなくても行かねえよ……女子四人に男一人とかアウエー過ぎるわ。ちなみにこの部室でも基本的にアウエーだからね俺」

「比企谷くんはいつでもどこでもアウエーでしょう」

容赦ない口撃が俺を襲う。

いや、うん……ほんとそれなんだよなあ。小町がこの高校に入ってきたつてもあつて、最近ではこいつらウチに遊びに来ることも増えてきた。俺の数少ないホームですら危うくなってきた。

俺は溜息をついて本から目を上げると。

「つか、そのタピオカ店、俺もう行ったんだよ。この前——」

「誰とっ？」

部屋の温度が一気に下がった。何これ、寒くない？ 寒い！

原因は考えるまでもない、こんな冷徹な空気を生み出せるのはこの世に一人しかいない。

そう、俺の心臓まで凍らせて止めてしまおうとさえ思ってたような冷え切った目でこちらを見ている雪ノ下雪乃だ。

「と、戸塚だ戸塚！ 可愛くて天使で可愛い戸塚」

「あー、そういえばさいちゃん、この前ヒツキーと中二とタピオカ飲んだとか言ってたかも」

「……そう」

由比ヶ浜もそう言ってくれたことで、何とか雪ノ下の冷気が収まる。

もうマジ雪の女王……早く真実の愛を見つけてください……。

……………。

「お兄ちゃん、なんで急に赤くなってるの？ すっごく気持ち悪いよ？」

「先輩が気持ち悪いのはいつもだと思えますけどねー」

「いや、その、あれだ。戸塚との嬉し恥ずかしドキドキデートを思い出してだな……」

「さいちゃん、中二も一緒って言ってたけど……」

「知らん離れた。そうだ、写真もバツチり撮ったぞ。見る？ 見るよな。俺と戸塚のタピオカツーショット」

「見せたいんだ……」

何とか誤魔化すことに成功した俺は、一息つきながらスマホを操作する。

つぶねー、自分のしょうもない脳内ネタで照れるとか過去最悪レベルに気持ち悪いことしてしまった……もう雪ノ下関連で愛だの恋だのをネタにするのは完全封印しないと……危険過ぎる。羞恥でうっかり死ぬまでである。

そんな反省をしながらスマホの画面に戸塚とのタピオカツーショット（他に何か写っていた気もするが、トリミング処理済）を表示すると、いつの間にか近くに集まっていた女子達に見せる。

「わー戸塚先輩相変わらず凄く可愛いですね。正直、女としては釈然としないものが………うっわ、なんか先輩の目加工してるし………うっわ」

「引きすぎでしょ……お前らだつて加工しまくってるだろ……」

「うーん、なんだろう、お兄ちゃんの腐った目や根性を見慣れているからかもだけど、違和感すごいね。もうお兄ちゃんは腐ってなきやお兄ちゃんじゃないのかもね。納豆みたくに」

後輩と妹からの容赦ないダメ出しに軽く泣きたくなってくる。

納豆ってなんだ納豆って。俺はそんな粘るタイプじゃねえぞ、むしろ諦めはメツチャ良い方だ。新しいクラスでの友達作りとか考える前に諦めたからね。

……まあ、たまにはちよつと足掻いてみようと思う時もなくはないが。たまにな。

何だか思い出すと死にたくなる黒歴史を思い出しそうになったので、頭を振ってそれを消していると、何やら再び部屋の気温が下がり始めたのを感じる。

これはまたあの方ですね……。

「……雪ノ下？ その、どうかしたか？」

「いえ、随分と楽しそうな写真だと思って。私と撮る時よりも、ずっと」と

「いや別にそんなことは……」

「比企谷くん？ どうして目を逸らすのかしら？」

「……だ、だってお前、最近写真の撮り方に無駄に凝り始めて、タピオカ飲む前に散々撮り直すじゃん……それに付き合っていると、ほら……疲労がな……？」

「私といるのは疲れると言いたいのかしら？」

「そ、そこまで言っていないだろ、そうじゃなくてだな……え、なに？」

大変お冠な雪の女王サマを何とかなだめようとしていたのだが、他の女子達から物言いたげな視線が集まっていることに気付く。

俺が疑問の視線を返すと、女子達はほけーつとした表情で言う。
「ヒツキーとゆきのん、タピオカデートなんてしてるんだ……ちよつと意外かも」

「そうですね、先輩達にしては普通と言いますか……」

「うん、お兄ちゃんと雪乃さんのことだから、何だかんでもなく間違ったデートをしてそうで、小町は密かに心配してたんだけど……」

こいつらは俺達のことを何だと思ってるのか。

……まあ、俺と雪ノ下がクソ面倒くさい奴だったのはいい加減自分

達でも分かってるし、それで周りにも随分と迷惑もかけてきたけど………ごめんなさい。

どう返したものと、ちらと雪ノ下の方を見るが、こういう話題にはまだ不慣れなのか、ほんのりと頬を染めて俯いてしまつて何も言えないでいるようだ。……何だよ可愛いズルい。

仕方ないので、俺が答えることに。

「俺達だつて普通のデートくらいするわ。もうあれだ、タピオカに関しては上級者だからね？ 知ってるか？ タピオカってのは」

「いやそういうのいいですから。照れて話逸らさなくていいですよ。それより写真見せてくださいよ写真！」

「小町も見たい見たいー！ あ、平塚先生にも見せてあげたいな、先生のお陰でウチの兄はこんなに成長しましたつて！」

「見せないから。あと平塚先生にそういうの見せるのはどうなんですかね……」

俺がそう言い、雪ノ下も赤い顔でコクコクと何度も頷くと、一色と小町は揃つて頬を膨らませ「ぶー」とか不満を露わにしている。こいつらやっぱ相性抜群じゃねえの。

平塚先生は他の学校へと移つてしまつたが、連絡先は知っているのでも今でもたまに連絡を取る……のだが、俺と雪ノ下が付き合つたということもあつて、結婚関係の愚痴が更に酷くなつている。

「君達も私より早く結婚していくんだろうなあ……」とか言われてもどう返せばいいか分かんねえよ本当に早く誰か貰つてあげて。

つーか、こういう話題つて俺と雪ノ下がどうつてより、由比ヶ浜的に微妙なんじゃないのかなーと思つて、ちらと彼女の方を盗み見る。しかし、予想に反して由比ヶ浜はにっこりと楽しげな笑みを浮かべていて。

「えー、あたしもヒッキーとゆきのんの写真見たかつたのにー」

……これはもう、彼女の中で何かしらの決着がついたという事なんだろうか。

いや、でも、彼女が持ちかけてきた「相談」というのは、そう簡単に解決するわけでもなく、ずっと続くものだと言つていたが……。

雪ノ下と由比ヶ浜の様子を見る限り、二人とも以前と同じように……むしろ以前よりも仲良くなったように見えるが、たまに一色とか小町が由比ヶ浜に何か吹き込んでるっぽいのが気になるんだよね……。

ただ、こういうのは男が入ってはいけない領域のようで、何を話してるのか聞いたら後輩と妹から罵詈雑言が飛んできたもんだから、もう好きにさせることにした。……不安だ。

そんなことを考えながら溜息をついていると、一色が頬に指を当てたあざといポーズで言ってくる。

「でも先輩達、まだちゃんと付き合ってたんですね。最近はまだつきりそういう雰囲気もなくなってる、つきり先輩が何かやらかして呆気なく切れちゃったのかと思ってました」

「おいちよつと？ 人を勝手に振られたことにするのやめてくんない？」

「いろは先輩とか学校の人達からはそう見えるかもですけど、お兄ちゃん、ウチだと未だにデート前とかそわそわしてて挙動不審だし、どこか変なところないか聞きまくってくるし、鏡の前でウロウロするし、控えめに言ってる相当気持ち悪いことになってますよ」

「それ今言わなくて良くない？ ねえ？」

小町の余計なリークに、雪ノ下は口元をむにむにしながら「へえ……」とか呟いている。何これメツチャ恥ずい！ 顔あつつい！

ぱたぱたと手で顔を扇いでいると、由比ヶ浜も「うーん」と首を傾げながら難しそうな顔で。

「確かにいろはちゃんの言う通り、ヒツキーとゆきのん、あんまり付き合ってるって感じなくなってきたかも……あつ、だ、だからって別にあたしにもワンチャンあるかもとか期待してるわけじゃないからね!？」

「お、おう……」

「つ……でも、恋人らしくと言われても具体的にどうすればいいのかしら」

由比ヶ浜の言葉に、どこか焦りの色を浮かべて雪ノ下が尋ねる。

しかし、これには一色がぶんぶん大袈裟に首を横に振る。

「いえ、二人はそのままが良いと思います！ 分かりやすくイチヤツかれても、それはそれでストレス溜まるといいますか……ウチの生徒会でも、テメエらそれで隠してるつもりなのかってくらい堂々とイチヤツきまくってくれやがる二人がいますよ、名前で呼び合ってるのとか聞く度に仕事押し付けて、こうしてここに駄弁りに来てるんです」

「あ、あはは、いろはちゃんぶっちゃけ過ぎ……ていうか素が出るし……」

一色の言葉に、苦笑いを浮かべる由比ヶ浜。

部員でもないこいつが当たり前のようにここにいる事に関しては、もうツツコむのも面倒になってたんだが、そんな理由があったのね……。

「つか可哀想だろ副会長と書記の子……」

「いいんですよ。むしろ空気読んで二人きりにさせてあげてるんですから、感謝してほしいくらいです。ていうか、先輩だつてリア充は爆発しろとかそういうスタンスだったじゃないですか。自分がリア充側に立った途端に寝返るんですかそうですか」

「そ、そういうわけじゃなくてな……まず、お前だつて十分リア充側だろ。彼氏だつて葉山に拘らなければ、すぐに作れるんだろうし」

「それはそうですね……はっ！ もしかして今の、『葉山じゃなくてもいいだろ……例えば俺とか』って告白のつもりでしたか流石に二股とかありえないんで雪乃先輩かわたしかちゃんと選んでもらえますかごめんなさい」

「はいはい雪ノ下雪ノ下」

食い気味に即答する俺に、一色はむうと不満げに頬を膨らませる。

いやこの回答以外無理でしょどう考えても。例え冗談でも一色とか答えたら確実に死ぬぞ俺が。

雪ノ下は俺の答えにそわそわとしていたが、こほんと咳払いをして調子を整えてから疑問を浮かべる。

「要するに、私達はこれまで通りで良いということかしら……？」

「それは違いますー！」

今度は小町が指をビシツと突きつけて騒がしく言ってくる。うん、人指差すのやめれ。

「現状維持というのはすなわち倦怠期の入り口！ 何の変化も刺激もなく、だからだと付き合って代わり映えしないデートを続けて、一緒にいるのに心は離れていくばかりで、いつしか『もういいか……』ってなって別れるんです！ ……って友達が言っていました！」

「なんだよ友達の話かよ焦らせるなよ。てっきり小町の話かと思つて、何としてでも相手の男を聞き出して殺つちやおうつて考えてたわ、あぶねーな」

「危ないのはあなたの頭でしよう……」

雪ノ下が頭痛に悩むように頭を抑えて溜息をつくが、俺は真剣だ。妹に寄りつく悪い虫は全て排除するのがお兄ちゃんの役目だ。こういうこと言うと妹からはウザがられて虫どころか無視されるけど、それでもお兄ちゃんにはめげない！

すると由比ヶ浜も小町の言葉にうんうんと頷いていて。

「あたしも似たようなこと聞いたことあるかも。最初は良いんだけど、だんだんデートプランが雑になったり、記念日も忘れたりして、何だか冷めちゃって別れちゃうって」

「え、記念日？ それってあれか、結婚記念日ならぬ恋人記念日的なやつ？」

「……比企谷くん？ まさか覚えていないとか言わないわよね」

「いやいやいやメツチャ覚えてるから！ ……でも、その、少し確認だけいいか？」

「？」

雪ノ下からの殺気にビビりながらもちよいちよいと手招きすると、彼女は怪訝そうな表情で近くに来る。

俺は口元に手を当てて内緒話のジュエスチャーをすると、彼女も耳を寄せてきたので、ヒソヒソと尋ねる。

「(俺達の記念日って、やっぱあの陸橋の)」

「んっ……」

「!？」

突然雪ノ下がビクツと体を震わせたので、俺も驚いて思わず身を引いてしまう。

な、なんだよ、いきなり変な声出すなよドキドキするから……。

「せんぱーい……そういう事は二人きりの時にやってほしいんですけどー」

「違うマジでホントそういうのじゃないからマジで」

他の女子達からの冷ややかな視線が痛い……こんな所でそういう事するわけないだろ、どんな性癖だよ一発で振られるわ。

雪ノ下は顔を赤くしてぼしょぼしょと呟く。

「ごめんなさい、耳弱くて……」

「そ、そうか……いや俺も悪かった……」

何だこの空気むずむずする……。

それは雪ノ下も同じだったのか、深呼吸をして気を取り直すと、俺の耳元に口を寄せて囁く。

「(あの陸橋の日でいいでしょう。そ、その……お互い、こ、こくは……く……したわけだし……)」

最後の方はほとんど聞こえないくらいの小さな声でそう言い終えると、照れた様子ではにかむ雪ノ下。

なんだこの可愛い生き物ヤバ過ぎる何がヤバかって全てがヤバくてヤバイ。

そうやって、雪ノ下のあまりの可愛さに思考がバグって機能停止しかける俺だったが、小町の声によって現実に引き戻される。

「ふむふむ、今かすかに陸橋って聞こえた！ 告白の場所はそこか!!」
「おかしいでしょどんだけ地獄耳なんだよお前やめろ。雪ノ下レベルだぞそれこえーよ」

「何故そこで私が出てくるのよ。仮に私が地獄耳だとして、それであなたに何か不都合なことでもあるのかしら?」

「ないです」

そうやって雪ノ下の鋭い詰問から逃れている間に、他の女子三人はどここの陸橋だろーきやはと盛り上がっている。

どうせこういうのは止めようとする程向こうも盛り上がって手がつけれなくなる事が容易に想像つくので、もう好きに話させることに。雪ノ下の方は照れて止めるどころじゃなさそうだし。かわいい。そして話が一段落したのか、やがて小町がこつちを向いて言ってくる。

「つまり、お兄ちゃんと雪乃さんは、まずお互いの呼び方から変えてみるべきだと思うんだよ！」

「何がつまりなのか全く分かんねえ……自分が参加を許されていない会議の結果、唐突に面倒事を押し付けられるのは割とあるあるだつて平塚先生も愚痴ってたけど、そういうの凄く理不尽だと思います」

「呼び方……」

どんな話の流れでそんな結論に至ったのかは知らないが、とりあえず軽くあしらって躲そうと思つたのだが、雪ノ下は真面目に受け取つてしまったらしく、恥ずかしそうにしながらも真剣な声色で呟いている。

それを見た小町の目がキラリと光る。

「雪乃さんもお兄ちゃんから下の名前でもらいたいですよね！」

『雪乃』つて！」

「そ、それは……えつと……」

おい押されるな雪ノ下頑張れお前は出来る子のはずだ。

心の中でそうエールを送っていたのだが、一色もうんうんと頷いていて。

「確かに一番分かりやすい変化といえは呼び方ですよー。ウチの生徒会の二人もそうですし……ちっ」

「いろはちゃん怖いってば……でもさ、呼び方変えるのって何も恋人までいなくても仲良くなれば普通にあるよね。あたしもヒツキーとかゆきのんとか、あだ名で呼んでるし」

「俺は未だにヒツキーは悪口入ってると思ってるんだが」

「あはは、そんなことないってば、可愛いじゃんヒツキーつて！ それに、今更変えてつて言われても……」

そう言いながら、由比ヶ浜は少し上の方を見て何か考え込んだあ

と。

何やら、頬を染めてもじもじとし始めて。

「……は、八幡、とか?」

「つ……ヒ、ヒツキーでいい。ヒツキー最高。これ以上ないってからのあだ名だわヒツキーって」

もうほんとこういう不意打ちやめてほしい、心臓に悪いわ心臓に……不整脈起きるレベル。

あと、もう一つ切実な理由としては、俺の彼女さんから凄まじい殺気が飛んできてるからやめてほしい……こっちはガチで心臓止まるレベル。

俺はこの空気を変えようとゲフンゲフンとわざとらしく咳き込んでから言う。

「まあ、そういうのは無理に変えても余計きこちなくなるってのもあるしな。自然に任せるといふか、前向きに検討するよう善処するといふ方向でいいんじゃないか」

「それ絶対しないやつだし……ヒツキーってほんとと女子のこと名前で呼ばないよね。ほら、隼人くんは基本名前呼びじゃん」

「俺をあんなのと比べるなよ……つか、俺にだって下の名前で呼ぶ女子くらいいるぞ」

「えっ、だ、誰!?!」

由比ヶ浜は意外そうに身を乗り出してくるが、他の三人は俺の言わんとしていることの予想はついていられるらしく、呆れた溜息をついている。

俺は珍しく胸を張って堂々と宣言する。

「もちろん、小町のことだ」

「あー……うん」

由比ヶ浜が凄く残念なものを見る目をこっちに向ける。

そして小町はというと、ほとんど感情の色が見られない死んだ表情で両手を上げる。

「わーい、きもーい」

「あの、喜ぶが蔑むかどっちかにしてくんない……?」

「きもーい」

そつちが残つちやつたよ……。

まあこれは小町なりの照れ隠しという可能性も……うん、ないね。本気で気持ち悪がつてる顔だねこれ。

もう兄離れの時期なのかなあ……と肩を落としていると、一色がニヤニヤと口元を抑えながらこんなことを言ってきた。

「あんまり気にしない方がいいですよ。お米ちゃん、先輩の前ではこういう態度ばっかかもしれないですけど、わたし達の前ではお兄ちゃんに彼女さんが出来てちよつと寂しがってるっぽい所も見せてますから。兄離れしようって頑張ってるんですよ」

「いやほんとそういうのいいですから。そういうの全然ないし。意味分かんないし」

「ほら見てくださいよ、ガチで照れてますよこの子」

「照れてないですから!!」

「ああもう、小町ちゃん可愛すぎっ!」

「わわっ! な、なんですとか結衣さんまで!!」

頬を朱に染めてぱたぱたと腕を振り回す小町に、由比ヶ浜は抱きついて撫で直し、雪ノ下はお姉さんらしく見守るように微笑んでいて、一色はお気に入りのおモチャで遊ぶような楽しげな笑みを浮かべている。

そして俺は、そんな愛らしい妹の姿に、いつもの『世界一可愛い』とか『妹さえいればいい』とかそういった言葉が浮かぶ余裕もないくらいに胸を締め付けられ、ただ一言だけ呟く。

「もうシスコンでいいや……」

「最初からそうでしょう。重度の」

雪ノ下からの鋭い言葉も今は効かない。妹成分で満たされたお兄ちゃんは最強だ。

しかし小町もいつまでも押されっぱなしでいる程甘くはなく、はつと何かを思いついた表情を浮かべると、勢いよくこつちを向く。

「ていうかお兄ちゃん、小町だけじゃなくて結衣さんのことも名前で呼んだことあるじゃん!」

「は？ そんな事あるわけ……………」

「え、先輩なに止まっちゃってんですか、もしかして本当にあるんですか？」

一色がかなり意外そうな顔をして聞いてくる。

…………いや落ち着け。思い当たるフシはなくてもないが、小町が周りからの矛先を自分から逸らそうとハツタリかけてきてる可能性も否定できない。

俺は小さく息を吐いて気持ちを落ち着けてから、はぐらかす。

「俺がそんな簡単に女子の名前とか呼ぶわけねえだろ。中学時代、ちよつと話すようになった女子のことを思い切つて名前呼びしてみたら、『えーと、名字でいいよ？ 比企谷くん』とかドン引きされて死にたくなつたからな。俺はその日以来——」

「カラオケ」

「待て、ほんと待つて。なに、何が望みなのか？ 金？」

小町の一言にあえなく撃沈する…………ふええ、妹が強すぎるよお…………。

そう、あれは由比ヶ浜の誕生日祝いでカラオケに行った時のこと、つい流れて彼女のことを名前で呼んでしまったのだ。

ただ、あの時は由比ヶ浜自身が考えた『ゆいゆい』とかいう安直かつ頭悪いあだ名に紛れさせる形で上手く誤魔化しながら呼んだはずで、呼ばれた本人以外は気付かなかつたとばかり思つてたんだが…………。

「ふつふつふつ、小町を欺けると思つたら大間違いだよ！ なんとつて、ずつと近くでお兄ちゃんのこと見てきたんだからね！ あ、今の小町的にポイント高い」

こんな所で暴露するのはポイント低すぎるんだよなあ…………。

ちらと由比ヶ浜のを見ると、赤い顔でそわそわと視線を彷徨わせながら髪をいじつていて、俺の視線に気付くと「えへへ…………」と照れ笑いを浮かべる。

「い、一回だけだよ、一回だけ」

「一回だけでも先輩が名前呼びするとか十分驚きですつて…………せー

んぱいっ！ わたしのことも名前前で呼んでみてください！」

「いいぞ、いろはす」

「ほらこの捻くれっぷりですよ。どう思います雪乃先輩？ 彼女として」

「そうね、由比ヶ浜さんのことは名前前で呼ぶのに、彼女である私は呼ばない理由についてはとても興味あるわね。とても」

「い、いや、だからあの時は由比ヶ浜が誕生日ってのもあつてだな……」

「そう、じゃあ私の名前も誕生日しか呼ばないつもりなのね。あと半年以上あるのだけれど」

ヒエツ……。

雪ノ下からの恐ろしい圧力に、俺は縮こまることしかできない。

もう何というか、最初から分かっていたことだが俺と雪ノ下の間にはハッキリとした力関係が存在している。家でのウチの親父の気持ち少し分かってきた……分かりたくなかった……。

そんな中、一色が何かを思い出したように。

「あれ、そういえば先輩、あの子のことでも名前前で呼んでませんでした？

ほら、クリスマスイベントの時の……」

「あー、もしかして留美ちゃん？ 確かにヒツキーって、結構気難しそうな留美ちゃんと最初から割と話せてたよね」

「千葉村の時のあの子ですか！ ふーむ、意外なところから新たな候補が……」

悩ましげに腕を組む小町に、こつちの方が頭痛くなってくる。

何の候補だ何の。いや知りたくねえわ。

「留美は小学生だったし名字で呼ぶ方がなんかアレだろ……もう中学生だけで」

「つまり小学生でない名前前で呼びたくないということね。悪かったわね、小学生ではなくて。ロリケ谷くん」

「今の発言でロリコン認定はおかしいでしょうどう考えても」

俺は子供は割と好きだが、決してロリコンではない。

というか、葉山みたいな爽やかイケメンが子供と仲良くしていると

「子供好き」ってプラス評価になるのに、俺や材木座みたいなのが同じことすると「ロリコン」ってマイナス評価になる理不尽な世の中に一言申したい。

ともかく、何か先程から俺ばかり責められている気がするので、こちらで反撃しておく。

「つか、俺ばつか言われてるけど、お前らだって男子のこと下の名前で呼ぶってそんなねえだろ。特に一色は俺のこと名字すら呼ばないから、そもそも俺の名前知らない疑惑あるぞ」

「やだなーそんなことないですよー。最初の方はともかく、今はもう流石に知ってますってー」

「そうか、ちよつと安心……おい、お前それ、最初はやっぱ俺の名前覚えてなかったって事かおい」

「てへっ☆」

てへじやねえよ、あざといよ、でもちよつと可愛いじゃねえか。

一方で小町はきよとんとした表情で。

「小町は普通に男子の名前呼んでるじゃん。ほら、大志くんならお兄ちゃんも知ってるでしょ」

「そうだな今すぐやめろ」

「えー自分から聞いといてなーにそれえ……それに結衣さんも、葉山先輩のこと名前で呼んでますよね?」

「うん、まあ……あ、あのね! 隼人くんのこと名前で呼んでるのは、周りもそう呼んでたから流れみたいな感じで、別に深い意味とかは全然ないからね!」

「わ、分かってるっつ……」

わたわたと手を振りながら言う由比ヶ浜を落ち着かせつつ、雪ノ下のことを見る。

他の三人は社交的だし男子の下の名前を呼ぶことだってあろう。しかし、こいつだけはそんな事はないはずだ。

ところが、向こうも何故か挑戦的な目で見返してくる。

「私は比企谷くんの名前を口にしたことがあるでしょう」

「は? いやいやねえだろ。呼び方変えることはあっても、比企谷菌

とかヒキガエルくんとか散々なあだ名でしか呼んでねえぞお前」

「そんなどうでもいい事を覚えていくくせに、肝心なところは覚えていないのね。初詣、行ったでしょう?」

「初詣?」

「えー、ヒツキー覚えてないのー? 行ったじゃん、初詣」

「いや初詣行ったのは流石に覚えてるっての」

「わたしがハブられたやつですわーそれ」

「だからハブってねえから、つか葉山いないならいいとか言ってただろお前」

分かりやすく膨れてみせる一色に適当に返しつつ、あの時のことを思い出そうとしてみる。

……………ん、あれ、そう言われてみると、あの時「八幡」とかいう言葉を聞いた気がする。なんだったか。

もう少しで出てきそうな感覚にやきもきしながら首を傾げていると、小町が目を輝かせて身を乗り出してくる。

「なにになに!? もしかしてあの時雪乃さんと二人で帰った時に何か面白いイベントとかあったの!」

「ねえよ、ねえ。そもそも、二人で帰ったのだからお前がわざとそう仕向けて……………あ」

「やつと思いい出した?」

「思いい出した!」

そうだあの時、初詣帰りに小町がわざとらしく取って付けたような用事を口にして、俺と雪ノ下を二人で帰らせるように仕向けた。

そこで俺は空気読まずに小町の用事に付き合おうとしたところ、小町から酷い罵倒を受けた。それが雪ノ下のツボに入って…………。

「雪ノ下お前まさか、小町が俺に言った『バカ! ボケナス! 八幡!』とかいうのを笑いながら繰り返してたが、それをカウントしてるんじゃないだろうな」

「ええ、その通りよ。ほら口になっているじゃない、あなたの名前」

「ただの悪口なんだよなあ…………」

酷いオチに大きな溜息が溢れる。

まあ、でもあれだ。こういうのも俺達らしいというか、妙な安心感を覚えてしまうのだから、俺は俺ですっかり雪ノ下に調教されてしまったと言えるのかもしれない。なにそれ、そっちの女王様の素質もあるんじゃないの雪ノ下さん。

ともあれ、俺も雪ノ下も相変わらず色々と間違っているわけで、そんな俺達が普通の恋人みたいなのをするのはそれこそ間違いだとも言え、ならば逆説的に間違っている俺達が間違っていることをする事こそが正しいと言えるのではないだろうか。

マイナスとプラスを掛けるとマイナスになるけど、マイナスとマイナスを掛けるとプラスになるみたいだ。違うか、違うね。

ただ、さつきも俺達がタピオカデートみたいな普通の恋人っぽい事もしているというのを聞いた由比ヶ浜達が意外そうな反応してたわけだし、大きくは外れていない気がする。

そんな俺達のやり取りに呆れた様子の一色は、やれやれといったように肩をすくめながら。

「ほんと、付き合っても相変わらずですねーお二人は。まあでも、もうそれでいいんじゃないですかね。ていうか、雪乃先輩が恋人っぽく振る舞うっていうのは可愛いと思いますけど、先輩が同じことするとキム……えーと……キツイものがありますからね」

「お前最初キモいって言おうとしただろ。つか言い直してもあまり変わってないからね？ 分かってる？ 分かれ」

「小町としてはもうちょっと恋人らしくしてほしいんですけど、まあ、ごみいちゃんですからね……はあく、お兄ちゃん中学の頃も痛々しかったけど、あの頃はまだ恋愛には前向きな感じになったのになあ」

「そういうヒッキーちよつと想像できないかも……あ、でも、中学の頃は女子のアドレス聞こうとしたり頑張ってたんだっけ？」

「おいやめろ。人の黒歴史掘り起こすと大変なことになるぞ。主に俺が。具体的に言うとか奇声を発しながら悶える」

「それはもうR指定が付くくらいのはホラーね」

人のことをR指定呼ばわりする雪ノ下だが、それには俺も同意できるので何も言えない。

中学の頃はただただ無知で自分を客観視できず、本当にいろんなことをやらかした。もしもタイムマシンがあったら、中学の俺を監禁して一日中説教したいくらいだ。

……いや、高校でも割と黒歴史作ってるな俺。

結局は痛さのベクトルが変わっただけで、俺が黒歴史量産人間だといふのは変わっていないのかもしれない。なにそれ死にたい。

そうやって暗い気持ちになっていると、一色がふと思いついたように言ってくる。

「そういえば、クリスマスイベントの時の折本さんでしたっけ？ あの人おな中でしたよね？ 昔何かあった感じ出してきましたけど、わたした的には先輩が告って振られたと予想しているんですが、どうでしょう？」

「……………黙秘権を行使する」

「いろは先輩せいはいです」

「ねえちよつと？ なんでお前が答えるんだよやめろ」

「ていうか小町ちゃんさういうの知ってるんだ……………」

「お兄ちゃんのやらかしは一年にまで伝わってきましたし、それこそお兄ちゃんが卒業したあとも一部語り継がれてましたからね…………妹としてもう恥ずかしいのなんのって…………」

小町に迷惑かけたのは悪いとは思いますが、俺のほうが恥ずかしいし死にたい。

もうほんと、なんでよりもよって折本なんていうカーストトップ相手にやらかしてんだ俺、バカなの？ 死ぬの？

とうるか、俺の黒歴史掘り起こそうコーナーみたいなこの会話の流れおかしいでしょ絶対。

このままだと俺の精神がすり減るばかりなので、何とか違う話題に持っていこうとあれこれ考えていると。

「…………ああいうのが好みなの？」

雪ノ下から探るような視線を送られる。

え、なに、それに俺が肯定したら、「それあるっ！」とか言い出しちゃうの雪ノ下さん？

……ちよつと可愛いと思つてしまつたが、彼女のイメージ崩壊の方が深刻なので即座に頭を振つて消し去る。

「いや違う、全然違う。ただ俺とも結構話してくれたつてだけで勘違いして玉砕しただけだ。つか、葉山と同じ反応するなよ……」

「えつ、ヒツキー、隼人くと恋バナとかすんの……?」

「マジですか葉山先輩の好みのタイプ教えて下さい今すぐに」

「知らねえ近い近い。流れでそういう話になつただけだつ。ほら、その……葉山とか他の女子とかで出掛けることになつちまつた時の……」

「あー、先輩が生意気にもダブルデートしてた時ですか」

「生意気とかお前にだけは言われたくないんだよなあ……」

俺も平塚先生からは随分と言われたもんだけど。

新しい学校では、俺や雪ノ下みたいな深刻な問題児がいなかつまらなそうに言つていたが、教師としてその感想はどうなんだろう……というか、こんなのがどの学校にもいたら日本の未来を割と本気で心配してしまう。

一色は俺の言葉に「はえー?」とかすつとぼけてたが、気を取り直した様子で小町の方を向く。

「それでそれでお米ちゃん、もつとないの先輩の黒歴史」

「待てやめろ待て。何ちよつと楽しくなつちやつてんだよお前」

「えー、わたしは先輩のこともつと知りたいただけですよー。そうすればもつと扱いや仲良くなれると思つてー!」

「俺の弱みを握つてこき使いたいことは良く分かつた」

「うーん、強烈なのだと、お昼の放送で流す曲をお兄ちゃんがリクエストしたんですけど、それが完全に好きな子へのラブソングで」

「おい止まれそろそろブレーキ踏めマジでそれ以上やるとそこから飛び降りるぞ」

俺が捨て身の脅しをかけると、小町はまた「てへぺろ☆」ポーズ。お前それやれば全部許されるとか思つてねえか万能すぎるだろ。俺が平塚先生にそれ使つたら殴られたぞ。

その黒歴史に関しては、雪ノ下と由比ヶ浜は以前に聞いていたの

いろはちゃん笑いすぎだつて……ぷふつ、くくつ」と明らかに笑いを堪えるのに必死で苦しそうな様子で……。

……………。

ああああああああああああああああああああああああ!!

死にたい死にたいバカじゃねえの俺ほんとバカうおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお!!

違う、違うんだ。

最初は本当に懐メロを聴いてただけなんだ。

でもなんか雪関係の曲が気になってそれでそういう曲を多く聴いてただけで……浮かれすぎだろ俺……恥ずかしすぎる……。

一方で、雪ノ下は顔を真っ赤にしている。

「あ、あの、私まで凄く恥ずかしいのだけれど……」

「悪かったもういつそ殺してくれ……」

もうこれは下手に口を挟めば火に油を注ぐような結果になりそうなので、ひたすら羞恥に耐え忍ぶことにする。いつそ忍みたいにドロンと消えちやいたいよお……。

やがて、ようやく笑いが収まってきた一色は、目尻に涙を浮かべながら。

「はあ、はあ……あーお腹いた……もう、やめてくださいよ先輩、メツ
チャ苦しいです」

「それはこっちのセリフなんだよなあ……」

「え、えっと、でもヒツキーそんなに落ち込むことないと思う! そう
いうの何ていうか……す、すつごく良いと思う! ラブラブっていう
か! カラオケデートとかで歌えば盛り上がるかも! うん!!」

「結衣さん、ウチの兄と雪乃さんが本気で死にかけてるんでその辺で
勘弁してあげてください……」

心優しい由比ヶ浜からの善意のパンチにノックアウトされる俺と
雪ノ下に、流石の小町も止めに入る……でもお前のせいだからね
元々。

由比ヶ浜は自分が更に追い打ちをかけてしまったことに気付いた
のか、必死に視線を彷徨わせながら話題の転換を図る。

「あ、そ、そうだ！ 中学と言えばさ！ あたし、ヒツキーの中学時代の写真とか見たことないんだよね、今度卒アル持つてきてよ卒アル！」

「えっ、普通に嫌だけど」

「えー、ゆきのんというはちゃんも見たいよね？ あ、もしかしてゆきのんは見たことある？」

「私もないけれど………まあ、そうね。彼がどの程度更生したかを確認する資料としては有益でしょうし、皆で見るのもいいかもしれないわね」

「いいですねいいですね、わたしもメツチャ見たいです！ お米ちゃん、今度勝手に持つてきちゃってよ」

「あいあいさー」

「ねえ君達プライバシーって言葉知ってる？ 知らないよね？ 今すぐググレ」

なんで女子ってこんな卒アル見せ合いっこ好きなのん？

俺とか中学の頃の写真全部抹消されても困らないし、むしろ嬉しい。

そして、卒アルといえば、とあることを思い出す。

「つーか由比ヶ浜、お前だって自分の卒アル見せるの拒否して柵の奥に封印しただろ」

「うっ……だ、だってヒツキーに見せるのなんか恥ずかしいし………そんなにあたしの中学時代見たいの……？」

「お、お前やめろよそういう言い方は……見たいというか、これは等価交換つてやつでだな……」

正直に言うとか中学時代の由比ヶ浜の写真とか割と興味あるが、それをそのまま言うとか引かれそうだし恥ずかしいしで、濁した言い方しかできない。

そして直後、冷気を感じて即座にマズイと頭の中で警告音が鳴り響く。

すぐに「雪ノ下の卒アルも見せてくれ」と言っただけで何とかお怒りを鎮めようとしたのだが……向こうの口が動く方が早かった。

しかも、その内容は予期していないものだった。

「比企谷くん、由比ヶ浜さんに卒アル見せろとか言ったことあるの？」

それに、棚の奥にしまったって……それ、いつ、どこでの話？」

「!？」

びくつと、俺と由比ヶ浜の肩が同時に震える。

あれ、これもしかなくても地雷踏み抜いたんじゃないやね……雪ノ下さんが今日最恐の空気出してない……？

加えて、他の二人も目をキラんとさせて即座に食いつく。

「ほうほう、結衣さんが恥ずかしがって卒アルを棚にしまった……と。それってどこにある棚かなー？ お兄ちゃん、最愛の妹に正直に話してみ？」

「ていうかやりますね結衣先輩。もう取っちゃったんですか」

「ち、ちがつ、違うってば！ その時はちよつとウチでお菓子作りしただけで、ホントに何もなかったから！ そ、それに……まだヒツキーとゆきのんが付き合う前だったし……」

「……落ち着いて由比ヶ浜さん。私は別にあなたを責めているわけではないわ」

大慌ての由比ヶ浜に、雪ノ下は優しい笑顔を向ける。

……由比ヶ浜を責めてないということは、誰が責められてるんですかね……うん、俺ですね。

「比企谷くん、どうして黙っていたのかしら？」

「い、いや、でもほら、そういうのってわざわざ言う方がなんか怪しくね？ 『由比ヶ浜の家で菓子作ったことあるけど、何もなかったからな』って。つまり、余計な心配をかけない俺なりの心遣いであって……」

「でもでも、ぶっちゃけ何かあったんじゃないですかあ？ 女の子の部屋で二人きりとか、イチャつくに決まってるじゃないですか」

「イチャついてないってば！ あたしの部屋行っても、何もする事とかなくて困ったし……え、えつと、ヒツキーは撫で回してただけだし！」

「お兄ちゃんが結衣さんを撫で回した!？」

「サブレなサブレ」

焦った由比ヶ浜が少し言葉足らずだったことで、とんでもない誤解が生まれようとしていたので即座に訂正する。

言葉って少しでも何か欠けると意味が大違いだったりするから大変だよね……かといって言葉を重ねすぎてもそれはそれで面倒くせえ奴って思われるし、会話ってマジ高難易度。

一方、雪ノ下はまだ納得していない様子で。

「……………」

「あー……その、悪かった。ちゃんと言うべきだったよな。でも本当に何もなかったから……」

「……いいえ、別にそれに関して疑っているわけではないの。ただ……………」

雪ノ下はそこで言葉を切って、口に出すかどうか迷うような素振りを一瞬見せたあと。

「……………今度言うわ」

「お、おう……………」

そう言われるとかなり気になってしまっただが、無理に聞き出す気にもなれない。この言い方だと、この場では言いたくないという意味にも取れる。

俺達は由比ヶ浜のようにコミュ力があるタイプではなく、それが原因で今までも何度もすれ違ってきた。

一応は、これからはお互い思っていることを素直に言い合うようにしようといった事は決めたが、いつでもそれを実行できるかと言えば難しい部分もあるだろう。それこそ、由比ヶ浜だっていつも全てを話しているわけではないのだ。

俺達は確かに少し進んだ関係になった。

しかし、だからといって完全に通じ合えたということではない。何十年連れ立ったウチの両親だって未だに喧嘩をする。

ただ、通じ合うことはできなくとも、そうありたいと望み続けることこそが大事なのではと、今は思っている。

これから何度雪ノ下とぶつかったりすれ違うことがあっても、離れ

ずにいたいという気持ちはきつと変わらない。だから何度だって問い直し、その都度新たな答えを見つけていく。

そう、決意を新たにしている。

「お兄ちゃん、なんかカッコイイこと考えてる感じだけど、早いところかしてね」

「……はい」

雪ノ下以外の女子三人の視線からプレッシャーを凄く感じる……重い、重いよお……！

× × ×

それから数日後の週末の部室。

相変わらず依頼人が来るわけでもなく、いつものように女子達でワイワイ楽しく駄弁っているという光景が広がっているのだが、以前と全く同じというわけではない。

俺と雪ノ下は喧嘩とまではいかなくとも、どこかぎこちない感じが続いていて、流石にそろそろ何とかしなければと焦り始めてもいた。

雪ノ下は「今度話す」とは言っていたが、その今度というのは中々訪れない。

かといって、本人に催促するというのも躊躇われ、やはり俺自身で気付かなければいけないんじゃないかとも思うのだが、それも難易度が高い。

雪ノ下の機嫌が悪くなった原因などを考えると、今度俺の部屋に彼女を招いて卒アル鑑賞会なんかをやればいいんじゃないかとも思ったが、流石にそれは単純過ぎる気もした。

あまりお粗末な回答を用意すると、余計に険悪になってしまいうリスクもあるので慎重にいかなくてはいけない。

ただ、だからといってダラダラと考え続けるというのも良くないだろう。

前に小町が言っていた倦怠期とは違うが、微妙な空気が長く続くというの悪い結果を生みやすくなるというのとは分かる。

しかし、世のウエイ系リア充達だつて恋人や友達とのいさかいは全くの無縁というわけでもないと思うのだが、どういう感じで元通りになるのだろうか。少なくとも、俺達みたいに果てしなく面倒くさい紆余曲折の末に……というようなプロセスは経ていないと思う。

俺とか、中学時代なんかは基本的に一度何かやらかしたらそれで関係終了、修復不能に陥ってたからね……残機のないアクションゲームみたいだ。なにそのクソゲー。

「——ちゃん。お兄ちゃんつてば！」

「んお!? な、なに?」

その声に現実引き戻されると、妹が呆れ顔でこっちを見ていた。そういえば静かになってるなと思つたら、いつの間にか部屋に二人きりになっている。

「今日はもう終わりだつてば。部屋閉めるから出てった出てった」

「ああ、悪い悪い。あれ、少し早くないか?」

もうそんな時間かと時計を眺めながら聞く。

外を見ても、日はかなり傾いてはいるが、夕日と呼ぶにはまだ早い。すると小町は腰に両手を当てて溜息をつき。

「もー、ほんとに全然話聞いてないじゃん。小町達、今日はウチでパジャマパーティーだから早めに切り上げることにしたんだよ。どうせ人も来ないし」

「あー、了解。つか、一応部長が人来ないとか言うなよ……まあ、誰も来ないに越したことはないんだろうけど」

そう返しながら、手早く帰りの支度を整えると、さつさと部屋を出る。

小町はもう慣れた様子で窓の鍵などを確認したあと戸締まりを済ませ、鍵を指でくるくると回しながら、思い出したように言ってくる。「あ、お兄ちゃんはゆつくりしてきていいからね? 朝帰りじゃなくて昼帰りでもいいから。明日お休みだし」

「え、なにそれ今日は帰ってくるなって言つてんの? ネカフェで一晩過ごせつて? いくらなんでも扱い酷すぎない?」

そもそも、ネカフェって高校生は泊まれないんじゃないか。

そして当然ながら、俺には家に泊めてくれるような友達はいない。
……戸塚、頼んだら泊めてくれるかな……いや、それはそれで俺が
興奮しすぎてろくに寝られない。

俺の抗議を受けた小町はきよとんとした表情で。

「あれ、まだ聞いてないの？」

「なにを？」

「……んー、まあ、いつか。とりあえず寝る場所とかその辺は大丈夫だ
から心配しなくていいよ」

「なんだ、何か隠してんのかこいつ。つかマジで俺は今夜どつかでお
泊り確定なのか。」

「そういや、夏休みの千葉村の時も、小町が俺に内緒で勝手に色々進
めてたな……平塚先生と協力して。」

「昇降口までやって来ると、そこで雪ノ下、由比ヶ浜、一色の三人が
待っていた。」

小町はテンション高く手をぶんぶん振りながら駆け寄る。

「お待ちせしましたー！」

「うん、じゃ行こっか！ お店寄ってお菓子とか一杯買おうよ！」

「あははっ、結衣先輩さつきまでダイエツトがどうか話してたじゃ
ないですかー」

「うっ……い、いいのいいの、明日から頑張るから！ もうメツチャ走
るしー！」

合流するなり、そんなことをワイワイと話す女子達。

「楽しそうでいいね……俺マジでどうすんの。」

「とりあえず小町と一緒に自転車を取りにいった、そのまま押してつ
いて行くしかないわけだが、やがてその足が止まった。」

「いや、袖を掴まれて止められた。」

「……こっち」

「はっ」

「あ、じゃあね、ゆきのんー！」

急に止まった俺達に由比ヶ浜は特に驚くこともなく、笑顔で手をば
たばたと振って別れの挨拶をする。小町と一色は何故かぐつと親指

を立てている。

そして、雪ノ下も挨拶を返すと、他の三人はそのままさっさと歩いて行ってしまった。

「お前はパジャマパーティーとやらには参加しないのな」

「ええ。私は用事があるから」

「用事……もしかして、またあの面倒くさい家族絡みか？ お前のことだから、他の友達と約束とかはないだろうし」

「うるさいわね、あなたにだけは言われたくないわ。そもそも、何故そんな他人事なのかしら。あなたも無関係ではないのだけれど」

「……おいまさか、また俺にあの地獄のような食事テーブルにつけてか言ってるのか」

「いえ、母さんや姉さんは関係ない。ただ……その……」

ここで雪ノ下は何か言いづらそうに口ごもり、視線をそわそわと彷徨わせてから、やがて足元に落としてしまう。

しかし、すぐに顔を上げて意を決したような表情でこちらを見つめてくる。頬がほんのりと紅潮している。

「比企谷くん、今夜は私のところに泊まりなさい」

……………えっ。

中編

俺と雪ノ下は無言で歩き続ける。

雪ノ下のマンションに行く前に買い物を買いたいのことだったので、近くのショッピングモールへと向かっているところだ。

太陽は傾き、うつすらとオレンジ色に染まる空の下、制服姿で並んで帰っている男女二人というのはよくある青春のページというものなのかもしれない。

ただ、放課後の制服デートならまだしも、お泊りというのはイベントの重大性が大違いだ。

いや、でも制服デートもしたことねえなそういや。だって学校の奴らに見られるの嫌じゃん……絶対そういう時に限って会いたくない奴に会っちゃうんだよ葉山グループとか。

それにしても、雪ノ下は最近何か素っ気なく、不機嫌なのかと俺としては色々と頭を悩ませていたんだが、いきなりお泊り誘ってくるとかどういう事なの……。

もしかしてあれか、サプライズってやつか。なんか由比ヶ浜達も協力してる感じ出してたし。女子のサプライズ好きは異常。

しかしまあ、サプライズなら俺の得意分野だ。

なんせ、ただ喋るだけで周りから「比企谷くんってそんな声してたんだ……」って驚かれるからね。もつと言えば、ただそこにいるだけでも「うわっ、いたんだ」ってのもある。

つまり、俺は存在自体がサプライズとも言えるわけで、女子のサプライズ好きと合わせて考えると……。

そうか、俺はモテ男だったのか――。

「また何かくだらない事を考えているわね」

「失敬な、俺だっていつもいつもくだらない事ばかり考えてるわけじゃない。他にも色々考えてる。戸塚のこととか、小町のこととか

「……あと戸塚のこととか」

雪ノ下は窺うように横目でちらと俺を見ながら一言。

「……私のことは？」

「え……いや、まあ、たまには………なんだよやめろよそういう空気じゃなかったじゃん……」

彼女とは反対方向を見てがしがしと頭をかく。なにこれムズムズする……。

雪ノ下も雪ノ下で若干そわそわとした様子を見せつつ、調子を整えるようにこほんど咳払いをすると。

「そういう空気でしょう。これから制服デートするのだから」

「あ、やっぱそういう流れ……？ 適当に飯だけ買って帰る感じじゃない？」

「なに？ あなた、葉山くんと女子二人で制服ダブルデートなんてしていたわよね？ それは良くて、私とはダメと言っているのかしら？」

「い、言っていない言っていない。……お前もしかしてあれか、この前部室でその話が出て対抗心持ちちゃったの？ 負けず嫌いゆきのんが出てきちゃったの？」

「……………」

雪ノ下の足が止まった。

「……え、なに、俺としてはただの軽口のもりだったんだけど……。売り言葉に買い言葉的な感じで、雪ノ下からも「調子に乗るな」みたいな意味合いの罵倒が飛んでくると思ってたんだけど……。」

彼女は俯いてしまい、その黒髪が顔を覆って表情が分からない。しかし、隙間から覗く耳が真っ赤になっているのは分かった。

もちろん、それを指摘なんてできるはずもなく、それどころかこっちまで妙な気恥ずかしさが伝染してくる。

そのまま無言の時間が少し続いたあと。

雪ノ下は、何事もなかったかのように顔を上げ、髪に手を入れて後ろに靡かせながら言う。

「ええそうよ、だから何？ それが何か悪いのかしら？ お泊りの件

だって、比企谷くんが由比ヶ浜さんの部屋で二人きりだったと聞いてそれに対抗したのだけれど、それが何か？ どうやら比企谷くんはすぐに忘れてしまうようだけれど、私はあなたの恋人なのよ？ 恋人が相手と最も親しい間柄でいたいと思うことは何もおかしいことではないでしょう？ そもそも、恋愛関係というのは相手を独占したいという思惑はどうしても付いてくるものだし、その人の一番になりたいという気持ちがあれば自然と

「すみませんでした、俺が悪かったです」

即座に全面降伏を示し、深々と頭を下げる俺。

び、びつくりしたあ……！ なにこれメツチャドキドキしてる、俺顔気持ち悪いことになってない？ あ、それはいつもだったね！

雪ノ下の言葉はいつだって切れ味鋭く、奉仕部に入ってから散々俺の心を抉ってきたわけだが、それが恋愛方面になるとまた別の意味で破壊力が凄い。

前までは心臓グサグサやられてたけど、今じゃ心臓バクバクだよ。大丈夫？ 早死にするんじゃないの俺。

ていうか雪ノ下の方もちよつと赤くなっちゃってんじやん……あと一氣にまくし立てたせいで息も上がってるし……かわいい。

こういった彼女の負けず嫌いなところだったり、切れ味鋭い言葉のナイフだったり、俺も以前からよく知っている性質でも関係性が変わることでも印象も大分変わってくるのだから人間というのはやはり分からないものだ。

変わらないものでも変わって見える。そういった不安定な事柄は以前までの俺であればマイナスなものとして捉えていたのかもしれないが、今ではそれを好意的に受け止め楽しんでる自分もいるのだからこれも成長というものなのだろうか。

そして関係性の変化にもなう印象の変化というのは、俺から見た彼女だけではなく彼女から見た俺にも当然ある。

最初は俺の言動全てをゴミカス扱いで全否定してきた彼女も、今では俺の言動の半分くらいをゴミ扱いで半否定くらいになっている。

……あんまり変わってねえな。

× × ×

モールについた俺達は、まず服を見に来ていた。まあ俺達つか雪ノ下がだけど。

由比ヶ浜へのプレゼント選びの時は、誰かにプレゼントを選ぶという事に慣れていないせいで服を引っ張って耐久力を調べるとか大分アレなこととしてた雪ノ下だが、自分の服を買う分にはそんなことないらしい。

まあ、ファツション自体に全くの無関心というわけではないということだろう。普段の私服もどれもよく似合ってるし。

だから、こういった彼女が試着して彼氏が感想を言うというのは恋人の定番イベントだというのは理解はしているのだが、センスでいえば俺より雪ノ下の方が遥かに良いわけで、これ俺に聞く意味あるのかな……とか思わなくもない。

そんなことを考えながらぼーっとしていると、目の前の試着室のカーテンが開かれ、白のワンピースに薄い青のカーディガンというお嬢様風なファツションに身を包んだ雪ノ下が現れる。

「どう？」

「……いい」

「……あなた先程からそれしか言っていないけれど、真剣に考えているのかしら？」

今回で同じ問答を三度繰り返したことになり、雪ノ下から不満げな目を向けられてしまう。

しまった、答え方間違えたか。やはり「答えは沈黙」……違うか、違うね。

「いや俺服とかよく分かんねえし、ピ○コみたいなファツションチェックとかできねえし……それにあれだ、こういうのは余計な言葉を付け足したりせずに浮かんできた感想をシンプルに言った方がむしろ心がこもってる感じしない？ 知らんけど」

「そうやって無駄な屁理屈をこねる頭をもう少し他のところに回せな

いものかしら………それに、何がシンプルに、よ。比企谷くんあなた私に告白する時は頑なに『好き』と言わずに、あんなに長々と言葉を重ね続けて、挙句の果てには私の人生を歪めるだとか訳の分からない言い回しまで始めて」

「おいやめろそれ俺の人生でワーストレベルの黒歴史だからマジで」
『本物がほしい』の時よりも？」

「ねえその俺の黒歴史掘り起こそうキャンペーンこの前からまだ続いてるの？ そろそろホントに死んじゃうよ俺？」

もう変な汗とかメツチャ出てるし、心臓も嫌な鼓動しちゃうから。というか、今思い返しても相当アレな告白した俺。まあでも、それでオーケーする雪ノ下もアレだし、どっちもアレでおかしい者同士でお似合いつてアレだろう。あれれ〜おかしいぞ〜。

と、ここで何やら周りからクスクスといった控えめな笑い声が聞こえてきた。

俺と雪ノ下がはつとして周囲に注意を向けると、どうやらたまたま近くにいた女子大生と思われるお姉さん二人組が俺達の会話を聞いていたらしく、微笑ましそうにこちらを見ていた。

なにこれ超恥ずかしい……。

去年の文化祭の時も、ステージ脇からインカムで雪ノ下といつもの部室でのノリで話してたら他の実行委員達に聞かせてしまったことがあったが、その時とちよつと似てる。何も成長していない……。

俺はとてつもない居心地の悪さを感じつつ、頭をガシガシとかきながら目を逸らしてボソボソと呟く。

「や、なに、とにかく全部よく似合ってるから……」

「そ、そう、ありがとう……」

雪ノ下も赤い顔で小さく答えると、逃げるように試着室のカーテンを閉めてしまった。

……雪ノ下がああやって照れているのは可愛いけど、俺も多分同じくらい顔赤くなってるんだよね……それは何というか凄く気持ち悪いと思います。

ともかく、この場にいるのもお姉さん方からの視線が気になるし、

カーテンの向こうから聞こえてくる衣擦れの音が落ち着かないというのもあって、少し離れて待つことにする。

「ん、ヒキオじゃん」

「あ、ヒキタニくんはろはろ」

声の方を向くと、二年の時に同じクラスだった三浦優美子と海老名姫菜が目に入る。というか海老名さんは今も同じクラスだ。

どうやら二人はクラスが別れても交流は続いているらしく、そのことを好ましく思っている自分もいる。まあなに、奉仕部で三浦達のグループ関係の依頼も結構あったからね。

俺は「うす」とどっかの氷帝の腰巾着みたい短い返事をしながら軽く会釈する。

なんか最近、学校外でも知り合いから声をかけられることがちらほら増えてきた気がする。以前までは最強の性能を誇っていたステルスヒツキーも衰えたもんだぜ……。

「てかヒキオって服見たりすんだ超意外。センス悪そう」

「服くらい誰でも見るだろ……センス悪いのは否定しないけどよ」

「腐腐腐、隠さなくてもいいよヒキタニくん。君は一人で服見るタイプではないから……ズバリ、隼人くんとデート中!!」

「いや普通に違うから……」

「なーんだ、はやはちじゃないんだ。じゃあ普通に雪ノ下さんとデートか」

海老名さんは残念そうに言うが、ついでとばかりに平然と言い当ててきて胸の内をきゅつと掴まれるようだった。

この人察し良すぎでしょ、普段はアレなのに油断できない辺り三浦より怖いんだけど……。

言葉に詰まっている俺を見て、三浦は意外そうな顔で。

「へーあんたら放課後に制服デートなんてするんだ」

「……デートっていうか、まあ、なに、ただの買い物みたいな……」

「だからそれデートじゃん」

「客観的に見ればそうなるかもしれないが、主観的に見た時に必ずしも

同じ結論になるとは限らないってのは往々にしてある事だな……」
「なにそれ意味分かんないキモい」

ひどい……。

いや、うん、普通にデートだけどさ。雪ノ下もそう言ってたし。

ただ、だからといって素直にデートだと言うのも何だか抵抗がある
というか……確かに思考回路がキモいな俺。元々だけど。

三浦は呆れたように溜息をつく。

「結衣もなんでこんなのがいいんだか。さつさと忘れてもつと良いの
見つければいいのに」

「ほんとそれな」

「あんたが言うな」

「まあまあ、結衣も気持ち切り替えたっていうか、なんか吹っ切れた感
じあつて今でも楽しそうだし、いいんじゃない？　そこは優美子も安
心してたでしょ？」

「……べ、別にそこまで気にしてるわけじゃないし」

海老名さんからそう言われ、ぷいっと顔を逸して言葉を濁す三浦。
なにこの可愛くて良い人。

以前までは二人とも別世界の人間で、なんなら今も割とそんな感じ
だが、去年何度か関わる機会があつて彼女達のことを知ったことで、
印象も大分違うものになった。

これも奉仕部に入らなかつたら知らないまま卒業していたのだろ
うが、それを惜しく思う自分がいる。

俺がこんなこと思う筋合いなんでないのだろうか、この二人が由
比ヶ浜の友達で良かったと思う。

そうやって胸に暖かさを感じながら二人を見ていると、急に背後か
ら冷気を感じる。

……うわあ振り向きたくねえ……また俺何かやっちゃいました？

「あ、雪ノ下さんはろはろ」

「は………こんにちは海老名さん、三浦さん」

つい海老名さんに釣られて同じ挨拶を返そうとして、何とか軌道修
正する雪ノ下。

そういえばコイツ、帰国子女だったな。それなら「ハロー」の方もそれなりに馴染みはあるのかもしれない。はろはろ。

雪ノ下はじつと二人を見て尋ねる。

「随分楽しそうだったけれど、比企谷くんと何か話していたの？」

「別に……てか何その目。もしかしてあーしらがヒキオに何かちよっかい出したとか思ってるわけ？」

「それは……」

「あんき、普通に考えてあーしらがヒキオに言い寄るとかありえないっしょ。頭良いくせにそんな事も分かんないの」

「……………」

ひええ……メツチャギスギスしてるよお……。

この二人、何だかんだ最近はそれなりにマシになったとは思ってたんだが、仲の悪さは相変わらずのようだ。

雪ノ下は顎に手を添えて考え込んでいる様子で、三浦は不機嫌そうに腕を組んだまま雪ノ下から目を逸らさない。一方で海老名さんはそれ程気にした様子もなく、二人のことを眺めているだけだ。

どうしよう、止めたほうがいいのか、でも怖いな、海老名さん何とかしてくれないかな……とか腰が引けまくっていると。

なんと、雪ノ下が深々と頭を下げた。

「ごめんなさい。冷静さを失っていたわ。そうね、比企谷くんがあなた達から言い寄られるなんて、どう考えてもありえないわ。むしろ、あなた達への侮辱になってしまったわね」

「えっ……………あ……………」

三浦もここまで素直に謝られるとは思っていなかったのだろう、目を丸くして少しの間呆けてしまう。

つか、俺が女子から言い寄られるのがありあえないってのはもちろんその通りなんだが……ちよつと扱い酷すぎない……？

三浦がそこまで意表を突かれた気持ちは分かる。

以前までの雪ノ下であれば、こうも簡単に折れるということはないかっただろう。それこそ怒涛の口撃で泣かせてしまうまでであったかもしれない。

奉仕部での日々は切れたナイフのようだった彼女をいくら丸くしたのだ。

とはいえ変化というのは必ずしも全てが正しいわけではないし、以前までの彼女から失われたものもあるのだろうか。

しかし重要なのは彼女自身がその変化をどう思っているかであり、少なくとも彼女は今の自分を好意的に受け入れている様子なので、きっと正しいといえるはずだ。

やがて、三浦はそわそわと落ち着きなく髪を触りながら。

「……そ、そんなガチで謝らなくていいし。気にしてないし。あーしも、ちよつと言いい方アレだったし……」

普段は余裕綽々な女王様キアラな三浦だが、予想外のことには結構弱いのが可愛い。前に葉山が知らない女といるところ見た時なんて、ズッコケてたからねこの子。

やがて三浦は店の外に目を向けながら。

「じゃ、あーしら邪魔みたいだし、もう行くから。ほら海老名」

「はいはい。……あ、そだヒキタニくん」

海老名さんは三浦のあとを歩いて行こうとしたが、その足を止めてこちらを振り返る。

その表情は、とても柔らかかなもので。

「今、楽しい？」

「……ああ、そうだな。そっちは？」

「うん、私も楽しい。……具体的に言うと、今のクラス、はやはち的にすつごく良いと思うんだよね！ だって、ヒキタニくんの知り合い、私と隼人くんだけじゃん!! つまり男子の知り合いは隼人くんだけ!! これは何も起きないはずがぶっふっ!!」

「だからあんたはいい加減擬態しろしマジで」

興奮して鼻血を吹き出した海老名さんをズルズルと引きずっていく三浦。

何だろう、絵面は酷いのにこの安心感。

真面目っぽく話していたと思ったらすぐ変な方向へ突っ走ってしまるのは海老名さんにはよくあることだ。

ただ、彼女からの質問を聞いた時、俺はあの修学旅行の最後の日を思い出していた。

あの時、海老名姫菜は、俺となら上手く付き合えるかもと言った。それはもちろん冗談で心にもない言葉ではあったのだが、それでも俺達の間には共有できるものが存在していて、だからこそ彼女は俺にだけ分かるような依頼をしたのだろう。

先程の質問は、そんな俺が自分で出した答えについてどう思っているのか興味があったのかもしれない。俺はあの修学旅行の頃と比べると随分と変わり、いくつかの答えも出した。

だが海老名さんだって全く変わらないなんてことはない。少なくとも、戸部への対応は俺の目から見て確かに変化があるように思う。

とはいえ、俺の答えが海老名さんに何かしらの影響を与えるなんて自惚れるつもりはない。

俺と彼女は共有できるものがあつたとしても、できないものの方が沢山あるし、つまるところ全く別の人間なのだ。

俺は関係なく、彼女は彼女で何かしらの答えを出すし、それも俺のとは全く別のものなのだろう。

それでも、俺は彼女の出す答えに興味があつた。

そして、いつか先程の彼女のように尋ねる日がくるのかもしれない。そう漠然と思つた。

隣にいる雪ノ下も、海老名さんの姿をじっと見て、何か思いにふけているようだ。

やがて彼女は、ぽつりと一言呟く。

「はやはち……」

ねえちよつと流石に葉山まで警戒とかしないよね雪ノ下さん？

同士が出来たって海老名さん喜んじやうよ？

× × ×

次に俺達が向かったのはゲーセンだった。

辺りは様々なゲームの効果音が重なり音の洪水といった感じで、す

ぐ近くにいっても普段の五割増しくらいの声を出さないと聞き取れないくらいだ。

雪ノ下はこういった騒がしい場所は基本的に好まない。ただ、例外もある。

目の前にはUFOキャッチャー。隣には真剣な表情で中を覗き込んでいる雪ノ下。

彼女が手元のボタンを操作するとアームが動き、中にある景品……パンさんの上までやってくる。

「もうちよい右じゃね?」

「これでいいのよ」

何やら自信ありげな雪ノ下。

アームが下りていくと案の定少しズレていて、パンさんを掴むことができず……と思つたら。

爪の部分がぬいぐるみについているタグに引っかかり、見事取り出し口へと落とすことに成功した。

「おお……」

「ふふ、だから言つたでしょう」

雪ノ下は完全に勝ち誇つた顔でパンさんを取り出し、両手で抱く。

そんな彼女に、俺は普通に驚きながら尋ねる。

「え、お前こういうの苦手じゃなかった? 由比ヶ浜の誕プレ買いに行った時、メツチャ苦戦してたろ」

「いつの話をしているのかしら、もう一年近く前のことでしょう。苦手であれば練習すればいい、それだけのことよ。コツはネットで調べればいくらでも出てくるし、ゲームセンターには由比ヶ浜さんとも何度か来ていたから」

「ほーん」

苦手なことでも苦手なまま終わらせずに克服する辺り雪ノ下らしい。まあ、パンさんが絡んでるってのが大きいのだろうが。

なんでも彼女が言うには、こういったゲームでは掴んで落とすというのはあまり考えない方がいらしく、タグを狙ったり本体で押したりする方が成功率が高く、それを前提としてアームや景品の形状を見

て位置を微調整する、というのがコツなんだとか。

「……なるほどな。じゃあこういうゲームで何か欲しいもんあったらお前に頼むからよろしくな。店員さん呼ぶより早そうだ」

「最初から人任せ前提というのもあなたらしいわね……」

「言い方が悪い。適材適所ってやつだ」

「まったく……。そもそも、比企谷くんに適した役割って何かしら？

こうなってはいけないと子供に教え込む為の反面教師……存在感の無さと死んだ目を活かしたお化け屋敷の脅かし役……」

「おい頑張れ、もつと頑張れ。まだあるだろ何か」

「……………あとは、私の彼氏、とか」

一瞬、時が止まって辺りの騒音が聞こえなくなる。

おいマジかよこいつ今の流れでそういう事言う？

もうほんととそういう不意打ちされると俺の照れ顔とかいうおぞましい物見せちゃうから程々にしてほしい。顔あつ……。

しかし、俺だけではなく雪ノ下の方も俯いて頬を染めていて。

「……………」

「……………」

「あの、雪ノ下さん？ 自分で言ってるそんな照れるなら最初から言わなければいいんじゃないですかね……」

「し、仕方ないでしょう。その、この前部屋で言われたじゃない……私達、恋人らしさが薄れているって……だから……」

「……………あー。まあ、なに、そんな気にしなくてもいいと思うぞ。他のカップルがどんなんかは知らんけど、俺達が無理にそういうのに合わせる必要もないだろ。ほら、子供の頃とか友達を持つてるもん羨ましがると、親から『よそはよそ！』とか言われたろ。俺は友達いなかったから小町の話なんだけど」

「最後に悲しい事実が聞こえた気がするけれど……必ずしも他に合わせる必要はないという事は理解しているわ。けれど、あまり恋人らしい空気がないと、もう別れたのかと周りから勘違いされるかもしれないでしょう。現に一色さんがそのようなことを言っていたのだし」

「周りはいいだろ別に、勝手に勘違いさせとけば。元から俺が釣り

合っていないだの何だの言いたい放題言われてるっぽいし。流石に身近な奴らにまで別れたとか思われるのはアレだが……一色だって半分以上冗談で言っただけだろうしな」

「はあ……周りを気にしすぎるのはどうかと思うけれど、あなたは気にしなすぎだと思うわ。その釣り合っていない云々といった下衆の言葉は私の耳にも入ってきているけれど、その度に相手と直接話して人格を否定して排除しているから心配しなくていいわ。そのうち収まるでしょう」

「ええ……お前そんなことしてたのこええよ……あと怖い。……でもなんだ、その、ありがとな」

最近は随分と丸くなってきた雪ノ下だが、こういう所もまだしつかりと残っていて、多分完全に消えることなどないのだろう。まあ、母親とか姉とかもメツチャ怖いからね……。

ただ、自分や周りが絶えず変化していく中で、変わらずにあるものというのもあった方がいいだろう。

自分は変わる必要なんてないと昔の俺はよく言ったもんだが、変化を容認した今だからこそ、変わらないものの大切さは理解しているつもりだ。

それから俺達はゲーセンの奥の方へと足を運ぶ。

ここでの雪ノ下のお目当ては先程取ったパンさんだけかと思っていたのだが、どうやら他にもあるらしい。

「プリクラを撮りましょう」

「……こういう話、知ってるか？ 写真って撮られる度に魂を吸い取られるとか何とか」

「あなたの魂を吸い取るほど物好きなカメラもないでしょう。むしろそんなことをしたらカメラの方が壊れるんじゃないかしら」

「確かに……」

俺の魂とか毒性メツチャ強そう。

そうやって納得してしまった俺に、雪ノ下はジト目を向けてきて。

「あなた、戸塚くんとは楽しそうに撮っていたわよね？」

「うっ……いや、友達と彼女だとまた違ったハードルがあつてな……」

つか、雪ノ下はこういうの苦手じゃないのか？」

「あら、私は由比ヶ浜さんと何度か撮っているからもう慣れたわよ。言っておくけれど、私は比企谷くんよりは普通の高校生に近付いていると思うわよ。プリクラも何度か撮っているし」

「二回言わなくていいから……プリクラ慣れてるだけでそんなドヤ顔してる時点で普通じゃねえだろ絶対……」

「……彼氏とプリクラ撮りたがっているのは普通の女子高生じゃない？」

「……………それはまあ……そうだな」

そんなことを言われてしまつては断れるはずもなく、抵抗するのをやめて大人しくプリクラ機の中へと入っていく。

筐体の中は二人だけだと幾分広く感じる。

まず二人でプリクラ撮るってこともほとんどないからな……戸塚と撮ろうとしても大体もう一人くつついてるし。

雪ノ下は慣れていているというだけあつて手早くパネルを操作していくと、程なくして取り付けられているスピーカーから「くつついてくつついて！」といった妙に煽る声が聞こえてくる。

「比企谷くん、くつついてと言われているわよ」

「そうだな。ただ、俺はこう思う。人つてのは人生において何かを頼まれた時、断らない時の方が多いいんじゃないか。親、先生、上司とかはもちろん、後輩や部下の頼みも良い格好して聞いてやることだつて多いだろう。友達の頼みだつて基本的に聞いてやるのが普通だ。だから、せめて人間以外、今みたいな機械の頼みくらいは全力で拒否してもいいんじゃないか」

「いいからくつつきなさい」

「はー」

彼女の頼み、もとい命令は最強であると実感した瞬間だった。

というか、基本的に俺が弱すぎる。これがもし異世界だったら、秘められた何かが発醒して人生逆転俺TUEEEEEE無双の始まりなのに……。

つか、くつつけと言われてもどうすればいいの……。

雪ノ下が俺とタピオカツーショット撮ろうとする時は自然に腕を絡ませてきたりもするのだが、それをこちらからやるといいうのもハードルが高い。

……まあ、とりあえず近寄ればいいか。

そう結論付け、恐る恐るといった感じで彼女と肩が触れ合うくらいまで距離を詰める。

すると程なくして、カウントダウンと共にパシヤリとフラッシュがたかれた。

「比企谷くん」

「え、なに、何かマズかった？」

「今のは恋人同士のプリクラとしては不適切だと思うわ。ただ並んで撮るだけなんて、学校行事の事務的な写真ではないのだから」

「……あー」

いや、俺としても何かおかしいとは思ったけどね？

確かに、ただ直立して並んだだけの写真とか、そのまま学校案内に載せて「奉仕部の比企谷くんと雪ノ下さん」とか入れれば普通に使えるそう。

じゃあ、カップルっぽいプリクラってなんだ……？

機械音声の方はこちらの都合などお構いなしに、次の撮影までのカウントダウンをしている。考えている時間はあまりない。

俺は焦る頭でああでもないこうでもないと考え続け――。

フラッシュがたかれる寸前。

雪ノ下の肩を抱き寄せた。

「っ!!」

ビクツと彼女の体が震えたのを感じた瞬間、パシヤリと写真が撮られる。なにこれ超恥ずかしい。

おそらく世の彼女持ちウェイ勢はこういうことでも余裕の笑みを浮かべたりしてやってのけるのだろうが、当然ながら俺にそんなスキルがあるはずもない。ウェイ勢凄すぎるだろ今度からもっと敬うことにするわあいつら。

胸の鼓動は早鳴り顔は熱くなっていて変な汗までかいてくる始末

だし、自分でも浮かれまくっているのが分かり後になって転げ回るはめになるのは目に見えている。

とはいえ、とにかくこれで目的は達せたとはずだ。今度は流石にカッブルのプリクラだろうと彼女の方を見る。

しかし、彼女の方は何やら不満げにこちらを見ていた。

「……え、今のもダメ？」

「……ダメじゃない、けど……えつと……不意打ちだったから……私、きつと変な顔になっているわ……」

「大丈夫だ安心しろ、どんなにお前が変顔しても俺よりはマシだから」
「それ慰めているつもり……？」

雪ノ下は頬を染めて、こつんと頭を俺の胸辺りに当てて抗議する。
うん、多分……いや絶対今の俺の方がずっと変な顔になってる。頬むから今撮るなよプリクラ機、世にもおぞましい写真が出来上がったから。心霊写真も霞むレベル。

そんなこんなで色々と苦戦しつつもそれから数回の撮影を終えると、定番のラクガキの時間だ。

これに関しては完全に俺の出番はなく、雪ノ下に全部任せて少し休憩することに。

なんというか、どつと疲れた……慣れないことをすると疲れるというのは経験則から分かっていることだが。

ただ、疲労以外にも雪ノ下とこういったことができるのは嬉しい気持ちというのもしっかりとあって……トータルではプラスです。プリクラ最高！

すると、ラクガキに集中していた雪ノ下がポツリと。

「……はちまん」

「な、なんだよ急に……」

「つ……ご、ごめんなさい、口に出していたわ」

「い、いや別に構わないけど……あれか、名前書いてるのか」

「ええ、恋人同士なのだし、その、下の名前の方が自然でしょう……？」

「あ……まあ、そうだな、うん」

あまりにもむず痒い空気に、俺はそんな短い言葉しか返せない。

しかし、こんな些細なことでもこの有様では、小町の言っていた「恋人らしく名字ではなく名前で呼び合うようにする」ってのはかなりの難易度だということが改めてよく分かった。

まず恋人とかを抜きにしても、名字から名前に呼び方を変えるって並大抵のことではないと思うんだが、これは俺がおかしいだけなのだろうか。

由比ヶ浜とか、初対面の雪ノ下とちよつとクッキー作りしたらもう「ゆきのん」とか呼んでたからな……あの時はただのアホにしか思えなかったが、今になってその凄さが分かる。

まあでも女子って特にその辺緩いっていうか、プリクラのラクガキなんかでも大体は名前で……と考えていた時。

中学時代の嫌な思い出が脳裏によぎる。

「そういや、中学の時に無理してクラスの打ち上げに参加して皆でプリクラ撮ったんだが、その時のラクガキで他の皆はあだ名や下の名前を書いてもらったのに、俺だけ『比企谷くん』だったのを思い出したわ」

「あなたは油断するとすぐ黒歴史を思い出すのね……」

雪ノ下は頭を押さえて呆れたように溜息をつく。さつきまでのむず痒い空気が一気に消えた。

そう言われても、ふとした時に思い出してしまうのが黒歴史というものなのだから仕方ない。

特に俺くらいの痛さになると、単純に黒歴史そのものの数が多い訳で、それに関連するシチュエーションも多く、必然的に思い出す頻度も増える。

そもそも学校近くのゲーセンってのがまず危険地帯だ。

放課後に好きなゲームに熱中していたら、クラスの奴らがやって来て「あれウチのクラスの人じゃない……?」「あの人、あんな熱中することあるんだね……」とかドン引きされて死にたくなり、以降はわざわざ離れた所にあるゲーセンに通うってのはぼっちなら誰もが通る道だろう。

そうこうしている内に雪ノ下がラクガキを終えたので二人で筐体

から出ると、外の取り出し口に出来上がったプリクラが排出されていた。

由比ヶ浜や一色なんかの色々軽そうなラクガキは想像できるもんだが、雪ノ下がどんなことを書くのかというのは純粹に興味がある。そんなわけで少しワクワクしながら、若干恥ずかしがっている雪ノ下がおおずとおおずと差し出してきたプリクラを受け取って見てみると。

はちまん

ゆきの

死ぬまで一緒

「重い、重いよ……あと怖い」

「何か文句でも？」

絶対零度の瞳で尋ねてくる雪ノ下。だからそういうのが怖いんですけど……。

だが、俺はそんな彼女を見て……思わず笑みが溢れてしまった。一応言つとくがDMとかそういう話じゃないよ？

「……いや、お前らしいわ」

「ねえ、なんで笑っているのかしら。すぐく腑に落ちないのだけれど。比企谷くん？」

なおも問い詰めてくる雪ノ下に適当に言葉を返しながら、プリクラを財布の中に大切にしまう。

勉強スポーツ料理など何でも器用にこなしてしまう彼女だが、こういう何でもないところで妙な不器用さを発揮することがたまある。

そして、多くの人は完璧超人としての雪ノ下のことしか知らない。彼女と出会う前の俺がそうだったように。

ふと脳裏に、とある光景が浮かんでくる。

文化祭のあと、夕日に染まるあの部屋。

そこで彼女が小さな笑みと共に口にした言葉は今でも鮮明に覚えている。

俺は彼女のことなんて知らなかった。

でも、今では知っている。

× × ×

ゲーセンを後にした俺達だったが、雪ノ下がトイレに行きたいとのことだったので、俺はそこらに置いてある椅子に座って待っていた。時刻はちょうど五時半。

俺と同じく学校帰りの同世代もまだちらほら見るが、ぼちぼち帰ろうかといった声や雰囲気伝わってくる。

一方で、スーツに身を包んだ会社帰りと思われる社会人も少数だが見られるようになってきた。子供向け玩具メーカーの買い物袋を手に掲げた中年男性や、スイーツ店へと入っていくOLなどが目につく。

俺の両親は「定時上がりは都市伝説」とか何とか言っていた気がするが、どうやら存在するらしい。

長年の夢であった専業主夫は流石に無理っぽいと気付き始めた俺だが、どうしても働かなくてはいけないのなら、毎日定時上がりで残業がなく休日も多いホワイト企業を狙っていこうと思う……が。

なんか、普通に社畜やつてる未来しか見えないんだよねあ……。だって学生の時点で面倒くさい仕事ばっかやって、何かのイベントの度にひーひー言ってるからね……。どうしてこうなった……。

何か一気に気分が落ち込んでしまったので、雪ノ下から預かっているぬいぐるみのパンさんをふにふにしながら暇をつぶしていると。

「むっ!?」この反応……。奴が近くにいな……。ふっ……。この我を欺けると思ったか……。さて、どこだ……。!!」

そんな芝居がかった妙な声が聞こえてきたので、俺は静かに椅子から立ち上がって別の場所で待つことにする。雪ノ下に連絡入れないとな。

色々危ない人を見たら関わらないように静かに離れるのが最適解。

「ママーあれなにー?」「しっ、見ちゃダメ!」というのは世のお母さん方にとってあまりにもメジャーな教育法だ。

「近い……。近いぞ……。もう少しだ、もう少しで奴を捉えることが

……あつ、は、はちまーん！ 何故逃げる!？」
そそくさと離れようとする俺に、ドタドタと走り寄ってくる危険人物。

バツチリ目視で確認してんじゃねえか……。

俺は深い溜息と共に尋ねる。

「で、なんか用か材木座」

「用……か。そのような短く安易な言葉で表せるほど単純ではないのだがな……強いて言えば前世からの」

「そうか。じゃあな」

「はちまーん!! なんか私の扱いどんどん雑になってない!？」

「何言ってるんだ材木座。ちゃんと思り返してみろよ」

「む?」

首をかしげる材木座だったが、俺は肩にぽんと手を置いて。

「お前の扱いは最初からずっと雑だったろ」

「ぐふおああつ!! ……ふっ、どうやら貴様とはいい加減決着をつけねばならぬようだな……八幡！ 我らの決闘場へ向かうぞ!!」

「行かねえよ、つか行ってきたばっかだわゲーセン」

「我もだ！ しかしそんなのは取るに足らん些細なことに過ぎん!!」

今日はちようにど見届人もおるしな、今は野暮用で少し席を外しているが、すぐに来る。貴様は今日が己の命日だと心に刻み覚悟を決めるがいいわ！ ふはははははははっ」

「行かねえって言ってるんだろ、俺も連れがいるんだよ」

「八幡に連れなどおらぬだろう」

「真顔になってんじゃねえよ……」

まあ実際、いつもだったら材木座をかわすためのデマカセでしかないのだが、今回は違う。

ただ、だからといって雪ノ下とデート的な何かをしていると知られるというのもアレだしな……と考えた時。

噂をすれば何とやらだ。

「あら、比企谷くんの親友じゃない。こんにちは」

「親友じゃねえ」

戻って来るなり最悪なことを言ってくる雪ノ下。

そんな彼女に即座に言葉を返していると、材木座も腕を組んだまま頷く。

「然り。我と八幡は友などという生ぬるい関係ではない。全てを語り終えるには一晩あつても足りぬ程の深い因縁で結ばれた……そう、好敵手、というやつだな……。そうであろう、八幡！」

「あーうん、もういいよそれで」

それにしてもこいつ、相変わらず雪ノ下とまともに話せてねえな。慣れるいい加減。

まあ、雪ノ下は雪ノ下で材木座の扱いが俺以上に酷い部分もあるし、同情の余地はあるんだが……。

すると、材木座は何やら探るような様子で、何故か声を落としてヒソヒソと尋ねてくる。

「……して、八幡。その、連れというのは……」

「え、あー……まあ、なんだ、そうだよ雪ノ下だよ」

「……………ふむん」

俺の歯切れの悪い返答で色々察したらしく、途端に口数が少なくなる材木座。

なんだよやめろよ、いつも通りでいいよいつも通りで。お前がそんな感じになると、こつちまで悪いことしてるみたいで落ち着かないだろ……。

そうやって微妙な空気が流れると、雪ノ下は一步前に出てきて。

「何をコソコソ話しているのかしら。私に聞かれたら困ることなの？」

「いや別にそういうわけじゃねえって。ただ、さつきゲーセンに誘われてな。それで、その、今はちよつとアレだからっての……」

「ああ、そういうこと。ごめんなさいね、ざい……財津くん。比企谷くんは私とデートの最中だから、また今度にしてもらえると助かるわ」

「あ、はい……」

先程までの威勢はどこへやら、材木座は足元に視線を落としてぼそつと答える。お前はバイト中に先輩から「もつと明るくいこうよ

！」とか言われてる時の俺か。

それにしても雪ノ下のやつ、平然とデートとか言ったな……。

いくら材木座相手とはいえ……いや、よく見たらちよつと赤く
なってますね雪ノ下さん、やっぱ無理してんじゃねえかやめろよ可愛
いな。

一方で材木座は少しばかりテンションが戻ってきたのか、俺にビ
シツと指を突きつけてくる。

「ついにリア充ダークサイドへと落ちたか八幡！ 見損なつたぞ!! ちなみに『リ
ア充』と書いてルビは『ダークサイド』だ」

「どつちかっていうと、リア充が光で非リア充が闇なんじゃねえの知
らんけど」

「そんなことはどうでもいいわあ！ 昔の貴様は恋愛などにうつつを
抜かす程軟弱な男ではなかったはずだ!! 『恋人などいらん。俺には
戦場さえあればいい』と言っていた頃の貴様はどこへ行った!」

「言ってねえわ。俺の夢は専業主夫だつて散々言つてただろ。つかお
前だつてラノベ作家になつて声優さんと結婚するだとか言つてたろ」
「ええい、うるさいうるさい！ 他にも『リア充税の導入』や『クリス
マスのリア充に一番効果的な嫌がらせは何か』など共に語り合つただ
ろう!!」

「だから、んなこと語り合つ……たっけなそーいや……」

「語り合つたのね……」

雪ノ下は呆れて深い深い溜息をついている。

いやでも、そういう話題つて話してみると中々楽しいんだよな。特
に俺や材木座のような最底辺の人間はリア充への劣等感が強いから
盛り上がる盛り上がる。

まあ、大人同士なんか上司への愚痴とかで盛り上がってるみたい
だし、大目に見てくれてもいいだろう。平塚先生の愚痴とかどんだけ
聞いたか分からん。

雪ノ下からのジト目から逃れるようにそんなことを考えていると。

「お待たせ材木座くん……あれ、八幡に雪ノ下さん？」

すつと胸の奥に染み渡るような暖かく優しい、癒やし効果の塊とも

言える天使の声が聞こえてきた。

俺の頭は引き寄せられるかのように自然とそちらの方を向く。
そこにいたのはやはり天使だった。

「戸塚……会いたかった」

「えっ、急にどうしたの八幡？」

「比企谷くんあなた、今日一番嬉しそうね」

首を傾げて少し困ったように笑う戸塚、そして氷点下の視線をこちらに向けてくる雪ノ下。

寒暖差が激しい今日このごろだ。

しかし、すぐに何か嫌な事実が頭をよぎる。

先程戸塚は何と言った？ 確かお待たせとか何とか……。

その相手が俺であれば何の問題もないどころか、むしろ望むところだし、もう今夜は寝かせねえよ的な感じなのだが……。

「と、戸塚はここで何してんだ？」

「材木座くんと遊んでるところ！ もう帰ろうかって話になってたけどね」

「え……あ、そう……ほーん……」

なにこれ胸が痛い。

ああそうか、これが今流行の寝取られてやつなのか……脳が破壊される……。

俺はありったけの恨みをこめた目を材木座に向けて。

「おい材木座お前……人のことダークサイドに堕ちただとか散々言っ
てたくせに、自分は戸塚とデートとかふざけんなよ……」

「いや別にデートとかではないと思うが……」

「デ、デートって……遊んでただけだってば！」

恥ずかしそうに頬を染める戸塚を見ると更に胸が締め付けられる
ようだ。

ああ、俺以外の奴とのことでそういう顔するようになったの
か戸塚……でもきつと、こういう痛みを乗り越えて人は大人になって
いくのかもしれない……。

隣で雪ノ下が物凄く何か言いたげな視線を送ってきているのを感じ

じながら、人生の厳しさを噛み締めていると。

「そ、それに、デートって言うなら八幡と雪ノ下さんがそうじゃないの？」

「……あー、これはその……デートって言えばデートかもしれないが、必ずしもそうとは言えないというか、まずデートの定義ってのを」

「デートよ」

「……デートらしい」

「あ、あはは……」

戸塚は苦笑いを浮かべながらも、俺達二人をしつかり見つめて。

「……でも、やっぱり凄くお似合いだと思うな。八幡と雪ノ下さんって、前から二人だけの世界みたいなのがあったから」

「え、そうか……？　なんか由比ヶ浜にも似たようなこと言われたことあるけど、いまいち実感ないんだが……」

「ええ、そうね……まあ比企谷くんを否定する言葉は普段以上に出てくる所はあったけれど……」

「それは俺のことが嫌いなだけなんじゃないか？」

「……嫌いなら付き合ったりしないわよ」

「…………ま、まあ、それはそうだな、うん……」

なにこれ恥ずかしい。

なんか付き合ってから、いつもの軽口からやぶ蛇みたいになることが多い気がする……。

おまけに、二人きりの時ならまだしも、他に人がいる時に言われると恥ずかしさ倍増です……。

材木座は「リア充死すべし」とか言いたげな敵意満々の視線を向けてきているが、それはまだいい。

戸塚の見守るような暖かい視線が今は一番やばい。

こそばゆい感覚が全身を伝い、ここが自分の部屋だったら奇声をあげながらベッドの上でジタバタしてるレベル。

戸塚は眩しいくらいの良い笑顔を浮かべて。

「二人ともお幸せにね。八幡、これからは受験もあるし遊べる時間もちよつと減っちゃうかもしれないけど、それでもたまにいいから僕

とも遊んでくれると嬉しいな」

「ああもちろんだ。むしろ受験とかデートとかより戸塚を優先するまである。次いつ遊ぶ？ 今？」

「比企谷くん」

「……というのは冗談にしても、あれだ、また今度な。連絡する」

「うん、待ってる」

「ふむ、どうしてもというなら我も付き合っただらんでもないぞー！」

「あー分かった分かったその内な」

一年前はまさか俺が雪ノ下雪乃と恋人関係になるなどは露ほども思っていなかったのだが、それだけではなく、こうして変わらず友人でいてくれる人がいるというのも今までは考えられないことだった。

「彼女ができて友達との時間も大切にする」などというのは、以前までの俺からすれば全く別世界の話であり、青春を謳歌している層だけに許された恵まれたものだ。

奉仕部に入ってからのは一年は決して手放しで美化できるものでもなく、思い返すだけで気が重くなるようなことも沢山あったが。

気付けば大切にしていきたいものが周りにいくつもあって、あの日々は決して間違いではなかったと肯定できると思えた。

そして雪ノ下もまた、穏やかな笑みを浮かべてそつと俺に囁く。

「もう私が友達にならなくても大丈夫そうね？」

「……はっ」

懐かしすぎて思わず笑みを溢してしまう。

結局、雪ノ下への「俺と友達にならないか」という言葉は最後まで紡ぐことはなかった。

そして、その必要もなくなったのだ。

× × ×

次に俺達が向かったのは食品売場で、夕飯の買い出しだ。

店内には軽快なテンポの曲が流れていて、時間も時間なので主婦の

方々が大勢見られ、学生服に身を包んだ俺達は少し浮いている。

まあ俺は周り皆が学生服の学校ですら浮いてるんだけどね。

料理に関しても雪ノ下に全力で投げっぱなしであり、俺はカートを押す役割だ。

「比企谷くん、何か苦手なものある？」

「人」

「食べ物の話よ……」

「あー、トマトだな」

「そう」

雪ノ下は小さく頷くと、何の躊躇いもなくトマトをカートへと入れる。

「ちよつと？ 今頷いたよね？ おかしいよね？」

「理解したという領きよ。配慮するということ意味ではないわ」

「配慮どころか、ピンポイントでそこ狙いにきたから……」

「では逆に聞ければ、私が苦手なものを避けるような性格だと思う？」

「ですよ……」

そうだ、雪ノ下は苦手なことには真正面から立ち向かう質だ。

とはいえ、彼女の場合は大抵何やってもすぐ上達してしまうので、スポーツなんかでは持久力が不足してしまうという弱点もあったりするのだが。

げんなりしている俺に、雪ノ下は溜息をついて。

「丸ごと食べさせるわけではないから安心して。トマト煮に使うだけだから」

「ああ、それならまだいいわ……つか、そういうのってトマト缶使った方が楽じゃね？」

「……せつかく恋人に作るのだから、できるだけ自分の手でやりたくて」

「え……あ、そ、そう……」

いきなり嫌がらせされたかと思ったら、このデレよう。

何なの飴と鞭なの、でもトマトくらいでそんな可愛いとこ見られる

ならいくらでも食べちゃうよトマト。

俺は熱くなっている顔を彼女に悟られないように、少し視線をずらしながら。

「女子ってトマト好きだよな。ちよつと洒落た店行ってトマト系のパスタ食ってインスタにあげてるイメージ」

「偏見も甚だしいけれど……でもそうね、由比ヶ浜さんもトマトを使った料理を作ったとか言っていたわ。何故か黒くなったみたいだけれど」

「あいつが料理すると大概は黒くなるよな。全てを黒く染めるとか、材木座が食いつきそうな設定じゃね。今度小説のネタ提供として教えてやるか」

「それで彼の小説に由比ヶ浜さんが出ることになったら、あなた恨まれるわよ……」

ジト目でそんな忠告をしてくる雪ノ下だったが、実は材木座のやつ、身も心も凍らせる恐怖の氷の女王とかいうキャラ出してるんだよなあ……。

口調なんかもそのまんまで読んだら確実にバレるレベルなんだが、あれ読んだらどうなっちゃうんだろう材木座が。

そんなことを話しながら買い物が続けていると、ふと見知った二人を見かける。

今日はほんと知り合いによく会うな。

二人とも青みがかかった黒髪の姉妹で、姉はポニテ、妹は二つ分け。二人ともお揃いのシユシユで髪を結んでいる。

名前はさーちゃんとかけーちゃん。名字は……川……崎だ。ちゃんと覚えてるよ？

「あー……はーちゃんだ!!」

こつちに気付くくなり、妹の京華がはしゃいだ声を響かせながらこちらに走り寄ってくる。

その表情は嬉しそうな満面の笑みで染まっていて、俺を見てこんな顔してくれる人物というのめかなり珍しい。俺の場合はまず認識されるってところから一定のハードルがあるからね。なにその能力、バ

スケだったら幻のシックスマンになれそう。

一方で京華はそのままぼふつと俺の腰のあたりに抱きついてきて、それはそれは楽しそうに笑っている。

「おー、相変わらず元気だなけーちゃん」

「うん、元気！ はーちゃんは相変わらず元気じゃないね！」

「こ、こら、けーちゃん！」

慌ててこつちに來た川崎が妹に注意するが、俺としては特に否定する理由もない。逆に俺が元気な時って、だいたい気持ち悪いことになつてゐるらしいからな小町曰く。

つか俺の隣にいる奴とか、京華の言葉がツボに入ったのか背中をぶるぶる震わせて笑ってやがるし……。

「いやまあ、別にいいけどね本当のことだし……俺目死んでるし……」

「いくらあんたの目が腐つてて死んでも、思つたことを何でも言つていいわけではないでしょ。ほらけーちゃん、ごめんなさいは？」

「うん、はーちゃんホントのこと言つてごめんなさい……」

「あ、うん、なんかこつちこそ生きててごめんね？」

謝られる前よりダメージくらうとかどういふことなの……。

この、気を使つてるかのように見せかけた精神攻撃は雪ノ下もたまに使うテクニクだが、俺じゃなきやうつかり死んじやうレベルのやつだから気をつけようね？

そんな雪ノ下さんは、ようやく笑いの波が収まってきたのか、調子を戻すように小さく咳払いをして挨拶する。

「こんにちは……いえ、もうこんばんは、かしらね。川崎さん。京華さん」

「あ、うん………えっと、けーちゃん、もう行くよ」

「えーなんでー！ もっとお話したいー!!」

「でも、ほら……邪魔っばいし……」

ちらちらと俺達二人を見ながら、居心地悪そうにしている川崎。

……なんていうか、そうやって気を使われるっていうのもこつちからすると落ち着かないものがあるんですが……。

「あー、いや、別にいいっての。なに、そういうのそんな気にしないし。

な、雪ノ下」

「ええ。先程も私が少し目を離れたら、比企谷くんは三浦さんと海老名さんと楽しくお話していたし」

「あんた……」

「おかしい。言い方がおかしい」

川崎からゴミを見るような目を向けられ弁解する。

人によつてはご褒美ですとか言う性癖の持ち主もいるらしいが、この場合はヤンキーに脅されてる陰キャの構図で普通に怖い……。

ただ、川崎の方も雪ノ下の軽口だというのは理解しているらしく、呆れたように溜息をつく。

「ま、あんたつて結構そういうところあるからね。これからは気をつけた方がいいんじゃない」

「そういうところつてなんだよ……こっちは女子どころか男友達も少ないんだけど……」

「……」

「え、なに……」

「……比企谷くん、あなた川崎さんに何かしたの？」

雪ノ下が強烈な冷気を放ちながら尋ねてくる。今度はマジだ。

いや待つてほしい、川崎のジト目を見るに本当に何かやってしまったみたいだが、心当たりがないんだが……。

すると、京華までもがむすつとした顔をして。

「さーちゃんはね、はーちゃんに捨てられてかなしいんだよ！」

「は……？」

「け、けーちゃん！ 何言つてんの全然そんなじゃないから!!」

顔を赤くして大声を出す川崎だったが、京華はろくに聞いてない様子で、今度は雪ノ下の方を向くと。

「この泥棒猫！」

「京華!!」

「え、えつと……？」

普段の雪ノ下だったら、いきなりこんなことを言われれば強烈な力ウンターをお見舞いして相手の心を折るところなのだろうが、流石に

相手が保育園児だとそうもいかないらしく、ただただ困惑している。年下相手でも、例えば留美なんかにはいつも通り容赦なかったし、その辺りにラインがあるのかもしれない。

つか、こんな小さな子が泥棒猫とかいう言葉知ってんだな……昔のフア○タのCMとか思い出すけど、今はCMもかなり大人しくなった感じだしな……。

川崎はすっかり弱り果てた珍しい様子を見せて雪ノ下に頭を下げ
る。

「ご、ごめん……」

「いえ、別に気にしていないけれど……」

「ほらけーちゃんも！」

「やだ」

「けーちゃん、晩御飯抜きにするよ」

「むー！」

頬を膨らませて徹底抗戦の構えを見せる京華。なにこれすげえ可愛い。

思わず手を伸ばして頬をツンツンしてみたくなる衝動を抑えていると、京華はぶんぶんと腕を振り回して全身で不満を表現しながら言う。

「だって、たーくん言ってたもん！ さーちゃんがはーちゃんに振られちゃったから優しくしてあげよって!!」

「大志、あのバカ……!!」

「あー情報源はそこか。大志の奴が何か勘違いしてやがったんだな多分。つか、川崎が家でそういう話するとは思えんし、俺と雪ノ下のことって一年にまで広まってんの……?」

「そうみたいね。小町さんもクラスメイトからそのことについてよく聞かれると愚痴を溢していたわ」

ええ……噂が広まるのは早いってのは知ってるし、中学時代に俺が振られた事実が次の日には教室中に知られていたというのはあったが、今回はそれを上回る広まり方じゃねえか……。

理由としては雪ノ下が有名人ってのが一番大きいだろう。確かに

学校一の才女がろくでもない男に引つかかったってのはゴシップ的に価値高そうだ。

そして京華は思い出したように付け加える。

「あ、でもね、たーくんとはーちゃんの妹が仲良しだから、はーちゃんとは親戚になれるかもって！」

「そうかあいつぶつ殺す」

「その前にあたしがあんたを殺すよ」

思わず反射的に川崎大志の殺害予告をすると、目の前にいる姉からとんでもない殺意を向けられた……メツチャ怖い。

「ただけブラコンなんだよ……シスコンでもあるし無敵すぎない……？」

そして、川崎は京華に諭すように。

「とにかく、たーくんが勝手に勘違いしてただけだから。わかった？」

「んー……うん」

「雪ノ下のお姉ちゃんにごめんなさいは？」

「ごめんなさい」

素直にペこりと頭を下げる京華に、思わず俺が「全然いいよ！」とか答えつつ思い切り抱きしめナデナデしてあげたい衝動に駆られるが、何とか抑える。

さつきから衝動抑えてばっかだな俺、どこの危険人物だよ。

雪ノ下は優しい笑みを浮かべて。

「いいえ、気にしないで。……比企谷くんが複数の女子ととても仲良くしているのは事実だし。比企谷くん、ごめんなさいは？」

「ごめんなさい……」

何故か最終的に俺が謝ることになっていた。絶対おかしいでしょこれ……。

川崎も川崎で、雪ノ下に同調するように頷きながら。

「さつきも似たようなこと言ったけど、あんた無自覚に結構変なこと言ってくるからね。普段は理屈っぽいくせに。ほんと気をつけた方がいいよ」

「そういえば、比企谷くんが川崎さんに何かした件について有耶無耶

になつていたわね。改めて聞かせてもらいましょうか」

「え……いや、本当に心当たりがないんだが……」

「……………あんた、文化祭であたしに言ったこと覚えてないの?」

「文化祭?」

何かあつただろうか。

まずあの文化祭は色々トラブル続きで相当大変だった文実関係の記憶が大半を占めていて、クラスの出し物に関してはあまり参加できてなかったからな……。

あ、演劇の戸塚がメチャクチャ可愛かったのは覚えてます。相方のいけ好かないイケメンのことは忘れた。

川崎はじれったい様子で更に説明する。

「文化祭の終わりの方。あんた、息切らせて教室来たでしょ」

「あー、そうそう。マジ大変だったわあれ。あの時は助かった川崎、お前が屋上の鍵のこと教えてくれたお陰で相模のやつも見つかったしな」

「それは別にいいんだけどさ……あたしがそのこと教えたあと、あんた何て言った?」

「え、サンキューとかそんな感じじゃなかったか。悪い、あの時は俺もかなり焦つててあんまよく覚えてなくてな……」

すると、川崎は頬を染めて俯くと、小さな声で。

「……………してる」

「ん?」

「あ……愛してるとか言った……」

「……………」

言つたわ。超言つたわ。今の今まで忘れてたのに、完全に思い出した。

正確には「サンキュー! 愛してるぜ川崎!」だったか。バカじゃねえの俺……。

そういう文化祭のあと川崎の俺への態度に引かかることがあつたけど、そんな事あつたらそりやそうだとしか言えない。

「……………へえ」

雪ノ下の声は短いものだったが、俺を震え上がらせるには十分すぎる程の威圧感をまとっている。

ちよつと陽乃さんに似てたぞ今……。

そうやって固まっている俺に、川崎はそわそわと言いつらそうな様子で。

「別に本気で言ったとか思っていないけどさ、その、そういうのこれからはやめた方がいいと思う……彼女いるんだし……」

「はい、すみませんでした……」

もう謝るしかない。

色々と大変だった文化祭最後の問題が解決しそうだったのでテンション上がってたせいなんだが、もちろんそんなのが言い訳になるわけもなく。

俺達のやり取りを聞いていた京華はぽけーっとした様子で首を傾げながら。

「はーちゃんはけーちゃんのこと愛してるの？ でもゆきちゃんが恋人さんなんだよね?！」

「ええ、私も比企谷くんと恋人同士になったつもりだったのだけれど、どうやら彼が愛しているのは私ではなく川崎さんの方だったみたいね。私には好きとすら言ったことないもの」

「言っていないだ……あんた、それは流石にないと思うんだけど……」

「はーちゃん、好きなら好きって言わないとダメだよ?！」

「ごめんなさい……」

もはや謝罪マシンと化した俺。

無駄遣いが母ちゃんにバレた時の親父が似たような状態になつているのを見たことがあったが、こうはなりたくないと思つていたはずなのに……。

……つかこれはあれか、雪ノ下に好きって言わなきゃいけない流れなのか。

いや、そんな絶対に言いたくないってわけじゃないし、向こうから不意打ち的に言われた時に俺も言わないとなとは思つたんだが……。

「……あー、その、なに、二人の時に言うつてのじゃダメか……?！」

「っ……そ、そうね、言うならそういう時よね……」

羞恥心を必死に抑えながら何とか言葉を紡ぐと、雪ノ下も先程までの恐ろしい空気はどこへやら、顔を赤くしてぼしょぼしょと答える。

しかし、何とかこの場は凌げた感じではあるのだが、問題解決というよりは先延ばしに過ぎず、こうして前もって約束みたいなことをすると余計に言う時緊張するという問題も発生しているのだが……。

そしてそんな俺達の様子を見ていた川崎はというと、意外なことにくすりと笑みを零す。

「あんた達の恋人らしいとこ初めて見たかも」

「……そういうのあんま見せんのもアレじゃん……」

世間的にはラブラブ全開のバカツプルなんてのも存在するが、俺と雪ノ下はそんなものを目指しているわけでもなく、出来るだけ密やかにいたいというのが正直なところだ。

まあ、雪ノ下がやたら目立つからそれも中々難しいところもあるんだが。

そして川崎は何やら納得というかすつきりした様子で。

「じゃ、あたし達はもう行くよ。けーちゃん、バイバイって」

「バイバイ！ はーちゃん、もううわきしちやダメだよ？」

「ああ、バイバイな。あと浮気とか元々してないからね？」

「ふふ、さようなら京華さん。……あの、川崎さん」

「ん、なに？」

川崎が尋ねると、雪ノ下は少し言いづらそうに服をきゅつと握ってから、意を決したように言う。

「……今度、買い出しについて教えてもらえると嬉しいわ。その、食材の選び方、とか」

「……………うん、いいよ」

雪ノ下の言葉が意外だったのか、少し面食らった様子の川崎だったが、やがて微笑みを浮かべて快諾する。

確かにそういった家庭的な部分の知識は雪ノ下よりも川崎の方が上だろう。

ただ、そうだとっても雪ノ下がこうやってストレートに人に頼ると

いうのは珍しい。由比ヶ浜なんかに対してはその傾向はあったが、だんだんとその範囲が広がっているという事だろうか。

頼って頼られる、そういった人の繋がり、今では良しとできる。俺も、雪ノ下も。

……でも、買い出しについて聞くことは今後も定期的にこういうことがあるってことかしらん。

それとも、もつと先の……いや、あまり深くは考えないでおう、あんま妄想すると気持ち悪がられそうだし……。

× × ×

買い物を済ませた俺達は、モールを出て帰路……ではねえな。雪ノ下のマンションへと向かう。

日はすっかり沈み、黒く染まった空には一番星が輝き始め、夕日に変わって街灯が道を照らす。

俺が押す自転車の前カゴには食材の入ったビニール袋が収まっております、学校を出た時よりも重量感を伝えてくる。いや、そんな重いわけじゃないけど。

俺達は全くの無言というわけではないが、交わされる言葉は決して多くはなく、しかしそれを気まずく思うこともなかった。

千葉の夜空も、ぼんやりと光る街灯も、綺麗に舗装されたアスファルトの道も、所々錆が目立ち始めた自転車も、普段とはまるで違って見え、この空間そのものを楽しんでいる自分がいる。

そんな中、自転車の車輪がからからと回る音を塗りつぶすように、人の声が聞こえてきた。

「おつ、あれヒキタニくんじゃね？ うーいヒキタニくん!!」

「あ、おいバカ、戸部……」

「ん？ あ、やっべ、雪ノ下さんもいんじゃん！ デート中じゃね！

よっし俺ちゃんと空気読むからマジで！」

遅いし声でけえんだよ戸部……。

思わず俺と雪ノ下の溜息が重なり、声の方を見る。

遊具が一つもなく、ベンチと広場だけの簡素な公園。

昼間は子供が遊んでいるのだろうが、今はそこに高校生の茶髪のチャラ男とイケメンがいて、バツの悪そうな顔を向けてきている。

俺としては何も聞かなかったことにしてそのまま歩き去っても良かったんだが、雪ノ下の方が淀みない足取りでまっすぐ公園へと向かって行くので、仕方なくあとをついていく。

「何か用かしら、戸部くん。それに葉山くん」

「あー、や、マジごめん。暗くて一瞬ヒキタニくんしか見えなかったんだわマジでー!」

「それは私の存在感が比企谷くん以下だと揶揄しているのかしら。いくら私でもそこまでの侮辱を受けて我慢できる程お人好しではないわよ」

「ねえそれ怒ってんの？ 俺への攻撃にしか思えないんだけど？ あとお前、そういうの言われて我慢したことねえだろ、いつも反撃してオーバーキルしてるだろ」

「ははは……まあ、戸部も謝ってるし、許してくれないか？ ほら戸部、もっとちゃんと謝れ」

「すいませんっしたあ!!」

葉山に小突かれ、勢いよく頭を下げる戸部。本人は本気なんだろうが鬱陶しい……。

「そんな気にしてねえっての。つか、今日は知り合いとやたらエンカウントしたからな。今更って感じだ」

「おーヒキタニくんやさしい！ そう言ってくれつと助かるべー!」

「別に優しくないから……で、お前らはこんなところで何してん？ 夜の公園で騒いだと近隣住民の皆さんから不良扱いされて通報されるぞ」

「えっマジで?! つべー!!」

「戸部うるさい、本当に通報されるぞ」

葉山はそう戸部をたしなめつつ。

「今日は部活が休みだったからね。戸部とそこのモールに行つてスポーツ用品を見た帰りだよ。で、戸部のやつが公園にボールが落ちて

るのを見つけて……」

「とりあえず遊ぶしかないっしょ？」

「お前それ、小学生レベルの行動原理だぞ……」

「ヒキタニくん相変わらずきつついわー！ あれよあれ、子供の心を忘れないってやつ？ 俺もまだまだ若いってカンジ？」

足元のボールをリフティングしながら、お気楽にそんなことを言う戸部。きついわーとか言っときながら、こいつ多分何言われても効いてない。そういう凶太さは戸部の長所とも言えるだろう。

戸部はボールを上蹴り上げ、頭でぽんぽんとリズム良く跳ねさせながら。

「やーでも俺も最近悩みとか多くて？ そこらへんも隼人くんと駄弁ってたんだべ」

「戸部くんに悩みなんて概念があつたのね。意外だわ」

「雪ノ下さんもきつついわー！ あるあるメツチャあるわー。まず海老名さんのことっしょ？ で、受験のことっしょ？ それに部活も今年で最後だし一発かましてやりたいじゃん？」

恋愛、受験、部活。

高校生にとって、その辺での悩みは避けて通れないのだろう……戸部でも。

特に俺の場合は奉仕部に高校生活の大半を振り回されてる気がする。別に後悔とかはないが。

それと同じように、戸部にとってのサッカー部というのも重要な事柄なのかもしれない……つか、こいつ……。

「……ん、どしたんヒキタニくん。じつと見て」

「え、あー、いや、上手いもんだなと思ってな、それ、リフティング。お前真面目にサッカーやってたんだな」

「お、あざーっす！ 初めてヒキタニくんに褒められた気がするわー！」

前半はともかく後半は皮肉入ってるんだが、戸部には通用しない。

戸部はリフティングを一段落させ、足元でボールをころころ転がしながら。

「言つとつけど、俺だけじゃなくて全員マジだかんね？ マジで国立狙つてつから。隼人くんとか全国レベルだし！」

「それは言いすぎだ戸部。ただ、やっぱりやるからには全力でやりたいし、当然だけど負けたくないからね。君には汗臭いと思われる話かもしれないけど」

「……いや、いいんじゃないの？」

本気になれる何かというのは決して否定されるようなことではないはずだ。

スポーツに限った話じゃない。一色や三浦の恋愛だったり、材木座のラノベ………は一緒にしたらアレかもな………あいつシナリオライターとかに簡単に浮気してたしな………。

俺の言葉に葉山は何が面白いのか笑みを浮かべて。

「確かに、君も意外と泥臭いところ見せたりするよな。奉仕部の仕事なんだろうけど、マラソンで俺についてきたり」

「うっせ思い出さなくていい。あの後コケて散々だったわ」

「………はやはち」

「ちよつと雪ノ下さん？ 思考回路が海老名さん化してるけど大丈夫？ 大丈夫じゃないよね？」

じーつと疑惑の目を向けてくる雪ノ下。それには流石の葉山も顔を引きつらせて困った笑みを浮かべている。

そんな中、戸部は何故かうんうんと頷きながら。

「や、でもちよい分かる気がするわー。隼人くん、大事なことはいつもヒキタニくんと話してる感じするわー。もつと俺とか頼ってくれてもいいよ的な？」

「……何言ってるんだ、戸部のことも頼りにしてるよ。特に部活では戸部が皆の間を取り持つてくれてるじゃないか。あそこまで学年の隔たりのない輪を作れる人なんてそうはいない」

「おっ？ えっ、あざーっす………ってか、メツチャ照れんですけどー！

なにになに隼人くん、いつもは俺の扱い雑なのにしたん！」

「戸部の扱いが雑なのは皆同じだろ。すぐ調子乗るから、普段はあまり褒めないようにしてるだけだ」

「それきつついわー!」

戸部は相変わらずのオーバリアクションを取ると、抗議の意味も込めたのか足元のボールを葉山に向かって蹴り出す。

まあ、葉山の言い分はよく分かる。

戸部はただでさえうるさいのに、調子に乗らせると更にうるさくなる事間違いないからな。俺の周りだと一色なんかも調子に乗らせたらダメな奴。戸部と一緒にしたらメツチャ文句言われそうだけど。

……ただ、戸部のような誰でも軽いノリで接することができる人物というのは集団生活において重要な存在であり、これからの社会生活においても俺なんかよりもずっと重宝されるのだと思う。

それにこいつ、やるべき時は割と真剣にちゃんとやる奴だからな……海老名さんのこともそうだし、一色が葉山に振られたあとのフオローもそうだ。

あれなんか戸部がすげえ有能な奴に思えてきた……就活とか俺と戸部どっち欲しいとかなったら絶対戸部の方じゃん……。

そんな、よく分からん敗北感に打ちひしがれている俺をよそに、葉山は戸部から受けたボールを浮かしてリフティングを始めながら。

「でも少し意外だな。君は学校帰りの制服デートなんかは嫌うように思えたけど」

「……うるせえな」

「あら葉山くん、比企谷くんのことなら良く知っているみたいなおぶりね。言っておくけれど、彼への理解度なら私の方が上よ当然」

「張り合わなくていいから……」

「かーっ、羨ましいわー! 俺も海老名さんとデートしたいわー!」

そんなことを空に向かって吠える戸部だが、海老名さんとのデートとか雪ノ下以上に大変な気がするけどな……まあ、そこは戸部だって覚悟の上だとは思うが。

葉山は戸部に「そこは頑張るしかないだろ」と苦笑と共に言いながら、再び俺の方を向くと。

「比企谷」

「今度は何だよ……うおっ、と」

唐突に俺に向かってボールが蹴り出され、不格好ながらも何とか足元に収める。

葉山はからかうような笑みを向けてきて。

「パスだよパス」

「お、ヒキタニくんリフティング勝負とかしちやう？」

「あのな……俺がサッカーできると思うか？ センスなさすぎてリフティングの最高記録とか二回だぞ」

「それはセンスとかいう問題じゃないと思うが……」

「比企谷くん」

雪ノ下の声にそちらを見ると、手をくいくいとしてボールをよこせと訴えていた。

何その仕草、ちよつとカツコイイじゃん……とか思いながら、サッカーボールに対して特に愛着もない俺はさっさと彼女にパスを出す。

雪ノ下は自分に転がってきたボールをそのまま足の甲を使って浮かせると、ぽんぽんと小気味良いリズムでリフティングを始めた。

おまけにドヤ顔まで向けてくる。いや君の勝ちでいいから全然……というか、スカート気をつけろスカート。

……しかし、うめーなこいつ。

その技術は素人目には葉山や戸部と遜色ない。

戸部も口をあんどりあげたまま大袈裟に拍手して。

「すげーすげー… さっすが雪ノ下さんだべ!!」

「お前サッカーまでできんのかよ、なに、なでしこジャパン目指してんの？ 見た目だけなら大和撫子っぽいもんな見た目だけなら」

「私の内面に何か言いたいことがあることはよく分かったわ。……別に、大したことではないわ。幼い頃にサッカーで遊ぶ機会がよくあったというだけの話よ。だって………あ、えっと」

雪ノ下は急に言葉を詰まらせると、リフティングもやめてしまい目を逸らす。

ただ、話している最中に、彼女は一瞬葉山の方を見たような気がした。

幼い頃、サッカー、それに葉山。

……………ほーん。

「あー、そういやお前、葉山と幼馴染だったな。親同士で用があると一緒に遊んでたとか言ってたっけか。それでサッカーすることもよくあったのか」

「……………あの、勘違いしないでほしいのだけれど、あくまで親同士の繋がりがあってだけで、特に親しくしていたわけではないから……………」

「いや、別に気にしてないし……………昔のことだろ……………」

「おっ……………もしかしてヒキタニくん嫉妬してるん!? やべー超レアだべ!!」

戸部うるせえ……………!

いやほんと気にしてないから。

いくら何でも、そんな幼い頃のこと持ち出してあーだこーだ言うほど面倒くさくないから。

……………若干もやっとしたのは確かだが。

「……………まあ、でも、一番上手かったのは陽乃さんだったな。俺よりもずっと上手かった。地味にシヨックだったよ」

「うっそ隼人くんそれマジ? ばねえわ雪ノ下一家」

「……………姉さんはそういう人だから」

葉山はさり気なく第三者の存在を出して、雪ノ下と二人きりではなかったとアピールする。

なに、俺に気を利かせたつもりなん? イケメンなん? イケメンでした。

ただ、それで葉山に感謝つてのも何となく癪だし黙っていると、黙るといふ概念が無さそうな戸部が相変わらずのハイテンションで話しかけてくる。

「つーかさヒキタニくん、ずっと聞きたかったんだけど、どうやって雪ノ下さん落としたん? 雪ノ下さんってマジあれじゃん? なんとかの花ってカンジ……………なんだっけ隼人くん」

「高嶺の花だろ。というか、そういうの本人いる前で聞くか普通……………」

そう言っつ溜息をつく葉山。ほんとそれ。

ちらと雪ノ下の方を見るが、彼女は少し首を傾げるだけだ。

なにその「答えたら?」とかいう顔……。

戸部はそんな事お構いなしにグイグイと。

「で、で? どうなん実際! 俺も参考にしたいっていうかき、マジで!」

「いやぶつちやけ自分でもよく分かんねえし……そもそも、俺と付き合う女子って時点で特殊ケース過ぎて全然参考にならないだろ。まあ、海老名さんもかなり特殊な女子だとは思うが」

「あら、異性の趣味が特殊なのはお互い様でしょう」

「俺はそんなことないだろ。お前自分で言ってたろ、モテるって」

「ええ、モテるわよ。でも私と少し話すと皆すぐに離れていったわ。比企谷くんも、最初の私の印象はあまり良くなかったでしょう?」

「そんなレベルじゃないな、俺の絶対許さないリスト入り最速記録持つてるぞお前。何せ初めて話したその日にはもう入ってたからな」

「あなたそんなもの作っていたの……でも、あなたは私の本性を知った上でこうして付き合っている。むしろ、そういう面倒くさい所がいいまであるとか言ってたかしたら。ほら、特殊じゃない」

「ねえちよつと? そういうの人前で言うのはどうなんですかね……」

もう日も落ちて涼しくなってきたのに、暑くて変な汗まで出てきたんですが……。

俺達の会話に、戸部は「ヒュー」とか言いやがってるし、葉山はパタパタと顔を扇ぐ仕草を見せてきている。ほんとやめろ……。

やがて葉山は戸部に諭すように。

「要するに、こればかりは人それぞれだから戸部自身が頑張るしかないってことだな」

「はーやっぱそうかー! ま、俺頑張るけどね? マジで、大マジで。大和達はどうせ振られるだとか言ってくれちやってるけど……」

あああああつ!!」

話してる途中で何かを思い出したのか、戸部は大声をあげてポケットからスマホを取り出して時刻を確認する。

「やっべ、大和達と飯行くんだったわー!」

「ああ、そういえばそんな事話してたな。大和達には俺がライン入れとくから急げよ」

「サンキュー隼人くん！ んじゃ、わりーけど俺もう行くわ！ ヒキタニくん達も今度行こうぜ飯ー」

「行かねえから。いいから、さっさと行けって」

「おうっ！」

そうやって、戸部は慌ただしく走り去っていった。

多分遅刻した罰で何か奢らされるパターンだろうな。俺の周りだと小町や一色相手だと絶対そうなる。

あと、由比ヶ浜はぶんすかしつつも許してくれそうだが、一番ヤバいのは雪ノ下。言葉のナイフでめった刺しが始まっちゃう。ソースは俺。

すると、雪ノ下もスマホを取り出して時刻を確認すると、近くに停めてある俺の自転車の前カゴからビニール袋を取り上げる。

「じゃあ、私も先行ってるわね。比企谷くんはごゆっくりどうぞ」

「は？ え、いや、俺も行くぞ普通に。葉山とごゆっくりしてどうすんだよ海老名さんしか得しねえだろ」

「家に帰ったら美少女がご飯を作って待ってくれている毎日というものに男子は憧れるというのを聞いたわ。そういうの、好きなのでしよう？」

「どこ情報だよそれ……いや、嫌いなやつはそんなにいないとは思わが……あ、おい」

雪ノ下の言い分を全否定できずにいると、彼女は本当にそのまま行ってしまった。

……これ、多分誰かの入れ知恵だろうな。誰かは大体想像付くが。そんなことを考えながら諦めの溜息をついていると、葉山はくくつと喉の奥で笑いながら。

「そういうのが好きなのか」

「うるせえ……つか、お前は戸部達と飯行かないのかよ。ハブられるん？」

「違うよ、比企谷じゃあるまいし………家の用事さ」

「あー、どつかのお高いレストランでお偉いさん相手に家族ぐるみの付き合いつてやつ？ 大変だな、いいとこのお坊ちゃんは」

「君はどこまでも言い方が意地悪いな……君だつてもう他人事じゃないだろうに。彼女の家とも食事したんだろう？」

「……なんで知ってんだよ」

「陽乃さんだよ」

思い切りしかめ面してみせる俺に、こともなげに答える葉山。

あの人は、俺がこういう事を葉山に知られるのは嫌がるつてのを分かった上で、あえてやってんだらうな絶対……マジでいい性格してるわ……。

しかし葉山は、どんよりと不機嫌ですオーラを出しまくってる俺に構わず、楽しいげに言葉が続ける。こいつの凄まじく空気読む能力どこ行った。

「凄く面白かったつて言つてたよ陽乃さん。君が今すぐにも逃げたいつて顔に出てて笑いを堪えるのが大変だったつて」

「あんなの誰だつて嫌だろ、お前みたいな外面完璧な奴じゃなければな。良いもん食つたはずなのに全く味覚えてねえよ」

「別に俺がそんな特別なわけじゃないさ。戸部なんか普通に楽しむんじゃないか」

……確かに、戸部だつたら雪ノ下家を前にしても高級料理にがつつくくらいの図太さを持つてそうだ。

あ、それなら今度から戸部に行かせればいいじゃん！ ……ダメか。

葉山はげんなりする俺のことを愉快そうに眺めていたが、やがて視線を夜空に移して独り言のように呟く。

「……そうだ、俺は何も特別じゃない。陽乃さんだけじゃなく、雪ノ下さんのお母さんからも気に入られている君と比べればね」

「オモチャにされてるの間違いだろ。つか、気に入られてるつてんならお前だつてそうだろ。スペックだつて俺よりずっと上じゃねえか色々」

「そんなことはないさ……あの人達の目を見れば分かる。確かに俺は

いつも正しく振る舞うようにしてきたつもりだ。でも、ただそれだけの事さ」

空に向けて言葉を紡ぐ葉山に、俺がこれ以上何か言うことなどあるのだろうか。

両者が黙れば必然的にこの場は静まり返り、風が公園の木々の葉を揺らす音だけがやけに大きく聞こえた。

俺が雪ノ下家と関わるようになったのは最近のことだ。

当然、葉山の方が付き合いはずっと長く、それだけ様々な想いも蓄積しているのだろう。

あの家と関わるのがどんな意味を持つのか、それをよく知っていないはずだ。

とはいえ、俺と葉山は根本的にまるで違う人間だ。

「……あの人達に気に入られる事が正しいって事にはならねえだろ。むしろ俺的にはマイナス要素でしかないわ。多分世間一般的には俺の方が間違ってる、お前の方が正しいんだろうよ。平塚先生からも言われたことあるしな、もつと人と上手くやれって。俺がそんな事出来るはずもないんだが」

「……少し意外だな。君にとって俺のやり方は最も嫌悪すべきものなんじゃないのか」

「ああ、大嫌いだよ。ただ、理解はしてるつもりだ。俺は否定するけどな」

「はは……言ってることメチャクチャだな……」

「俺はそういう奴だってお前も分かってるだろ。まあ、俺はそんな俺のこと結構気に入ってるんだけどな。お前は嫌いだと思うが」

「……ああ、嫌いだよ。でもそうだな、今は俺も俺のこと気に入ってるかな割と」

「ナルシスト」

「お互い様だ」

俺も葉山も、自分の中に信じているものが確かにある。

何から何まで正反対とも言える俺達だが、ただその一点だけで言えば同じと言えるのかもしれない。

周りの望む自分を演じる。

そんなのは俺にとって唾棄すべき偽物でしかないのだが、大切なものの為にそれを貫き通し信じ抜くと言われてしまえば、それまでだ。俺に出来ることと言えば、ただただそれを嫌悪し、周りがどれだけ葉山に期待しようが、それを否定する奴がここにいるということを思い知らせてやることしかない。

俺は意地悪く笑みを見せて言ってる。

「ただ、お前のそれがいつまでも続くとは限らないけどな。未だにあの人達……いや、あの人を気にしてるお前じゃあな。三浦とか、絶対このままじゃ終わらないだろうしな」

「……何の話をしているか知らないけど、俺は俺の信じたやり方で目指すものを追うだけさ。例えその結末がどうなっても、後悔だけはもうしない」

「あーそうかよ。どうでもいいけど、それでウチの部まで巻き込むなよ。前科あんだからな」

「約束はできないな、元々そういう所じゃないかあの部活は。それに、君だって随分と周りを巻き込んだだろう………雪乃ちゃんとのことで」

「人の彼女のこと気安く呼んでんじゃねえよ」

「はははははっ！ 悪い悪い」

低い声で威嚇するが、葉山は楽しげに笑うだけだ。

ああこいつ、やっぱあの人っぽいところあるわ。その実はまるで違ったものだとしても、過去から今に繋がる葉山隼人の意思は表れている。

こんな葉山は、おそらく滅多に見ることはできない。

だからといってこれが本性だという話でもないのだろう。

どれが本当の自分かなんてのは周りが決めることではなく、結局は本人の選択に委ねられる。こいつはきつと「どっちも俺だよ」などと爽やかに言ってるのだろう。

海老名さんは残念がるかもしれないが、俺達はきつと一生平行線で交わることなどない。

あれは去年の夏だったか、もしも俺が雪ノ下と葉山と同じ小学校だったらという話をしたことがあった。

その時葉山は、「仲良くできなかったろうな」と言った。誰とでも上手くやる葉山の口から聞いた初めての拒絶の言葉で当時は驚いたものだが、実際本当にその通りだ。

どこまで行っても相性は最悪で、お互いを否定し続ける。それが比企谷八幡と葉山隼人の関係性だ。

後編

葉山と二人で駄弁るなんていう罰ゲームを済ませた俺は、雪ノ下のマンションの部屋の前までやって来ていた。

高級タワマンということもあり、まずエントランスで一度ベルを鳴らしマンションそのものに入れてもらう必要がある、当然ながら部屋にもインターホンがついている。

こうも防犯性が嚴重だと、何もしてなくても不安になってくる。大丈夫だよ、見た目不審者っただけで通報されないよ俺……。

ここには前も来たことはあったが、根っからの庶民体質な俺からすればやはり落ち着かない。まず十五階って時点で敷居が高いとか物理的に高いし家賃的にも高いはずだ。

タワマン内でのカーストは上の階に住んでいる程高いって本当なのかしらん。

そんなことを考えながらインターホンを押して待つこと数秒。

複数の鍵を開けるガチャガチャという音のあとに扉が開き、雪ノ下が出す。

「どうぞ」

「あー、なんだ、お邪魔します」

部屋に入ると彼女お馴染みのサボンの香りが鼻をくすぐる。どうして女子の部屋ってこんないい香りするのん……。

雪ノ下は制服から部屋着になっている。

白のフード付きパーカーに、丈が長めで緩い感じのパンツ。

以前に見た部屋着は白ニットにロングスカートというお嬢様風な感じだったが、今日のは普通の女子高生感がある。少し活発めの。

「その部屋着、なんかちょっと新鮮だな。そういうのも好きなのか」

「由比ヶ浜さんと買い物行くと、こういうのもって強く勧められて……その、似合っていないかしら……」

「いや、そんなことない。その……凄くいいと思います」

「……そ、そう。ありがとう」

恥ずかしさを我慢しながら感想を言うと、雪ノ下も頬を染めて俯

く。

「……いきなりこんなんで泊まりとか大丈夫なんだろうか……」

雪ノ下は気を取り直すように一つ咳払いをすると、靴を脱いであがった俺に言う。

「ご飯にする？ お風呂にする？ それとも」

「飯。腹減ったわ」

「……人の話は最後まで聞きなさい」

「古典的過ぎんだよそれ……小町の入れ知恵だろ、その頭悪い感じのやつは」

「へえ、やっぱり分かるのねそういうの。小町さん、『これ言っとけば男はイチコロですよー』とか言っていたわ」

「あいつは全体的に男ナメすぎだろ……つか、お前も真に受けるなよ。飯や風呂ならともかく、お前でとか言われたらどうすんだよ」

「……………二、三ヶ月程待つてほしいと言ったわ」

「なにその生々しい数字……」

ほんとこういう状況でそういう事言われるとそわそわしちゃうからやめて……」

雪ノ下も落ち着かないのか何度か髪を撫で付けると、この空気を変えるために少し大きめな声で。

「ご飯はもう少しかかるからお風呂先に済ませてちょうだい」

「ええ……さっきの聞いた意味は……？」

「言ってみたかっただけよ」

「言ってみたかったのか……」

それから雪ノ下に案内されて部屋の一つに入る。今夜はここで寝ることになるらしい。

そしてそこには着替えを始めとした俺のお泊りセット一式がバツチリ置いてあり……」

「……これ明らかに俺の家から持ってきたやつじゃん……」

「小町さんが予め用意してくれたの。比企谷くんには勿体ないくらいによく出来た妹さんね」

「よく出来すぎてこえーよ、俺の人生全部握られてる気がしてくるぞ」

「本人は不本意みたいだけれどね。何度も『返品は受け付けませんので!』と念を押されているわ」

「お兄ちゃんを怪しい商品か何かみたいに言う妹ってどうなの……」
逆に小町に彼氏なんかできようものなら、あらゆる手段を用いて邪魔しようと思ってるのに温度差がありすぎる……。

そうやってショックを受けている俺に、雪ノ下は溜息をつきながら頭に手を当てて。

「十年以上もあなたの世話をしていれば当然の願いという気もするけれど。例えば、もしも葉山くんが妹がいたならばそんな事は思われな
いでしょよね」

「そういうので葉山出すのズルすぎるでしょ全然反論できねえよ……
せめて戸部にしてくれ。あ、材木座とかもつといいぞ。あいつらも妹
いたら絶対ウザがられるだろ」

「自分がもう少しマシになるという発想はまるでないのね……あなた
らしいけれど。まあ、そんなあなたを選んだ責任は持つわ。これから
何十年だろうと」

「おうよろしく頼む……え、お前それ何、プロポーズなの?」
「……………それじゃあ、私は料理に戻るから」

思わず聞き返すと、雪ノ下は足早に部屋から出て行ってしまった。
しかし、出ていく時にちらつと見えた耳は真っ赤になっていて、連
鎖反応のように俺まで顔が熱くなってくる。

何だよあれ破壊力高すぎだろ……。

そういう事言うにしても、もつと冗談めかすというか、一色がやる
ようなあざとくからかうような感じならこつちとしてもまだ対処の
しようもあるんだが、ついうっかりって感じだと本気っぽい感じが出
てもう何かほんとアレで色々ヤバいから……ダメだ頭バグってるわ
俺。

このままでは雪ノ下と顔を合わせる事など出来そうもないので、
とにかく風呂入って一旦頭を冷ませう………つか風呂どこだよ。

× × ×

その後自力で風呂場を見つけて入り、いつもと違うシャンプーの香りに若干戸惑いながらリビングに行くと、ふわっと良い香りが広がっていた。

香りに誘われるようにキッチンへ行くと、ちょうど雪ノ下が食器に料理を移しているところだった。

「鶏肉のトマト煮か」

「……なんだかカンニングされた気分なのだけれど。向こうで適当にくつろいでくれていいのよ」

「いや流石に食器運ぶくらいは手伝うぞ。俺は基本的に養われたいと思ってるが、対価なしに一方的な施しを受けるのは落ち着かないからな」

「前にも聞いたわね似たようなこと……じゃあお願いするわ。熱いから気をつけて」

「おう任せろ。カレーぶちまけて皆から白い目で見られた小学校時代の俺とは違うところを見せてやる」

「一気に不安になってきたわね……言っておくけれど、もし同じことしたら這いつくばって綺麗に食べてもらうからそのつもりでね」

「そういうの上から見下ろすのメチャクチャ似合いそうだなお前……」

そんなアホなやりとりをしつつ、リビングのテーブルに料理を並べていく。

トマト煮以外にはパン、スープ、サラダなど。一言で言えばオサレ。ウチではまず出てこない夕食だ。

いや、別に普段のウチの飯に文句があるわけじゃないけどね？ 普段のウチでの食事というのはジャンルが違うというか、あれはあれで安心感があっていい。

程なくしてお互いテーブルにつき「いただきます」と手を合わせる。

早速鶏肉のトマト煮をスプーンですくって食べると、香り付けされた柔らかい肉の旨味がトマトの酸味と絡み、他に盛り付けられたピーマンと相まってこってりとし過ぎない食べやすさがある。

苦手なはずなトマトも全然気にならない。まあ、あれは生の食感が一番の問題つてのもあるんだが。

「……超うめえ。なにお前、普段からこんな美味しいもん食ってんの？」
「ありがとう。……普段よりは当然力を入れたわ」

「ほ、ほーん……その、サンキュな」

「いえ、私が好きでやっているから」

そう微笑む雪ノ下の顔を直視できない。

さらっと好きとか言われちゃうと男つてのは舞い上がっちゃったり恥ずかしがっちゃったり大変なのだ。

そしてその結果、後々にまで残る黒歴史を作ってしまった、ふとした時にフラッシュバックして転がり回るはめになる。これぞ思春期の罨、若者達は気をつけてほしい。

一方で雪ノ下は何でもなさそうな様子で。

「ただ、料理自体は平凡なものだけどね。高級なものも考えたのだけれど、あなたはあまりそういうのは好まないように思えたから。以前に由比ヶ浜さんや平塚先生と料理対決をした時、家庭的な料理について色々語っていたじゃない。適当に焼いた肉とかが家庭の味だとか」「懐かしいな、よく覚えてんな……まあ、高級なもん食っても、ずっと庶民の味とマツ缶で慣らしてきた俺の舌じゃ分かんねえだろうしな。でもこれだって俺からすれば特別つてか、普段とは全然違うぞ。肉からすげー良い香りするし。なんだこれ」

「香辛料を使っているのよ。あなたも知っているものよ」

「いや俺そんな香辛料に詳しくないし……あ、もしかしてあれか、ローリエつてやつか。千葉村の時に話してた」

「そう。好きでしょう？ ローリエ」

「なんかそれ、別の意味含んでない……？」

あの時はローリエという言葉からロリっ子しか想像できずに、擬人化したらヒットすんじゃないかねとか妄想したら、雪ノ下に見抜かれてロリコン扱いされるとか散々だったからな……。

そんなことを思い出しながら、とりあえずロリコンの方向からは話を逸らす。

「ようは月桂樹の葉だろ。俺はそっちの方がピンとくるわ」

「またはベイリーフとも言うわね」

「なにそれ進化するとメガニウムになるの？」

「あなたの方こそ何を言っているのか分からないのだけれど……」

マジか分からないか国民的ゲームなのに……いや雪ノ下はゲームとかやらないか。

俺の中だとベイリーフといえはアニメ版で某砂利ボーイにガチ恋してた印象が強く残っている。今どうなってるのか全く知らんが。

タイプでいえば雪ノ下は言うまでもなく氷、由比ヶ浜はノーマル、俺は………ゴースト辺りか。目が死んでて存在感ない上に、ウエイ勢とかが近くにいと「タチサレ……タチサレ……」って念送ってるしな。

それから色々話しつつ料理をつついていたら、程なくして食べ終わってしまう。

「ご飯は皆で食べると楽しいし美味しい」とかいう説には長いこと異論を唱え続けていた俺だったが、考えを軟化せざるをえないかもしれない。

まあ、学校の昼飯は未だにぼっち飯キメてるけどね？ あの設定位置で風を受けつつ戸塚が部活頑張っているのを眺めながら食べる昼飯の美味さもかなりのものがある。

やがて雪ノ下は食後の紅茶を淹れてくれ、二人でほっと一息つく。

「ごちそうさま。あんま食レポとかそういうのは出来ないが、とにかくすげえ美味かったわ」

「それなら良かったわ。毎日食べたくなる？」

「え……あー、まあ……でも、ほら、そういうのはまだ早くないですかね……」

こいつ結構攻めてくるな……しかも余裕ある感じならまだしも、言ってる本人も赤くなっちゃってるから余計に妙な空気になっちゃうだろやめろ。

雪ノ下は手元のマグカップにそわそわと指を這わせながら、こちらを覗きつつ。

「そうかしら？　大学生では珍しくもないでしょう、ルームシェアなんて」

「そういうのって普通は同性だけでやるもんじゃないの……つか、そもそも恋人同士で一緒に住むってそれただの」

「同棲ね」

それを指摘されても雪ノ下は怯むことなく、じっとこちらに視線を送ってくる。

「比企谷くんは……いや？」

「……嫌ではない。ただ、なんつーか、気持ちがついていかないっていうか、想像もできないっていうか……まずそちの親が反対するんじゃないか。特に親父さん。娘が大学入っていきなり男と同棲とか絶対良い顔しないだろ」

「交渉すればいいだけのことよ。今は父さんも忙しいようだから難しいけれど、六月にあなたを紹介する時にそこで……」

「え、待て、なに、紹介？　初耳なんだけど？」

「でしようね、今初めて言ったもの。父さんにはもう話してあるから大丈夫よ」

なにが大丈夫なんですかねえ……。

こともなげに言つてのける雪ノ下に、俺は何も言葉を返せずにただただ固まることしかできない。

いつの間にか自分の知らないところで恐ろしいイベントが組みまれていた。

彼女の父親に挨拶なんてものは男にとって人生でトップクラスの試練とも言え、ラスボスに立ち向かうようなものだ。

ジエンダー問題が取り上げられることも多くなった昨今では、昔ほどは亭主関白という概念は薄れてきているようにも思えるが、だからといって安心できるほど俺の心は凶太くできていない。

頭の中ではどうにか逃れられる手段はないかと、色々な言い訳が浮かんでは消えてを繰り返していたのだが。そこに雪ノ下が小さく微笑みながら。

「そこまで緊張する必要はないわ。父は見た目こそオールバックで頭

脳派の暴力団組員のようだけれど、母と比べればずっと話も通じるから」

「ねえそれインテリヤクザみたいだな見た目って言うてんの？ そんな人に挨拶するの俺？ 何か機嫌損ねて沈められる予感しかしないんだけど」

「だから大丈夫だと言っているじゃない、見た目はともかく中身はまっとうな人よ今は。でなければ県議会議員なんて務められるわけないでしょう」

「まあ、そりやそうだな………え、お前、『今はまっとう』とか言っただ？ 今は？ 昔はやんちゃしてましたとかそういうアレなの？」

俺は冷や汗をかきながらそう尋ねるが、雪ノ下は優雅に紅茶を口元に持つていき、その後微笑むだけだ。おいそれで誤魔化せてるつもりか可愛いけど。

マジかよ一気に不安になってきた………そういう建設業とか言っただか親父さんの会社、確かにその業種にはそっち関係のイメージもあるが……。

俺としては大人と話すこと自体はいいし、むしろ半端に距離が近い同級生なんかよりはマシまであるのだが、怖い大人の人とどう話せばいいのかなんて想像すらしたこともなかった。今からアウト○イジとか観て予習した方がいいの？

平塚先生相手にふざけたことを言っただけ拳が飛んできてくることはあったが、その相手だともっととんでもない物が飛んできそうだな。

………まあでも、うちの親父も大概アレだから、他所様の父親をとやかく言える立場でもないんだよなあ。

いつかはうちの家族にも雪ノ下を紹介しなければならぬのだろうが、その時はまずあのクソ親父のグラスンだけは叩き壊すと決めている。

そんなことを考えていると、雪ノ下は俺の不安を和らげたいのか、どこか優しげな声色で。

「そもそも、ウチは父よりも母が実質的な権力を握っているから、いくら父が猛反対しても母が押し切ってくれるわよ。あなたは母に気に

入られているし。むしろ逃さないようにと言われているくらいよ」

「ええ……怖いんだけど……別に逃げないから」

「ふふ、どうかしら。とにかく、同棲に関してウチの問題はないから、あとはそつちね。小町さんにそれとなく言ってみたら、ぜひと言ってくれたけれど」

「だろうな。父親と母親も大賛成というか、厄介払いできて大喜びするぞきつと。これが小町だったら大騒ぎで、特に俺と親父が怒り狂って相手を抹殺するまでであるが」

「あなたと小町さんの扱いの差が無慈悲ね……でも、それなら何の問題もないじゃない？」

そう言つて首を傾げて微笑む雪ノ下。

そんな仕草を見せられたら、大学生になったらと言わず今日からずっと同棲しようぜ！ とか調子乗っちゃうから気をつけてね？

俺は紅茶を一口飲んで、一息入れてから。

「……ま、それはまた後で考えるつてことでいいんじゃないか。まず志望校に受かるかどうかつて問題もあるしな俺は。お前はそんな心配はないのかもしれないが」

「あなたも心配ないわ。危ないと思ったら、ここに監禁してでもその頭に詰め込むから」

「だからいちいち発想が怖いんだよなあ……」

「そうならないように、きちんと勉強しておくように。……でも、そうね、同棲とかは今考えても仕方ないかもしれないわね」

雪ノ下は納得してくれたのか、顎に手を当てて考えつつコクリと頷く。

そう、俺がそういった事に現実味を感じられないというのは、受験という差し迫ったものがあるというのが大きい。どれだけ大学生活について考えたところで、現時点では絵に描いた餅でしかないのだ。

もちろん、そういうのがモチベーションになるというのもあるとは思うが。

……要するに、決して俺がビビってるとかへたれているとかそういう事ではないわけだ。

うん、多分。おそらく。いやちよつとそれもある。いや大分ある。だつて同棲とか未知すぎるし絶対俺何かやらかすし……。

しかし、雪ノ下はこちらを見つめ、妙に庄のある笑顔で言う。

「言っておくけれど、あくまでこの話は保留というだけだから。あなたが受験勉強で頭から抜け落ちても、私は絶対に忘れずにまた持ち出すからそのつもりでね」

どうやら俺には逃げ場などというものは存在していないらしい。

雪ノ下の親父さんも、こんな感じに困い込まれたのだろうか……俺ちよつと仲良くなれそうに思えてきたぞ。

× × ×

その後二人で食器洗いを済ませたあと、雪ノ下は風呂へと向かい、俺はリビングのソファァーに沈んで大画面テレビでパンさんのアニメを観ていた。

せつかくのお泊りなのでスマホを弄っているのもアレだと思い、軽い気持ちでパンさん観てもいいかと言ってみたのだが、雪ノ下の食いつきっぷりが凄かった。

この作品は必ず観るべきだとか、どこのどの描写に注目して観てほしいだとか、挙句の果てには原作を引っ張り出してきて目の前のガラステーブルに並べ始めたり。

いや気持ちは分かるけどね。

よく好きなジャンルになるとメツチャ饒舌になって引かれるオタクの話なんかがあるし、やはりというべきか俺も昔やらかしたこともあるが、好きなことになるって活き活きすること自体は誰にでもあることだろう。

ただ、普段は大人しい奴が急に活き活きすると気持ち悪いというだけの話なのだ。なにそれ酷い……。

……それにしても、こうして観ると意外と良いこと言ってるなパンさん。

某たぬきロボットのような日本の国民的アニメでもそうだが、子供

向けだと甘く見てると想像以上に大人に刺さる言葉が出てくること
が割とある。

パンさん、「君より一日少なく生きたい」とか言ってるけど、完全に
口説き文句だろツイッターでバズりそう。俺も雪ノ下に言ってみよ
うか、やめた方がいいな絶対。

そんなことを考えながらぼーっと観ていると、ふわっと清涼感のあ
る香りが鼻をくすぐる。

反射的にそちらに目を向けると、風呂上がりの雪ノ下が飲み物を片
手に近くまでやって来ていた。

シンプルな白い前開きのシャツとワイドパンツというパジャマ姿
で、可愛い女子高生というよりは仕事のできるOLの休日的な雰
囲気が出ている。

雪ノ下は物音を立てずに俺の隣に座ってくる。

触れ合った肩から伝わる、風呂上がりのためか俺より少し高い体温
に胸の中がざわつき、パンさんどころじゃない。

だから俺も物音を立てないように最小限の動きでもって彼女との
間に小さな空間を空けた。

しかし、すぐにその空間は消え去り、再び肩が触れ合う。

すると俺もまた少し離れる……というのを何度か繰り返していた
ら。

「比企谷くん、さっきから何をもぞもぞしているのかしら。集中しな
きゃ」

「……はい」

いや君のせいで集中できないんだけどね……という主張が喉まで
出てきたが、おそらく何も効果がないので飲み込む。

そのままどれだけの間そうしていただろうか。

気付けば一作が終わっていて、隣では雪ノ下がふっと満足気に息を
ついてブルーレイディスクを取り出している。

もしかしてこれから感想言い合うとかそういうノリなんだろうか、
誰かさんのせいで全然頭に入ってこなかったんですが……。

雪ノ下はディスクを大切にしまうと、隣に戻ってきて微笑みながら

聞いてくる。

「どうだった？」

「……あれだな、パンさんは友達多いカースト上位のリア充ってのは分かった」

我ながらもう少し気の利いたことは言えないのかとも思ったが、このパンさんガチ勢に中途半端な誤魔化しなど利かないだろう。

そして意外なことに雪ノ下はくすくすと笑っていて気分を害した様子はない。

「パンさんを観てそんな感想が出てくるのも、あなたくらいでしょうね」

「まあ、俺が『パンさんかわいい』とか言い出してもアレだろ」

「それは……控えめに言っつてとてつもなく気持ち悪くて気味が悪いわね」

「控えめに言っつてそれとか、本気出したらどうなっちゃうんだよ。いや言わなくていいぞつか言うな」

口撃が始まる前に先手を打つと、どこか残念そうにしている雪ノ下。ただ俺の悪口言いたいんですかね……。

代わりにというわけではないだろうが、雪ノ下はくすりと笑みを浮かべて尋ねてくる。

「そんなリア充の物語は、ぼっちの比企谷くんにはあまり好ましくなかったかしら？」

「……いや、普通に面白かったわ。あの全体的に緩い感じは癒やされるし、その中でも良いこと言っつてるかメッセージ性もあったし。正直パンさん舐めてた。何だっけか、『さよならを言いたくない相手がいることは幸せ』とか思わず真面目に考え込んだじゃったしな」

「有名なセリフね。でも少し意外かしら、比企谷くんは常にさよならを言うチャンスを探っているイメージだから。隙あらば家に帰ろうとするじゃない」

「んなことねえよ。むしろ、さよならにはトラウマがある。中学時代の放課後、昇降口で同じクラスの気になった女子に勇気出してさよならって挨拶したことがあった。それで向こうも返してくれたんだ

が、隣にいた友達に『誰だっけ?』って聞いてたことがあってな。一応俺に気を使ってヒソヒソ声ではあったんだが、もつとヒソヒソ言っ
てほしかったわ。聞こえちゃってるし」

「彼女の中ではさよなら以前に初めましてが存在していなかったのね
……」

「ちなみにその友達の方は『バカ、同じクラスの……同じクラスの人
だよ!』って俺が同じクラスってのは知ってくれてて、思わずそっ
ちに惚れそうになった」

「どちらにせよ名前は覚えられていないというのはいいのね……好意
を抱くハードルが著しく低くないかしら、中学生のあなた……」

呆れ果てている様子の雪ノ下だが、実際男子中学生なんてのは程度
の差こそあれど、簡単に女子に惚れる生き物だとは思う。それこそ、
消しゴム拾ってくれただけで好きになるまでである。

多感で向こう見ずで様々な失敗もする。そこには後悔ばかりが
あって、「あれも良い経験だった」などと美化することもできず、しか
しそういった経験が今の自分を作っているのも事実なので全否定す
ることもできない。

とはいえ、そこから更に時と経験を重ね、傷は古傷となりやがて思
い出になるのだろう。俺が今では折本かおりと普通に話すことがで
きるように。

「つか、そういう雪ノ下だって中学時代はさよなら言う相手とかいな
かったんじゃないの?」

「あら、私は時々言っていたわよ。男子から告白されて断る時、最後は
大体『さようなら』だったから」

「お前のさよなら絶対零度過ぎるだろ……それ悪役が相手をボコボコ
にしたあとトドメを刺す時に言うやつと同じじゃねえか……」

「ちなみに、相手からさよならが返ってきたことはないわ」
「それ多分、相手は意識がさよならしかけてたんだと思うぞ」

雪ノ下のことだ、おそらく告白を断る時も相手を慮って言葉を選ぶ
ということはずせずに、ストレートな拒絶の言葉でもって一刀両断にし
ていたのだろう。

まあ、半端な優しさを見せられるというのも、それはそれで居たたまれないものがあり心にくるのだが、だからといってストレートな言葉なら傷が和らぐというわけでもなく大ダメージには変わりない。

中には、告られそうな雰囲気を感じて実際に告られる前に脈なしだというのをそれとなくアピールして回避するという高等戦術を使う女子もいて、その方法であればその後の関係への支障も最小限に抑えられるのだろうが、もちろん雪ノ下にそんな器用な真似ができるはずもない。そういうのは一色が得意そうな領分だ。

俺は氷の女王に魅せられ散っていった男達に心の中で合掌しつつ。「そういや由比ヶ浜達は帰り雪ノ下と別れる時、結構名残惜しそうにしてるよな。ああいうの見せられると、お前でもちよつとは情のようなもんが湧いたりするんじゃないか?」

「人を感情のない冷徹人間のように言わないでもらえるかしら。私だって、その……今では別れを惜しむという気持ちも少しは理解しているつもりよ」

「お前それ、もつと分かりやすくすればあいつらも嬉しいと思うぞ。まあ、あいつらはあいつらで、お前のそういうところはお見通しなんだろうけどな」

「……先程から他人事のように言うけれど、あなたに対しても同じ気持ちは持っているわよ。あなたは全く気付いていないようだけれど」「え……そ、そう……ほーん……まあ、なんだ、由比ヶ浜達ならともかく俺とはあまり一緒にいすぎるとうんざりすると思うけどな。ほら、小町だっていつも俺のことで愚痴ってるし」

「小町さんは表面的には嫌がつているようだけれど、口ぶりは随分と楽しそうな印象も受けるわよ。辛辣な言葉は愛情の裏返しというものでしょう。私と同じよ」

「……………あの、雪ノ下さん?　なんかこつちがメツチャ恥ずかしくなってきたんで、そろそろこの話終わりにしない?」

「……ダ、ダメよ。あなたの話がまだでしょう」

雪ノ下も同じく恥ずかしらしく頬を染めてそわそわと髪を撫で付けつつ、こちらにじつと視線を向けて逃さないという姿勢を見せ

る。

「今ではあなたにもいるのでしょうか？ 『さよならを言いたくない相手』が」

「……………」

「戸塚くんは禁止」

「こ」

「小町さんも禁止」

「先回りして逃げ道を封鎖してくる雪ノ下。」

「なんなのこの子、俺のこと分かりすぎでしょ……………もはや読心術とかそういうレベル。」

「その二人を封じられると既に逃げ道全部塞がれた状態なんです……………」

「雪ノ下は瞬きすらせずにこちらを見つめ続けている。」

「……………これはあれか、もう腹くるるしかないようだ。」

「ふつと一息入れる。」

「心臓はバクバクと騒がしく、妙な汗まで滲んでくる始末で、声が震えないか心配で仕方ないが。」

「大丈夫だ、あの時と比べればずっと。」

「……………だから、掴んだんだろ」

「え……………」

「離れたくなかったから……………ずっと関わり続けたいって、言ったら……………」

「……………」

「ここで雪ノ下も俺の言っていることが分かったようだ。」

「目を少し大きくして驚いた様子を見せると、やがてその目を優しく細め、ゆつくりとこちらに体を預けてくる。」

「自分の手に、きゅつと華奢な手の感触が伝わり、それを握り返す。壊れないように力に注意しながら、それでも決して離さないように。」

「きつと俺たちの脳裏には同じ景色が広がっているのだろう。」

「国道の上を通る陸橋、下を走る車の白いライト、オレンジ色の街灯。その光景は、何年も経って大人になってこの高校生活を思い出す時

でも鮮明に瞼の裏に浮かんでくるのだろうと漠然とした予感がある。出会いもあれば別れもあるというのは、あまりにも使い古された表現で聞き飽きた感すらあるもので、その多くは別れの悲しさを少しでも紛らわすために使われるものなのだろう。

ところが俺にとって別れというのはむしろ好意的なものですらあり、総武高校を受験した理由も同じ中学の人達と離れたかったからというものだった。

つまり当然ながら「さよならを言いたくない相手」など誰一人としていなかった。

以前までの俺だったら、パンさんのその言葉を鼻で笑い飛ばし、様々な理屈をつけてそれを否定したはずだ。

それこそ平塚先生に呼び出され奉仕部に放り込まれる原因にもなった、青春を否定しリア充の爆破予告までした作文のように。

しかし、今の俺は知っている。

どれだけの理屈や言い訳も通用しない、ただただ自分の中に強くあり続ける想いというものを。

そしてそれを知ることができたことは、幸せだと言えるのだろう。

——要するに、パンさん結構良いこと言ってるから皆も観ようぜ！

× × ×

その後もしばらくパンさん鑑賞会にパンさん談義などをしていて、気付けばもう夜も遅くなってきたのでそろそろ寝ることに。

寝室へと向かう俺の両手はパンさんの原作本で塞がっていた。

もうすっかりパンさんマニアに片足突っ込んでる。そのうちパンさん展とか行っちゃいそう。

でもデートの選択肢としてはそういうのも普通にアリだとは思う。

「本当に借りていいのか、これ。大事なもんだろ？」

「大事なものだけけど、あなたと趣味を共有できるのであれば私も嬉

しいわ。できれば翻訳版だけではなく原作も読んでほしいけれど」

「いや原作とか読めねえし……」

「あら、読もうと思えば案外読めるものよ。困ったら辞書を引けばいいし。翻訳版はどうしても翻訳家の感性が介在するもので、細かいところで微妙にニュアンスが変わっていたりもするから、本当の意味で楽しみたいのであれば原作が一番だと思うわ」

「なにそれガチ勢過ぎる……ハリ○タなんかは翻訳版が待てずに原作を頑張って読んだって人たまに聞くが、パンさんでそこまでするのはそうそういないだろ……」

「ええ、そうでしょうね」

どうやら褒められていると受け取ったらしくドヤ顔の雪ノ下さん。かわいい。

そして同時に満足げな様子でこちらに微笑みかけながら。

「でも比企谷くんがここまでパンさんに興味を持ってくれたのは少し意外だったわ。てつきり、可愛い女の子が次々と主人公に言い寄ってきて、都合の良いアクシデントで裸体を晒したりするような物語を好むのだとばかり」

「おい待てお前、それラノベだろ絶対。俺が読んでるの覗いたの？
つか複数当てはまってどれか分かんないんだけど」

「恋人の好みを知りたいと思うのは当然でしょう。それに、別に覗いたわけではないわ。小町さんにあなたの好きな本について聞いてみたら『兄はこんなものを読んでいますよ』といくつか渡されたの」

「お兄ちゃんのラノベを勝手に渡しちゃう妹ってどうなの……つかそういうの聞きたいなら普通に俺に聞けばいいじゃん……」

「直接聞いてもはぐらかされると思っただけ。私もああいうキャラみたいになれば、比企谷くんは嬉しいのかしら？」

「やめてくれ……」

正直言うともそういう雪ノ下も見てみたいという気持ちもなくはないが、やはり違和感の方が凄いだろうし、そんなことをさせていると万が一週りに漏れたりしたら俺が社会的に死ぬこと間違いなし。既に割と死んでる気もするが……。

そういや、俺も一度だけ雪ノ下と由比ヶ浜が着替え中の部屋に入ってしまうという、ラブコメ定番アクシデントに遭遇したこともあったが、一年であれ一度きりだ。やはり現実は厳しい。

とにかく、俺の好みについて微妙な勘違いが生まれているようなので訂正しておく。

「まあ確かにそういうラノベも好きだけど、特にジャンルに拘ってるわけでもないしな。純文も普通に読む。濫読家とまでは言わんが守備範囲広いんだよ。ちなみに人に対する守備範囲はメチャクチャ狭い」

「それはよく知っているわ……けれど、あなたは女子に対しても中々手広い方じゃないかしら。私や由比ヶ浜さん、それに一色さんや川崎さんってそれぞれ全然タイプが違うし、他にも姉さんや平塚先生……は女子ではないけれど」

「ちよつと？ 言い方おかしくない？ 俺が女子に手を出しまくる最低男みたいになってない？ あと最後、お前絶対本人には言うなよ」

奉仕部に入ってから女子の知り合いが増えたというのは事実ではあるが、決してそんなハーレムラノベ主人公みたいな状況ではない……はずだ。

というか、最近は主人公に優しいヒロインってのが多くなってる感じなのに、俺の周りの女子は俺にキツイ奴ばつかな気がする。

雪ノ下や川崎は言うまでもなく、一色は隙あらば俺のこと振ってくるし、一番優しい由比ヶ浜ですら時々容赦なくキモいとか言ってくるしな……あ、戸塚はいつも優しいじゃん！ やはり戸塚がメインヒロインだったか……。

そうこうしている内に、部屋の前までやって来る。

「比企谷くん、寝る前に歯を磨きなさい」

「え、ああ、磨くわ普通に。いきなりどうした」

「では洗面台で待っているわ」

そう言っって、雪ノ下はさっさと行ってしまふ。

洗面台で待ち合わせする意味は皆目見当もつかないが、そんなところで雪ノ下を待たせたりしたら俺が一晩マンションの前で待たされる

はめになりかねないので大人しく従うことにする。

部屋に入ると、とりあえずパンさんの本は机の上に置いておき、荷物から歯ブラシセットを取り出す。

寝る前の歯磨きって子供の頃はメツチャ面倒で親に言われて嫌々やってたけど、習慣になるとやらないと落ち着かなくて寝られないくらいになるんだよな。

そんな両親の洗脳……もとい躰で歯のことでそんなに困ったことはない。ただ、歯は無事でも目とか性格が腐っちゃったんだけど。

洗面台までやって来ると、雪ノ下が歯ブラシ片手に準備万端といった様子で待っていた。

「……あー、一応聞いとくけど、別に一緒にしなくても良くない？ 小町なんか、俺が歯磨いてる時に洗面台に来ると、『お兄ちゃん邪魔！』ってどかしてくるぞ。まあウチが狭いってのもあるんだが」

「おそらく小町さんは、比企谷くんに自分の歯ブラシを変なことに使われないか心配なんじゃないかしら」

「おいやめろ。小学生の時女子のリコーダーを誰かが舐めてた疑惑が浮上した時に、何故か俺が真っ先に疑われたの思い出しちゃうだろうが」

「私が言うのもなんだけれど、あなた本当にろくな学校生活送ってきていないわね……」

頭を抑えて溜息をつく雪ノ下。

ほんとそれな。普段は存在感皆無なのに、たまに目立つことがあると思っただらそういうろくな状況じゃないってのが俺の学校生活だ。高校でも文化祭の時とか散々だったし。

いや文化祭のアレに関しては自分からそう仕向けたから自業自得ではあるんだが……。

とにかく、この話題を掘り下げても嫌な思い出ししか出てこないの
で、ここで話を戻しておくことに。

「それで、なんでわざわざ一緒に歯磨きするん？ 自分の完璧な歯磨きを見せつけて、ついでに俺のことをボロクソに言いたいとか？

『あなた歯磨きすらまともに出来ないの？ 目や性格はもうどうにも

ならないのだから、せめて歯くらい綺麗にしておいたら?』とか」
「あなたは私のことをなんだと思っているのかしら。違うわ、私はただ……その……」

雪ノ下は少し口ごもったあと、目を逸らしてこちらを見ないようにしながら小さく答える。

「……………こういうの、恋人らしいじゃない。だから、やってみただけ」

「……………お前って意外と俗っぽいところあるよな。タピオカ好きとかもそうだけど」

「うるさい」

ほかど隣から肩を叩かれる。痛みは全くないが、ただただむず痒い。

こんなことなら追求しなきゃ良かったわ……歯磨きするだけなのに、そういう事言われると妙に意識しちゃってそわそわする。

それから二人並んで歯磨きを始めると、当然ながら会話もなくなり、辺りにはシャカシャカという歯とブラシが擦れる音だけが響く。子供の頃はこうして小町と仲良く並んで歯磨きしたもので、そのあと母親のチェックが入り、俺ばっかやり直しされるとかよくあった。懐かしい。

一通り磨いたところで口を濯ぐと思ったのだが、どうやらコップは一つしかないらしく、それは今ちょうど隣で雪ノ下が使っているところだった。

……………まあ別にコップがなくても口濯ぐくらいできるしな。まず雪ノ下が使ったあとに使うつても、何というかちよつとアレだし……………

そう考えながら水を出し、両手に溜めていたら。

「ん」

「……………お、おう。サンキュ」

隣からコップが差し出され、思わず反射的に受け取ってしまう。

え、どうすんのこれ……一度受け取ったら、もう使わなきゃ不自然なだけだ……………

コップ片手に一瞬躊躇し、ちらと隣を窺う。

すると彼女もこちらを見ていて、目がバツチリと合ってしまった。

「使わないの？」

「いや使うけど……その、そんなにじつと見られてると気になるんですけど……」

「お構いなく」

「いや構う、メツチャ構うから……」

しかし彼女は俺の言葉を受けても視線を送ってくるのをやめる素振りもない。

……仕方ない、もうこれはさっさと済ませてしまおうしかないようだ。

俺はせめてもの抵抗とばかりに、コップを少しだけ回して雪ノ下が口をつけたであろう場所をズラしてから口をつけて濯ぐ。

冷たい水が口を満たすが、一方で体の方は緊張で火照るといふ妙な感覚に戸惑いながらも、とりあえず平静を装いながら水を吐き出す。

そのまま自分が口をつけた部分を水で流しつつ軽く拭くと、元の場所へと戻……そうと思ったら、その腕が隣から伸びてきた手によって制止された。

「比企谷くん」

「な、なんだよ」

「そんなに私と間接キスするのが嫌なのかしら」

「普通に言っちゃったよそれ……別に嫌ってわけじゃない。つか、お前こそ嫌じゃないのかよ。あそこで素直に口つけたら『比企谷くん、私が口をつけたところを入念に舐らないでくれるかしら気持ち悪いから』とか言われるトラップかと思ったんだが」

「あなたから見た私のイメージがどうなっているのか、一度徹底的に聞き出す必要があるそうね……」

背後から黒いオーラさえ見えてきそうな静かな威圧感を放つ雪ノ下。

「こわい！　そういうとこだぞ！」

「そもそも比企谷くん、以前に一色さんと間接キスしていたじゃない。

バレンタインのチョコ作りのイベントの時、味見で」

「見てたのかよ……あれは一色がそういうの気にしないだけだから……」

「でもあなたは相当意識していたのが見ていて分かったわよ。それで、何故一色さんはいいのには私はダメなのかしら？」

「いや一色のはいきなり口にスプーン突っ込んでくる不意打ちだったから避けようがなかったただけだったの」

「……なるほど。不意打ち、ね」

「あの雪ノ下さん？ それ攻撃予告？」

腕を組んで何か考え込む雪ノ下に嫌な予感しかしない。

別に付き合っているんだし間接キスクらいでいちいち騒ぐなという話なのかもしれないが、せめて二人きりの時にやってほしいんだが、その辺は分かってくれてるのかしらん……。

しかし歯磨きなんて毎日やってるものでも、隣に彼女がいるだけでこんなにも違うものなのか。

確かに男女二人で歯磨きというのは同棲っぽい印象はあるし、ラブコメなんかでも度々そんな描写が出てきたりもするが、正直そのくらいで意識しすぎだろうと思ってた。

それが今、実際に経験してみた感想としては。

あなどることなかれ、歯磨きイベント。

× × ×

歯磨きも済ませて、あとはもう寝るだけ……そう思っていた時期もありました。

「……あの、なんで普通に部屋の中まで入ってきてるん？」

「何か文句あるのかしら。ここは私の部屋なのだけれど」

「いやそうだけど……でもここ、今夜は俺が使えって……」

「……………察しなさい」

寝室用のぼんやりとしたオレンジ色の明かりに照らされた部屋で、

雪ノ下は俯きながら小さく答える。その両手には枕が抱かれている。その姿は、夜中にホラー映画を見てしまった小学校低学年の頃の小町と重なり、要は一緒に寝ようということなのだろう。

しかし、お互い小学生とかなら単なる微笑ましい光景なのかもしれないが、それが交際関係にある高校生同士ともなるとまた別の意味が見え隠れする。

いや本人にそんなつもりはないだろうし、そんなことを指摘すれば変態呼ばわりされること間違いなしなのだが、もつとこう、こんな夜中に男の部屋にくる意味とか考えてほしい……。

そもそも、ただ寝るだけでもハードルは相当高い。

「あー……ほ、本気か？」

「え、ええ……別に問題ないでしょう、恋人同士なのだし」

「それは……そうかもしれないけどな……」

どうしても歯切れの悪い言い方になってしまいが、彼女は思い直すつもりはないらしく、上目遣いでこちらをじっと見つめ続けるだけで少しも動こうとしない。

……いつまでもこうしてはいられない。覚悟を決めるしかなさそうだ。

もちろん俺としても嫌というわけではない。ただ、意識しすぎて気持ち悪がられないか心配なのだ。

いや気持ち悪がられるというのはいつものことだし今更なんだが、この状況だと洒落にならない。

大丈夫だ、落ち着け。

幸いベッドは広い。一緒に寝るといっても端の方にいけば何とか凌げるはずだ。ベッドから落ちる危険もあるが、俺の人生墮落だらけだし、物理的に落ちるくらい何でもない。何言っただ俺、大分頭バグってる。

そうやって必死に頭を回しこの場を乗り切ろうとしていると、不意にピロンと電子音が部屋に響く。

俺も雪ノ下も自然と音の方へと目を向けると、少し離れたところに置いてある俺のスマホが薄暗い部屋の中で光を発していた。

こんな夜中に俺に連絡する人というのは限られている。

大方、ウチでお泊り会やつてる小町達だろうと当たりをつけつつ、スマホを操作すると短いメッセージが一つ届いていた。

『二人ともお楽しみ中ごめんね、上から二つ目の引き出し開けてみて！』

それは半強制的に入れられた『雪ノ下家』というグループチャット内で発信されていた。

メンバーは俺と雪ノ下ともう一人。つまり必然的にその人が送ってきたことになる。

どうやら雪ノ下はスマホを持ってきていないらしいので、画面を見せつつ尋ねる。

「お前の姉ちゃんから何かきたぞ。なんだこれ」

「引き出し……はあれのことかしら」

「つかなんで俺達がこの部屋にいるの知ってるの……カメラでも仕掛けられてんじゃねえだろうな」

「いくら姉さんでもそこまではしないわよ……単に行動を読まれているでしょう。腹立たしいけれど」

「お前、姉から男に夜這いかける女だって思われてんのか」

「よばっ……言い方に気をつけなさい、私はただあなたと寝たいだけよ」

「お前こそ言い方に気をつけろマジで」

雪ノ下の言い方で何も勘違いしないのは小学生くらいだろう。

「寝る」もそうだが、「やる」とか「いく」とかいかかわしい物を連想する単語は子供から大人になるにつれてどんどん増えていく。

いつまでも無垢で綺麗なままではいられない……おとなになるってかなしいことなの……。

「……で、どうする？ あの人のことだし、俺は嫌な予感しかしないから見なかったことにしてこのまま寝たいんだけど」

「だからといって放置するのも落ち着かないでしょう。比企谷くん、開けてみて」

「いやそれなら自分で開けろよ……」

「もしビツクリ箱のようなものだったら心臓に悪いでしょう。比企谷くんなら元々色々悪いから大丈夫そうだし」

「そんな暴論振りかざすお前の方がよっほど悪いでしょ性格とか……まあいいけどさ……」

これ以上言い合っても埒が明かないので、溜息をつきながら指示された引き出しに近づく。

雪ノ下もすぐ後ろに近づいてきていて、俺の服の裾をきゅっと握って肩越しに恐る恐るといった感じで見守っている。

そんな彼女の様子は可愛らしく、それだけでこの無茶振りも許せてしまうのだから俺も大概チョロいな……。

俺はゴクリと一度生唾を飲み込むと、意を決して取っ手を掴む。

そのまま手に力を込め、一気に引いて開ける。背中では雪ノ下がビクツと体を震わせたのが伝わってきた。

こういうのはゆっくりといくよりも、一気にいった方が精神的にまだマシだ。

どうやら中は雪ノ下が危惧していたようなビツクリ系のもものではなかったらしく、小さな正方形の何かが――。

「……………」

無言でそのまま引き出しを閉めた。

「比企谷くん？ 中身は何だったの？ よく見えなかったのだけだぞ」

「雪ノ下、世の中には謎のままにしといた方がいいこともあるんだぜ」

「そんなことはないわ」

「あ、バカっ……………」

某キッドさんのカツコイイ名台詞を全否定して引き出しを開けてしまう雪ノ下。

そしてそのまま何の躊躇もなく正方形のそれを手に取り、しげしげと眺める。

部屋に物音一つしない静寂が広がる。

……………なにこの辛い沈黙。気分は処刑を待つ死刑囚。

今なら戸部のあの馬鹿騒ぎですらありがたいと思えるくらいだ

……俺、今度からもう少し戸部に優しくするよ……。
少しして、雪ノ下の口が開く。

「……これなに？」

「は？」

えー知らないんですか雪ノ下さん……いや一応良い所のお嬢様だし、そういうこともあるか……。

まあ、ここで「始めて見たー！」とかテンション上げられて中身とか取り出されても困るんだけど。一色とか小町とかやりそう。

あと戸塚も見ても分からなそうな気もする。そういう無垢な戸塚も可愛いが、分かった上で顔を赤くする戸塚も絶対可愛い。どう転んでも可愛いとかやはり天使……。

そんなことを考えて半ば現実逃避のようなものをしていたのだが、雪ノ下は俺のことは見たまま首を傾げて答えを促している。

え、これ俺が答えなきやいけないの……？

「……黙秘権を」

「認めないわ」

「横暴だ、弁護士を呼べ弁護士を！」

「はあ……言いたくないならいいわよ。スマホ取ってくるわ。由比ヶ浜さん達もまだ起きていますでしょうし、写真撮って聞けば……」

「おいやめろ。マジでやめろ」

それを手にしたまま部屋を出ていこうとする雪ノ下を慌てて止める。

そんなもん撮ってアップされたりしたら、彼女自身も後で相当アレな思いをするのは確かだが、何よりその後の俺に対する扱いとか想像したくない。

雪ノ下は腕を組んでこちらをじつと見る。

「それなら今ここで教えなさい」とその姿勢から嫌というほど伝わってくる……これはもう逃げられないっばいですね……。

こんなことなら最初にさらっと言っとけば良かった、引っ張ったせいで余計に言いづらくなってるじゃん……。

「……ム」

「え？」

「いや、だから、それ……………コンドームだよ……………」

「コンドーム……………っつ!？」

最初は首を傾げて俺の言葉を反芻していた雪ノ下だったが、その意味を把握した瞬間、顔を真っ赤に染め上げ、手に持っていたそれを思い切り投げつけてきた。俺に投げんな俺に。

そして彼女は手を擦りながら、恨みがましい目つきで俺を見る。いや俺のせいじゃなくて君のお姉さんのせいだからね……………あと別にばつちくないからこれ、気持ち分かるけど……………。

つか、陽乃さんもわざわざこの為にこんなもん買ったんだろうか。暇さえあれば妹やその周辺にちよっかい出しまくってるの見るに、彼氏とかはいないっぽい……………。

中高生の間では罰ゲームでコンドームを買わせるつてのもあったりするが、あの人の場合は何も気にせず普通に買っちゃいそうだし、その姿もオトナな女みたいなアピールにさえなりそうなのだから強い。

ちなみに俺がそういう罰ゲームをするはめになったというわけではない。そもそも罰ゲームで遊ぶような友達がいなかった。コンビニで立ち読みしていると、たまにそういう輩を見かけるだけだ。

俺自身が女子間での罰ゲームの対象にされたことならあるが、思い出すと心の古傷が開いて死にたくなっちゃうからやめておく。

雪ノ下はまだ赤い顔のまま、ちらとこっちを覗いながら。

「……………使うの？」

「使うわけねえだろ……………」

「なっ……………っ、使わないでするなんて、ケ、ケダモノ……………」

「おかしい前提がおかしい。しないから。しないから使わねえんだよ……………」

雪ノ下も動揺して相当頭おかしいことを言い出しているのも、もうさっさとそれを元あった場所にしまっておく。臭いものに蓋だ。

しかし、それにも雪ノ下が口を挟む。

「ちよっと待って、そんなものをそんな所にしまわれても困るのだけ

れど」

「それはお前の姉ちゃんに言えよ……じゃあどうすんだよ」

「……あなたが持つていけばいいでしょう。そういうのって普通は男子が持つておくものではないかしら……」

「い、いや待て、俺がこんなもん持つてるのもおかしいだろ」

「大丈夫よ、あなたはそんなもの持つていなくても元々おかしいから」
「何が大丈夫なんですかね……はあ、分かったっての」

有無を言わせない雪ノ下に、粘つても無駄だと悟り、さっさとそれを荷物の中にしまう。

こういうのは財布の中に入れておくというのも聞いたことはあるが、流石にそんなところに入れる気にはならない。

気分的には、うっかりすると社会的に死にかねない危険物を抱え込んでしまったような感じだ……一刻も早く処分したいが場所はよく考えなければならぬ。ウチのゴミ箱に捨てて方が一母ちゃんとかに見られたら死ぬしかないからな……。

ともかく、これで一段落ついたからようやくやく眠れる……と思ったのだが。

どうやら雪ノ下の中ではまだこの話は終わっていないらしく、まだ顔を赤く染めたまままでこちらを覗いながら尋ねてくる。

「あの、比企谷くん。申し訳ないけれど、今日はそういうことをするつもりはないから……まだ早いと思うし……」

「わ、分かっているっての、いちいち言わなくていいから……。それに別に謝る必要もない。俺だつてもともそんなことする気なんて全然ないし……」

「……全く期待されていないというのも、それはそれで何か釈然としないものがあるわね。あなたもしかしてイン」

「おい何言おうとしてんのちげーわ。じゃあ何だよ、押し倒せばいいの? 『押すなよ? 絶対押すなよ?』ってやつなん?」

「比企谷くん私を押し倒せると思ってるの? 忘れたのかしら、私、合気道強いよ」

「じゃあどうしろと……お前ホントめんどく」

「なに？」

「何でもないです」

口からほとんど出かかっていた言葉は、雪ノ下の氷の眼差しによって押し戻されてしまう。怖すぎでしょ……仮にも彼氏に向ける目じゃねえだろ……。

もうこれは多少強引にでも話を切り上げて、さっさと寝てしまった方が良さそうだ。

「まあとにかく、何もしないから安心しろ。おやすみ」

一方的にそれだけ言うと、ベッドの端の方に潜り込み、外側を向いて寝る体勢に入る。

この状況ですぐに寝られるかと言われれば極めて難しいと言う他ない。

ただ、実際に寝られるかどうかというのは大した問題ではなく、重要なのは周りから寝ていると思われることだ。

中学時代の修学旅行の夜なんかはこれで凌いできた。要は教室での寝た振りと同じだ。「寝ている」という言い訳を用意しているのだ。別に雪ノ下と一緒に寝るといのが嫌というわけではないし、むしろその逆とも言えるのだが、とにかく気まずい。

これは俺がコミュ障のぼっちだからという理由だけではないはずだ。普通に考えて同い年の女の子と一緒に寝るとか誰でも緊張するだろうし、あの葉山だつて経験したことないんじゃないや……え、もしかして俺、あのリア充の最先端を走る葉山より先に進んじやつた？

……気付けば遠い所まで来ちまつたな。

そうやってバカなことを考えていればその内自然と眠れるんじゃないかという淡い希望を抱いていたりもしたのだが、そんなことでバクバクと高鳴る心臓を誤魔化すことなどでできず、今までどうやって寝てたんだっけとか思ってしまうくらいに寝られる気がしない。

もしかしなくてもこれは完徹コースなんじゃ……と不安になっていくと。

ごそごそという音と共に、掛け布団の中に新たな空気が入ってきたのを背中から感じる。

「お、お邪魔します……」

か細い声が聞こえてきたが、返事をする余裕は既がない。

心臓の音は更に大きく速くなり、耳の奥からもドクドクと血流がよくなつていく音が響いてくる。全身の触覚が背中に集中しているかのように、背後での僅かな動きにも敏感に反応してしまう。

それからしばらく、物音一つしない完全な静寂が訪れる。

しかしそれはあくまで部屋の中での話であり、俺の内面は相変わらずの大騒ぎで一向に収まる気配がない。

……雪ノ下はもう寝てしまったのだろうか。

当然ながら振り返って確かめるなんてことはできないのだが、寝ているのであればそれでいい。お互いに起きていてそわそわしているなんてのが一番気まずいパターンだ。

とはいえ、俺の方はこんなにも大変なことになっているのに、彼女の方からは全く意識されていないというのも、それはそれで何とも言えない感じが……俺も大概面倒くせえな。

「比企谷くん、起きてる？」

いきなり背後から声をかけられて思わずビクツと体を震わせてしまう。

もうその反応が答えのようなものなのだが、無駄な抵抗だと分かりつつも無言を貫いておく。

それでも構わず、彼女は言葉を続ける。

「ねえ、起きているでしょう？」

「……………」

「……なるほど。そうやって寝た振りを続けて、私が寝たところを見計らって襲うつもりなのね。比企谷くんらしい姑息な企みね」

「んなわけあるか。お前は俺のことどんだけクズ男だと思ってるんだよ、流石にそこまでじゃねえわ」

「ええ、そうね。あなたはそこまで積極的なことはしないわね。やるとしたら、私の寝顔を盗撮して楽しむとかかしら」

「まずその寝ている女子に何かやらかすってところから離れない？
ねえ？」

「あなたが寝た振りなんてしているのが悪いのよ」

「……あ」

うっかり普通に受け答えしてしまっていた。

雪ノ下からの暴言に対してはもはや反射的に答えてしまうように体ができてしまっているようだ……なんだこの既に調教されちゃってる感、地味にシヨクなんだけど……。

思わず溜息を溢しつつ、流星にもう寝た振りは無理があるので、諦めて普通に言葉を返すことにする。

「で、どうしたんだよ。寝られないのか？ 何だったら寝る前のお話でもしてやろうか。昔は寝る前に小町に怖い話をしてキレられたあと親にも説教くらったもんだ」

「結構よ。わざわざそんな話をしなくても、既にすぐ近くにお化けのようなものがあるもの」

「奇遇だな、俺も近くに禍々しいものを感じるぞ。たぶん雪女だな」

お互いに散々なことを言い合っているのだが、自然と口元が緩んでしまうのだからおかしなものだ。

こんなのは同じベッドで横になっている恋人同士の会話としては確実に間違っているのだろうが、だからこそ俺達らしいとも思える。

どうせ寝られないなら、いつそこのまま話し続けるのもありかもしれない。先程からのやり取りでむず痒い雰囲気も緩和されたし……とか思っていたら。

背中から、自分のものではない別の体温が伝わってきた。

「つ……お、おい、雪ノ下？」

「……雪女はこうやって寄り添って相手を凍えさせたりするらしいわよ」

「むしろ熱くなってきたんだけど……」

「ふふ、それは妙ね」

雪ノ下は楽しげに笑っているようだが、こっちはそれどころじゃない。い。

女子からの軽いボディタッチで惑わされ死地へと向かわされた男は数知れないだろうが、雪ノ下雪乃は本来何人たりとも触れさせない

というような空気を纏った女子だ。

そんな彼女からの接触というのは、より破壊力がある。

そもそも、これは軽いボディタッチどころではない。

普通に引っ付いてる。背中全体から彼女の細身の形やら何やらが色々伝わってきてとにかくヤバい。何がヤバいつて何もかもがヤバい。

ダメだ熱くなりすぎて頭オーバーヒートしてるわ。

「比企谷くん、女子とくっついて寝るのは初めて？」

「……いや、小さい頃は小町と一緒に寝たもんだ。最近は全然寝てくれなくなっちゃったけど」

「いくら何でも高校生の兄妹が一緒に寝ていたらどうかと思うけれど……それにしても、こういう事を聞かれて妹を女子にカウントする辺り、やはり比企谷くんって筋金入りのシスコンね」

「うっせ、妹いるお兄ちゃんは大体皆シスコンだ。ソースはラノベ」
「そのソースは信用できるのかしら……でも、困ったわね。何か一つでもあなたの初めてをもらいたかったのだけれど」

「……初カノ、じゃダメなのか」

返事はすぐに返ってこなかった。

つい流れで深く考えずに言ってしまったが、今結構気持ち悪いこと言ったな俺……どうしよう、雪ノ下の次の言葉が恐ろしい。こっから延々と罵倒されるんじゃないだろうな。

しかし、少しして発せられた彼女の声は、驚くほど弱々しいものだった。

「……………それだけじゃ足りない。ごめんなさい、私、面倒くさい女なの」

こつんと、背中に頭を押し付けられる感触が伝わってくる。

先程までの樂しげで挑戦的な調子は影を潜め、その声は彼女に似合わずどこか気弱で不安の色が滲んでる。

少し体を振って彼女の方を見ようとするが、頭を押し付けてきているのでその黒髪しか見えない。

「自覚はあったけれど、こうしてあなたと付き合うようになって思っ

ていた以上に自分の面倒な部分を実感することが多いわ。比企谷くん他の女子との間であつた事とか、どんな些細なことでも対抗心を持ってしまふし、嫉妬してしまうの」

「……それはお互い様だ。俺だつてお前と葉山の昔の話とか聞いてるとモヤモヤするしな」

「それでも、あなたはここまですたりはしないでしょう。こうして私の部屋にあなたを泊めたのも、元は由比ヶ浜さんに対抗してのことなのだし」

「……俺は」

「分かっているわ、本当に何もなかったということくらい。でも、頭では分かっているけど気持ちがついてきてくれないの。由比ヶ浜さんは私の大切な友人。それでも、比企谷くんとのことでは何一つとして譲りたくない」

ぎゅつと、背中を掴む力が強まる。

「由比ヶ浜さんの部屋で比企谷くんと彼女が二人きりでいた。私とあなたとはまだそういつた経験はなかったのに。その事実そのものにどうしても納得できなくて、ここまですて何とか納得しようとしているの。私はあなたと一晩を共にした、だから何も気にする必要はない……と」

「……………」

「ろくに説明もしないでこんなに振り回してしまつてごめんさい。……比企谷くんは私の面倒くさい所も良いとは言ってくれたけれど、こんなことをいつまでも続けていたら、いくらあなたでもいつかは愛想を尽かすわよね。これから直していくから……」

「雪ノ下」

俺が寝返りを打ち彼女と向き合うと、向こうは意外だったのか顔を上げて目を大きくする。

至近距離で交わる視線。互いの息遣いすら肌で感じられる程のこの状況は、普段であれば羞恥心に耐えきれなかっただろう。

しかし、今の俺はそんなものは気にならない。

気まずさやら羞恥心なんかよりも、もつと優先すべき事柄が確かに

存在するからだ。

彼女から送られる真っ直ぐな視線を受け止め、俺は言葉を紡ぐ。「流石に許容できないと思ったらちゃんと言う。そういうのは言葉にしないと拗れまくるってのは嫌というほど分かったからな。だから、あれだ……あんま気にすんな。別に何も直す必要はねえし、俺に気を使っただけで自分を変えるとかそういうのはやめろ」

「……本当にそう思ってくれてる？　あなたこそ、気を使わなくてもいいのよ」

「使うか。つか、お前の面倒くささはよく分かってるし、このくらいは全然想定内だ。俺を甘く見るなよ」

「それは慰められているのか判断に困るわね……」

雪ノ下は微妙な顔をして不満そうだ。

とはいえ、落ち込んだ女子を慰めるなんてのは俺の最も苦手とする事の一つなので多少は目を瞑ってほしい。俺は葉山みたいな気を使えるリア充じゃない。

ただ、普通の女子であれば気を使えないというのは致命傷になりうるが、雪ノ下に関してはむしろ何の解決にもならない慰めなど必要としないだろう。

だから俺は、雪ノ下の不安が全くの杞憂であることの根拠を並べていくだけだ。

「大体、今日のことだって迷惑だなんて一言も言ってないぞ。普通に引いたり恐怖を覚えることはいくつかあったが」

「それはつまり迷惑という事じゃないの？」

「違う。そういう所があつてこそ雪ノ下雪乃だと、俺は思ってる。迷惑って言うなら、自然なお前を見られなくなる方が俺にとっては迷惑だな」

「……………なにそれ嬉しくない」

「そもそも、人間生きてるだけで色々と迷惑かけるもんだしな。特に俺やお前みたいなくソ面倒な人間はな。そんな面倒なやつ同士で付き合ってたんだから、そういうのをいちいち気にしてもキリがない」
「だから、あなたは本当に……………もういいわ、ばか」

ほかと胸元を叩かれるが、痛みは全くなく、それどころか暖かみさえ伝わってくるようだった。

そんな彼女に頬の緩みを抑えられなくなり、口元には苦笑が浮かぶ。

とはいえ、これだけで済ませてはいけないだろう。以前までだったら良かったのかも知れないが……今はもつと伝えたい言葉がある。

「——今日は楽しかった。それだけでその他諸々のことは気にならん。それに、なに……お前に振り回されるのだって、その根底に、あー、そういう想い、とかがあるなら……むしろ嬉しい……しな」

途中までは淀みなく言えたのだが、段々と自分の言葉の気恥ずかしさに押し潰されそうになり、歯切れが悪く声も小さくなってしまおう。締まらねえ……。

濁してはいるが、要は「俺のことが好きで色々やらかしちゃうんなら全然オツケー！」みたいなことであり、俺らしくないなんてのは痛いほど分かる。

しかし、それを言い出せば、そもそも俺がこうやって男女交際というやつをしている時点で俺らしきなんて吹き飛んでいるわけで。

そしてその変化を好ましいものと自分自身で捉えているのだから、こういった面も新たな自分らしさだとアップデートするべきなのだろう。

雪ノ下は意外そうに少し目を丸くしたあと、小さく笑みを溢して。

「あなた、楽しかったの？ 全然そんな素振り見せていなかったじゃない。私ばかり楽しんでしまったと思っていたわよ」

「……これでも普通に楽しんでたわ。分かりやすくはしゃぐの得意じゃないんだよ。まず、俺がそこらのリア充みたいにぎゃーぎゃー騒いでたらなんかアレじゃん……」

「……確かに。たまに戸塚くんのことでは分かりやすく上機嫌になっっていることはあるけれど、気味が悪い通り越して気持ちが悪いものね、あなた……」

「言いすぎでしょ……普通にひでえ……」

「大丈夫よ。あなたがどれだけ気持ち悪くなくても、私は受け入れら

れるから。そういう気持ち悪さがあってこそ比企谷くんよ」

「それフオローしてるつもり？　むしろ追い打ちにしか思えないんだけど？」

「あら、あなただっけ私について似たようなこと言っていたじゃない。私の面倒くさいところも良いとか何とか」

「……………あー」

なるほど、さっきの意趣返しか。相変わらず負けず嫌いというか何というか…………。

でも俺が雪ノ下に言った「面倒くさい」という評価と比べて、俺に対する「気持ち悪い」ってレベル高すぎじゃないですかね…………。

思い返せば由比ヶ浜、小町、一色って知り合いの女子には大体キモいとか言われたような気がする。女子はすぐキモいキモい言うけど、それ普通の男子には大ダメージだからもうちよつと自重しようね？　気になってる子に言われた日には軽く死んじゃうよ？　女の子は繊細とかよく聞くが、男の子だって繊細なんだよ？

ただ、まあ、彼女が普段の調子に戻ってくれたのだから良しとしよう。

正直なところ、俺レベルになると彼女からの罵倒ではもう心が削られることもなく、そこからの掛け合いを楽しんじゃってる部分もあるし…………何度も言ってるが、決してマゾとかそういうわけではない。

雪ノ下は観察でもするかのように俺のことをじっと見つめながら。「でも私が言うのも何だけれど、あなた本当に感情の機微が分かりづらいわよね。小町さんは分かっているだろうしな」

「そこは単純に共有した時間の問題だろ。お前のことだって、俺よりお前の姉ちゃんの方が知ってるだろうしな」

「どうかしら。あの人に關しては怪しいところもあるわよ。私にそこまでの興味があるのかしら」

「いや何だかんだ妹のこと可愛がってるだろあの人。その表現が相当歪んでるだけで」

「あなたと同じなのね」

「おいちよつと？　俺は正しく妹を愛してるだろ一緒にすんな。妹を

狙う危険分子の排除方法とかもう十通り以上考えてんだぜ。まあ大志のことなんだけどよ。ネックは姉なんだよな」

「ごめんなさい、あなたは妹以前に根本的などころから何もかもが歪んでいたわね」

もう手遅れの人間を見る、哀れみさえ含んだ視線を至近距離からぶつけてくる雪ノ下さん。

どうしてこんな反応されなきゃならないんだ、俺はただ妹を害虫から守りたいだけなのに……。

やがて雪ノ下は何を思いついたのか、どこかからかうような笑みを浮かべると。

「では、私に手を出そうとしてくる男子がいても、あなたは気分を害したりするのかしら？」

「……お前の場合は、むしろ言い寄ってくる男共が全員再起不能になりそうで心配だわ。お前の言葉の切れ味は俺みたいに切られ慣れる奴じゃねえと一発で致命傷だからな」

「人を辻斬りみたいに言わないでくれるかしら。それに、彼女よりも相手の男を心配するなんて彼氏としてどうかと思うのだけれど。……まったく、私はあなたに手を出そうとする女子がいたら、それ相應の対処をいくつも考えているのに」

「相應の対処って何だよ怖すぎるんだけど……俺が大志を排除するのには散々なこと言ってくれたくせに、お前も大差ないだろそれ……」

「あなたと一緒にしないでくれるかしら。彼氏に纏わりつく虫の排除は彼女としてごく普通のことでしょう。それに、あなたと違って私は法には触れないように上手くやるから安心して」

「何も安心できる要素がないんだよなあ……」

この子ほんとに何やっちゃうのん？

こうしてベッドの中で、俺に手を添えちやつたりして微笑みかけてきてるのは凄く可愛いんだけど、言ってる内容が怖すぎてどう反応して良いのか気持ちが悪くなったのか、雪ノ下は小さく咳払いをします。

そんな俺の様子が伝わったのか、雪ノ下は小さく咳払いをします。「もちろん誰彼構わず処理するわけではないし、きちんと調査はする

わ。例えば由比ヶ浜さんを初めとした身近な人達に関しては、多くの場合はあなたの方に非がありそうだし。その場合は、処理対象があなたに移るだけよ」

「ええ……処理って俺何されんの……振られるとかじゃないの……？」

「振らないわよ。私、あなたとは長い付き合いをしていきたいと思っているもの。その為に、多少あなたのことを追い詰めるような行為をしてしまったとしても、それは決してあなたのことが嫌いになつたわけではないという事は理解してほしいわ」

「お前それ、DV男の言い訳みたいになつてるからね……？」

「そういや以前にこいつ、小町発案の「嫁度対決」とかいう頭悪い勝負の時、「夫が浮気してる疑いがある時、どうする？」みたいなお題に対して「追い詰める」とかいう超怖い回答してたな……」

その時はただただ雪ノ下の未来の旦那に同情したもんだが、今ではもう他人事じゃないんだよなあ……いや、もちろん浮気とかするつもりなんてないけどね？

とはいえ、どこからが浮気でどこまでがセーフかなんてのは個々人の感性によつてまちまちな部分もあり、雪ノ下雪乃に関してはその基準が通常よりも厳しいという可能性が十分考えられるので異性と関わるような時は特に注意が必要になるだろう。

以前までの俺だつたら女子どころか人と関わる機会自体が少なかったのも要らない心配ではあつたのだが、奉仕部という性質上どうしてもその機会は多くなってくる。

まあそもそも、こうして雪ノ下と付き合うことになつたのも奉仕部に入ったことが大きなきっかけなんだが。

雪ノ下はドン引きしている俺の反応が気に入らないのか不満げな表情で。

「なによ、彼女が言い寄られても全く心配しないあなたよりは、私の方がまだまともだと思うのだけれど」

「いや待て、それはあれだ、お前はそんじよそこらの男にどうこうできるわけないと思つてるからな。ただ、流石に葉山みたいなのが近付い

たら俺だつて焦るといふか、どうにかしたいとは思ふわ。実際、その、年明けにお前と葉山の噂が流れた時とか……アレだったし……」

「……え、あれ気にしてくれていたの？ ……で、でも、全然そんな素振り見せていなかったじゃない……」

「見せられるわけねえだろ、勝手に彼氏面してる痛い奴みたいじゃん……。まあ、葉山の奴には気付かれて笑われたんだけどな……」

「……私は、その、そういうのもっと見せてくれた方が嬉しいわ。えっと、大切にしてもらえているという感じがして……」

雪ノ下は顔を逸らしながらそんなことをぼしよぼしよと呟く。

その声はとて小さいものだったが、俺の胸の中に直接入ってきたかのように、その鼓動を何段階も早くする。

「そ、そうか……あー、そういや、わざと他の男と仲良くして彼氏に嫉妬させる女子っているらしいが、お前も意外とそういうタイプなん……？」

「っ……そ、そこまではしないわよ。でもあなた、付き合ってもあまり変わらないじゃない。相変わらず肝心な所では何考えているのか分かりづらいし」

「それは、その……悪い。ただ、人の根っこまで染み込んだもんつてのは変えようと思つても中々変われないもんでな……それに、お前に対しての想いは共感やら信頼やら安心やら尊敬やら色々なもんが混ざつてて、他の人よりも出しづらいつてのがある」

「えっと……どういふこと？」

雪ノ下は頬を染めながら、上目遣いにこちらを見る。

そんな表情や言葉を向けられて冷静でいられるはずもなく、あまりにもむず痒い空気に思わず反射的に顔を逸らしてしまう。

そして彼女の問いに対する答えというのも、口に出すというのは中々に勇気のいるものだ。自分の中の深い所にあるものを言語化して伝えるというのは、いつだって生半可なことではない。

……とはいえ、彼女からの真剣な眼差しから逃げるわけにもいかない。

俺は小さく息を吐いて出来るだけ心を落ち着かせ、声が震えないよ

うにしながら、再び彼女と向き合う。

「これは自分でも上手く言葉にできないんだが……お前のいつも真っ直ぐで妥協せずに物事に向かう姿勢は素直に尊敬できるし正直格好良いとも思う。実は結構人のこと考えてくれるし優しかったりもするんだが、それを上手く出せない不器用なところとか、猫やらファンシーグッズ好きなどところなんかは、なんつーか、か、可愛いっていうか……」

「かつ……!?!」

「お前とバカな言い合いしてるのも妙な安心感あるし、ずっとこうしていても飽きないとか思っちゃうし……強そうに見えて案外脆いところもあるから目を離せないし普通に心配だし……誰にも渡したくないって独占欲とか、お前のことを何でも知りたいっていう好奇心とか……あの、も、もういいか? メツチャ恥ずいんだけど……」

「え、ええ、そうね。その、わ、私もちよつと……」

俺の方は顔が熱くなりすぎて頭の中が真っ白になりそうな程なのだが、雪ノ下の方も相場に恥ずかしいらしく、俺の胸元に顔を埋めて決してこちらから見えないようにしている。

でもその隠れ方、こっちは更に恥ずかしくなっちゃうんだけど、何とかならないですかね……心臓のバクバクとかメツチャ聞かれてそう……。

そんな俺の焦りなどよそに、雪ノ下はその状態を崩さないまま話し始め、くぐもった声が聞こえてくる。

「そんなことを想う相手というのは、私くらいなのかしら……?」

「……こんなグチャグチャな気持ち、他の人間に対しても持ってたらとつくに頭がパンクしてる」

「ふふ……そう。つまり、少しは特別扱いしてもらっているのね、私」

「……まあ、そりゃ、好きだからな」

雑談のついでのように出てきたその言葉は、この場の時を止めるには十分すぎるほどの力を持っていた。

自然と息を止めていた。

口から出た言葉は決して戻すことはできず、たった一言が物事を大きく変えることだってあるのは今までの人生で身に染みて分かっていることだ。

分かった上で、俺はそれを口にすることを選択した。

俺としては彼女への気持ちをそんな一言で表したくないという想いはあった。

しかし、彼女が同じ言葉を俺に伝えたとき、そんな俺の意地なんか軽く崩れてしまった。

本来俺はあやふやな気持ちで言葉を紡ぐほど散漫な生き方はしてないのだが、どれだけ理屈をつけても否定できない想いが存在することを知っている。

ただ、俺も彼女に伝えたい、伝えなくてはならない。そう思った。………とはいえ、こういった言葉というのは、然るべきシチュエーションで真っ直ぐ向き合って伝えるものであり、間違ってもこんな雑談のついでのように言うものではないということには分かっている。

ただ、そこは俺の中にまだ微かに残っていた意地の残滓ともいうべきか、せめてもの抵抗だ。……いや、うん、恥ずかしいだけです。ヘタレでごめんね？

雪ノ下はしばらく身動き一つ取らなかったが、やがてゆっくりと顔を上げた。

至近距離からこちらを見つめる彼女は柔らかい微笑みを浮かべながら一言。

「やり直し」

ええ……俺の渾身の告白バツサリいっちゃったよこの子……。

というか、雪ノ下家の皆さんはどうしてこんなにも笑顔が怖いのかな？

笑ってるのに、異論反論その他もろもろは認めないとも言いたげな圧力をひしひしと感じる。

とはいえ、俺としても相当頑張った上での一言だったので、そんな

に簡単にやり直せるわけもない。

いやほんと、精神的なアレをメツチャ消費したから今。ゲームにあるような必殺技と同じだ。連発できるものではないわけで。

「あー……ま、また今度な……？」

「……………」

彼女から絶対零度の視線を送られているのは痛いほど分かるが、全力で目を逸らして回避し続ける。

まるでメデューサを相手にしている気分だ。誰か鏡持ってきて鏡。あ、この相手だと鏡使っても可愛い顔が映るだけじゃん何それ無敵か。

避けるわけにはいかない場面もあるというのは、奉仕部での一年で学んだことではあるが、だからといって全てに真正面からぶつかっていく必要もないだろう。

たまには逃げたっていいじゃない。たまにじゃねえな。

そのまましばらく無言の攻防戦……というか俺の防衛戦が続いたが、やがて雪ノ下が溜息をついて。

「……まったく。仕方ないわね、とりあえず今日はそれを口にしただけ許してあげるわ」

「寛大なご配慮に感謝いたします……」

「でも勘違いしないでね、これはあくまで保留というだけの話だから。いずれ必ずきちんと言ってもらおうわよ」

「あー……まあ、その内なその内」

「本当に分かっているのかしら……言っておくけれど、有耶無耶になんてできないから。私、こう見えて根に持つタイプなの」

「見たまんまなんだよなあ……」

先延ばしでしかないというのは分かっている。

ただ、それも決して悪いことではないはずだ。人というのは時間の流れと共に様々なことを経験し、少しずつ変わっていく。変わらないものもあるが、変わっていくものの方が多い。

だから、雪ノ下へ抱く想いは変わらずとも、その表現の方法というのは変わっていくのだと思う。今は無理でも、いずれ、きつと。

……いや、どうなんかな実際。

まあ、顔見て好きとか言うくらいなら何とかかなりそうな気もするが、たまに街中で見かけるバカップルみたいに公衆の面前で堂々とイチャつきまくるとかは一生無理な気もする。俺達の場合は別にそこまでする必要はないと思うが。

ともかく、これで話も一段落ついた。

現在時刻は知らないが、もう夜も遅いというのは何となく分かる。

「……じゃあ、そろそろ寝るか」

「待ちなさい。あなたが永眠する前に私も言いたいことがあるわ」

「永眠はしないけどね？　今ここで俺が永眠したら、お前が重要参考人だからね警察的に」

「心配しないで、私は必ず無実を証明してあなたの分まで強く生きていくわ」

「いや心配だわお前の倫理観とか………で、言いたいことってなんだ？」

一応聞いてみるが、さっきの俺の言葉からの流れで何となくは予想はつく。

思えばプロムのあと、雪ノ下から好きだと言われた時も、こんな感じに勿体ぶって言われたのだった。

あの時は完全に不意打ちだったので、とてつもなく動揺してしまったのだが、くると分かっていたら………いや、それでも緊張してるわ、メツチャ心臓バクバクいつてるし………。

……しかし、しばらく待ってみても、なかなか彼女からの言葉が届いてこない。

どうしたのだろうかと疑問を浮かべていると、彼女は無言のまま一度俺の胸元をきゅつと掴んだ。

驚いて思わず彼女の顔を見ると、暗い部屋の中でも分かるくらいに頬を紅潮させて、じつとこちらに視線を送り………その顔が、次第に、近くに――。

「んっ」

その彼女の小さな声は、すぐ近くで聞こえているはずなのに、どこ

か霞がかって聞こえた。

耳だけではない、その一瞬で五感全てが機能を鈍らせてしまったかのように、ふわふわと空に浮かんでいるかのような感覚が全身を包む。

いや、正確には違った。

五感の中でも唯一、触覚だけは、唇に伝わる瑞々しさと熱さを脳に強く伝えていた。

少しして彼女は離れ、紅潮した顔で微笑み、告げる。

「私も、あなたが好きよ八幡」

返事など、出るはずもなかった。

口にはあの感触と熱さが未だに残り続けていて、その熱が脳の稼働を著しく鈍らせる。

相変わらず五感は口の触覚だけに全リソースを割かれていて、それ以外から伝わる感覚は一向に脳で処理されない。

そのまま、どれだけそうしていたのだろうか。

やがて近くから聞こえてきた小さな声によって、ようやく俺の体が正常な働きを取り戻し始める。

「……あ、あの、そうやって無言でいられると、その、色々と気まずいのだけけど……」

「……………い、いや……………そう、言われてもな……………」

「えっと……………お、おやすみなさい」

雪ノ下はこれでもかと言うくらい顔を赤くして目を泳がせていたが、やがて耐えきれなくなったのか反対方向を向いて寝る体勢に入ってしまった。

もう、本当に勘弁してほしい。

顔はこれまで感じたことがないくらいに熱いし、心臓は暴れすぎて不整脈とか起きないか心配になってくるレベルだし、まるで寝られる気がしない。

女子と同衾して一睡もできない男というのはアニメや漫画などではよくある展開だし、それを見るたびに「大袈裟だろ」などと思っていたのだが、俺が馬鹿だったようだ。

つか、これもあれか、次は俺からしなきゃいけないとかそういうのなんだろうか。

「好き」の一言言うだけでもこんだけ精神摩耗させてんのに、次は名前呼びの上にキスとかどんだけハードル爆上げしてくれちゃってんの……。

ノルマを一つ解消したと思つたら、また増える。

それは何も交際関係だけの話ではなく、何もかも上手くいっている状態というのは恐らく永遠に訪れることはなく、俺達に関しても常に何かしらを抱えて付き合っていくことになるのだろう。

ただ、彼女と関わり続けていく上でのことであればどんな事でも好ましいなどと思えてしまう俺は、以前までとは違う方向に拗らせてしまっているのだと思う。

結論を言おう。

俺の彼女が可愛すぎる。

× × ×

次の日。

二人で雪ノ下のマンションを出ると、もう頂点近くまで達した日光が眩しく思わず目を細める。

案の定あのあとは中々寝付けずに、ようやくウトウトとしてきたのは外が明るくなってきたからだだった。

その結果、普通に朝に起きることなど出来るはずもなく、朝帰りならぬ昼帰りになってしまったというわけだ。

隣を歩く雪ノ下もいつもの凜とした空気はどこへやら、未だ半覚醒のぼーっとした状態だ。

彼女のそんな様子は珍しいので普段だったら眺めていたのか思ったのだろうか、今はこっちも似たような状態なのでそんな気力も湧いてこない。

そのまま大した会話もなく歩いていると、すぐに我が家に着いてし

まった。

「ただいま」

「おじやまします」

その声に反応して、リビングからドタドタというやたら騒々しい足音と共に我が妹が姿を表す。

部屋着ではあるが、普段と比べてそれなりの物を着ているのは、昨夜ウチでお泊り会をした由比ヶ浜や一色がまだいるからだろう。つか玄関に靴あるしな。

小町はニコニコとやたらと好奇心の強い笑みを浮かべて。

「おかえりー。雪乃さんも『ただいま』でいいんですよ？」

「え、あ、そ、その……」

「いいから、そういうのいいから。俺達メツチャ眠くてそういうの相手する余裕ないから」

「……ほう。寝不足」

小町が何かろくでもないことを考えているような気がするが、構ってやる気力もない。

そのままさつきと自室へと戻って寝なおそうと思ったのだが、小町の腕が行く手を阻む。

「寝るなら荷物は置いてって。洗濯物とか入ってるでしょ、小町がやっと上げたげる」

「お、悪いな」

「いいよいいよ、その代わりに後でじっくり色々聞かせてもらおうから。あ、雪乃さんはどうします？ 兄と一緒に寝ます？」

「っ……ゆ、由比ヶ浜さん達はどうしているのかしら」

「二人はリビングでお菓子作——」

小町がそう言いかけると、パタパタという軽い足音が聞こえてくる。

「ゆきのんヒッキー、やつはろー！」

「どーもー、お邪魔してます……ちよ、結衣先輩、顔についてますって」

リビングから出てきた由比ヶ浜と一色はエプロン姿で、なるほど確かにお菓子作りの途中といった感じだ。小町と一緒に来なかったの

は、作業の途中で手が離せなかったのだろう。

とはいえ、それでもなるべく早く迎えようとしてくれたのだろう、由比ヶ浜なんかはエプロンだけではなく頬にまでクリームをつけたままで、一色がそれを指で拭って食べていた……自然にそういう事できるのってすげえな。流石は陽キャ。

すると、そんな俺の内心を見透かしているのか、一色はにやりと不敵な笑みを浮かべて。

「あれ、もしかして先輩、結衣先輩の頬のクリーム食べたかったんですか?」

「ふえっ!?!」

「お前ほんとそういう冗談やめろ……洒落になってないから……」

由比ヶ浜は顔を赤く染めているが、こっちは青くなるしかない。

原因は主に隣からの強烈な冷氣にある。

とにかく、これ以上ここにおいても三度の飯より恋バナ好きな女子達の餌食になること間違いなしなので、さっさと退散することにする。

これが逃げるは恥だが役に立つってやつか。多分違うな。俺それ観てねえし。

「じゃあ俺もう寝るから。おやすみ」

「え、ちよ、帰ってきて早々何ですかそれー! どれだけ寝てもどうせ目は死んでるんですから別に寝なくていいじゃないですかー!」

「何その理論……目は死んでても他は普通に生きてるんだよなあ……」

「ま、まあまあいろはちゃん、ヒツキー疲れてるみたいだし……」

「むー、仕方ありませんね。それなら雪乃先輩から根掘り葉掘り聞きますか」

「なっ……ね、ねえ、比企谷くん。この状況で私をここに残されても困るのだけれど……」

きゅつと袖を握って逃すまいとしてくる雪ノ下。

これが一色なんかなら適当にあしらって逃れることも可能だが、雪ノ下からこんな縋るような目で見つめられると、言い訳並べて逃げることには自信のある俺でも思わず言葉に詰まる。

そしてその一瞬を突くように、

「……ねえ、お兄ちゃん？　ちよつと言いくいんだけどさ」

妹のその言葉に俺達はそちらに視線を向けて……そのまま固まった。

「あー、こういうのはさ、妹としては生々しすぎて反応に困るから、財布とかに入れてくれると小町的には助かるかなーって……」

気まずそうに視線を逸らしつつ苦笑いを浮かべた我が妹の手には何か握られている。

それは小さな正方形の何かなのだが、この空間を支配できるほどの圧倒的な存在感を放っている。

……そういや、昨日適当に鞆の中に突っ込んだままだったわ……。

雪ノ下雪乃は一瞬で顔を真っ赤に染め上げ俯いてしまい。

由比ヶ浜結衣はきよとんと一拍置いたあと、やがて見る見る内に頬を紅潮させ「わ、わー」と小さな声を零し。

一色いろはは獲物を見つけた肉食獣かのように目をキラリと輝かせ、勢いよくこちらを向く。

俺はというと、ただ静かに目を閉じた。

これから巻き起こるであろう質問尋問その他もろもろの言葉の奔流に備えての精神統一……というわけでもなく。

そんなことをしても、次の瞬間には女子高生の持つ莫大な好奇心という怪物に飲み込まれてしまうことは分かりきっているのだが。

俺はとりあえず、これからのことに関しては考えるのを止め、こう強く思った。

ああ、やはり。そう、やはり、だ。

季節が変わっても、学年が変わっても。

彼女ができて、その関係が進んでも。

俺の青春ラブコメは――。